

# 仁和寺境内発掘調査報告

—御室会館建設に伴う調査—

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊

1990

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



「左」字銘綠釉軒丸瓦 (1a)、綠釉軒平瓦 (7)、「仁清」銘陶器鉢 (168)

## 序

昭和 51 年 11 月 1 日に（財）京都市埋蔵文化財研究所は発足し、その初年度の事業の一つとして仁和寺境内の発掘調査の委託を受けた。12 月 10 日に調査を開始し、作業を終えたのは翌年 6 月 18 日である。対象の調査地は新しい御室会館が建設されるということもあって、調査で現れてきた遺跡は壊れるということから、発見された遺構について綿密な調査となった。さらに研究所としては発足当初のものだから慎重さを期した点もあって整理に手間取った。加えて研究所の予想事業量をはるかに越えたものが依頼されてきたので、処理の不慣れさも手伝い、報告作成に着手するのが、現場終了後 11 年を経過し、さらに印刷、完成となって 2 年に及んだことは、誠に遺憾なこととお詫び申し上げる外はない。

ところで、平安京造営後間もない仁和・寛平年間に造営をみた仁和寺は門跡寺院と呼ばれる史上最初の寺院で、当初は、規模壮大なことを誇っていたが、歴史上、中世には平安京と期を一にして衰退してしまった。寛永年間に再興する。その場所は今の場所を占めたと記録は示すが、その地をめぐる数多い子院の跡があり、それらが多くは御室としていたので、果たして今の位置が正しいと文献に頼るだけでなく、埋蔵文化財の資料からも検討すべきだと考えた。筆者が属していた奈良国立文化財研究所と京都国立博物館とが共同で古文書を主とする調査を昭和 36 年（1961）度に行ったとき、建築班を編成、特に円堂跡に比定する辺りにトレンチを設け、旧御室会館の建物が立つ所に円堂跡の痕跡を得た。遺物の中には釉薬をかけた瓦も得た。

このたびの調査はこの円堂跡の東である。いや応なく、円堂跡に伴う施設があると考えられる。そのため調査の進行中はもとより、遺物整理中も慎重であることは十分であったと思う。その成果をここに報告するが、なお誤りがあるかも知れないので、大方の識者のお叱りをいただきたいと願う。

1990 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 杉 山 信 三

## 凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市右京区御室大内33番地の仁和寺境内で昭和51年12月10日から翌年6月18日まで実施した発掘調査の報告である。
- 2 本調査は、仁和寺による御室会館建設に伴う事前調査として実施した。
- 3 遺構図の標高は、東京湾平均海拔高(T.P.)による。また、X軸・Y軸の数値は平面直角座標系VIの数値で、単位はkmである。
- 4 SK・SDなど遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の表記方法に準拠する。  
「付章 遺跡遺物の分類表示方法」『平城宮発掘調査報告』II 奈良国立文化財研究所学報第15冊 奈良国立文化財研究所 1962年
- 5 遺物番号は、土器・硯・墨書土器、瓦、その他の遺物に分け、それぞれに一連番号を付けた。番号は実測図版、写真図版共に共通する。実測図の掲載を基本としたが、細片の陶磁器には例外がある。
- 6 土器は、遺構ごとに一括して説明するのを基本とする。スケールは(1:4)としたが、(挿図24-160)は(1:8)である。
- 7 瓦は緑釉軒瓦・鬼瓦・道具瓦・丸瓦と無釉・灰釉の軒瓦・鬼瓦に大きく分け、一連の番号を付けた。なお、同范品を掲載した場合は、番号の後に(a、b)を付け区別した。
- 8 掲載した都市計画図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図(1:2500)、宇多野・鳴滝・衣笠山・花園を使用して調整した。
- 9 本書の構成は、第1章 調査経過、第2章 遺構、第3章 遺物、第4章 結語 である。
- 10 執筆は、第1章、第2章、第3章1～5・7、第4章1・2および付表を百瀬正恒、第3章6、第4章3を木村捷三郎、第4章2の灰釉陶器鉢の陰刻文様について、第4章4を杉山信三がそれぞれ分担した。
- 11 報告書の作成・編集作業は、所長杉山信三、調査課長永田信一の指導のもので百瀬正恒が行った。

# 本文目次

## 第1章 調査経過

1 発掘調査の端緒	1
2 組織体制	2
3 発掘調査の経過	2
4 日誌抄	8

## 第2章 遺構

1 遺構の概要	11
2 近世から近代の遺構	12
3 平安時代後期から中世の遺構	14
4 平安時代中期の遺構	16

## 第3章 遺物

1 遺物の概要	21
2 平安時代から中世の土器・陶磁器	21
3 硯	34
4 平安時代の墨書土器	35
5 近世の土器・陶磁器	36
6 瓦	39
7 その他の遺物	50

## 第4章 結語

1 円堂院東部の遺構の変遷	51
2 円堂院僧坊出土の土器・陶磁器	55
3 円堂院東部出土の瓦について	58
4 円堂院付属の建物、特に僧坊について	61

付 表	65
-----	----

## 図 版 目 次

巻頭図版「左」字銘緑釉軒丸瓦 (1a)

緑釉軒平瓦 (7)

「仁清」銘陶器鉢 (168)

図版 1 遺構 仁和寺境内の主要遺構復元図

図版 2 遺構 遺構実測図 (第 1 面)

図版 3 遺構 1 北トレンチ遺構実測図 (第 2 面)

2 北トレンチ遺構実測図 (第 3 面)

3 北トレンチ遺構実測図 (第 4 面)

4 北トレンチ遺構実測図 (第 5 面)

図版 4 遺構 遺構実測図 (第 4・5 面)

図版 5 遺物 SD30 出土土器・陶器実測図

図版 6 遺物 SD30 出土土器・陶器実測図

図版 7 遺物 SD34・33・28、SK47・46・44 出土土器・陶器実測図

図版 8 遺物 平安時代の硯拓影・実測図

図版 9 遺物 緑釉軒丸瓦、緑釉軒平瓦拓影・実測図

(1a・1b・2・3・4a・4b・5a・5b)

図版 10 遺物 緑釉軒平瓦拓影・実測図 (6～11)

図版 11 遺物 緑釉鬼瓦、緑釉道具瓦拓影・実測図 (12～17)

図版 12 遺物 緑釉丸瓦拓影・実測図 (19～21)

図版 13 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (22～30)

図版 14 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (31～40)

図版 15 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (41～50)

図版 16 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (51～60)

図版 17 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (61～70)

図版 18 遺物 無釉軒丸瓦拓影・実測図 (71・72・73a・73b・74～78)

図版 19 遺物 無釉軒平瓦拓影・実測図 (79a・80～87)

図版 20 遺物 無釉軒平瓦拓影・実測図 (88・89・90a・90 b・91～93)

- 図版 21 遺物 無釉軒平瓦拓影・実測図 (94~99・100a・100 b・101a・101 b・102~105)
- 図版 22 遺物 無釉軒平瓦拓影・実測図 (106 ~ 120)
- 図版 23 遺物 無釉軒平瓦拓影・実測図  
(121a・121b・122 ~ 126・127a・127b・128a・128b)
- 図版 24 遺物 無釉軒平瓦、灰釉軒平瓦、無釉鬼瓦拓影・実測図  
(129a・129b・130a・130b・131a・131b・132 ~ 136)
- 図版 25 遺物 金属製品、甌、礎石実測図 (1 ~ 17・22 ~ 24)
- 図版 26 遺跡 仁和寺全景と発掘調査地点 (南から)
- 図版 27 遺構 1 北トレンチ SA15、SX16、SC20 (北東から)  
2 北トレンチ SD02・03、SA15、SX16、SD17、SC20 全景 (東から)  
3 北トレンチ SX16、SD17 細部 (東から)
- 図版 28 遺構 1 SB26、SD28・30・31・36 全景 (北から)  
2 南トレンチ全景 (東から)  
3 南トレンチ SD28 全景 (北から)
- 図版 29 遺構 1 北トレンチ SA15、SD30・31・33 ~ 37 全景 (北東から)  
2 北トレンチ SD31 石組細部 (北東から)  
3 東トレンチ SB26、SD30・40、SX32 全景 (北から)
- 図版 30 遺構 1 北トレンチ SX50 (東から)  
2 北トレンチ SA15、SX50 断面 (北東から)
- 図版 31 遺構 1 東トレンチ東壁南部の土層堆積状態 (北西から)  
2 南トレンチ南壁西部の土層堆積状態 (北東から)  
3 北トレンチ東部遺構確認トレンチの土層堆積状態 (南東から)
- 図版 32 遺物 SD30 出土土器・陶器
- 図版 33 遺物 SD30 (29・48)・SD33 (63・65)・SD36 (70)、SD28 (76・77)・  
SK47 (80・83・85)・SK45 (99) 出土土器・陶器
- 図版 34 遺物 1 中国陶磁器 (青磁)  
2 中国陶磁器 (白磁)
- 図版 35 遺物 平安時代の硯
- 図版 36 遺物 平安時代の墨書土器、文字陰刻陶器
- 図版 37 遺物 「仁清」銘陶器

- 図版 38 遺物 緑釉軒丸瓦 (1a・1b・2・3・4a・4b)
- 図版 39 遺物 緑釉軒平瓦 (5a・5b・6～9・11)
- 図版 40 遺物 緑釉鬼瓦、緑釉道具瓦、緑釉丸瓦 (12・13・16・17・19・20)
- 図版 41 遺物 無釉軒丸瓦 (22～24・26・27・29・31)
- 図版 42 遺物 無釉軒丸瓦 (34～40)
- 図版 43 遺物 無釉軒丸瓦 (41・42・44～48・50)
- 図版 44 遺物 無釉軒丸瓦 (52・54・56～58・60～62)
- 図版 45 遺物 無釉軒丸瓦 (63～70)
- 図版 46 遺物 無釉軒丸瓦 (71・72・73a・73b・75～77)
- 図版 47 遺物 無釉軒平瓦 (79a・79b・80・81・84・86・87)
- 図版 48 遺物 無釉軒平瓦 (88・89・90b・91～93・96)
- 図版 49 遺物 無釉軒平瓦 (94・95・97～99・100b・101b・102・103)
- 図版 50 遺物 無釉軒平瓦 (104～111・115～118)
- 図版 51 遺物 無釉軒平瓦 (119・120・121b・122～126・127b・128b)
- 図版 52 遺物 無釉軒平瓦、無釉鬼瓦  
(129b・130a・130b・131a・131b・132・133・135・136)
- 図版 53 遺物 1 金属製品  
2 錢貨、甌、凝灰岩礎石



## 挿 図 目 次

挿図 1	調査地位置図（国土地理院、1：25,000、京都西北部）	1
挿図 2	仁和寺境内の調査地点（京都市都市計画基本図、1:5,000、宇多野・鳴滝・衣笠山・花園）	3
挿図 3	トレンチ名とグリッド配置図	4
挿図 4	測量ポイント設定図（京都市都市計画基本図、1:2,500、宇多野）	5
挿図 5	近世整地土層の重機掘削（南西から）	8
挿図 6	SD30 の調査風景（北から）	9
挿図 7	SD03A 平面・断面図	12
挿図 8	SE07 平面・断面図	13
挿図 9	北トレンチ土層断面図	15
挿図 10	SB26 復元図	16
挿図 11	SD30・39・40 土層断面図	17
挿図 12	SD31 平面・断面図	17
挿図 13	SD33 土層断面図	18
挿図 14	SX38 平面・断面図	19
挿図 15	南トレンチ南壁断面図	20
挿図 16	緑釉陶器香炉、水注把手	24
挿図 17	灰釉陶器鉢の陰刻文様	26
挿図 18	中国陶磁器実測図	27
挿図 19	SB26 柱穴、SK25・45 出土土器・陶磁器実測図	31
挿図 20	遺物包含層など出土土器・陶器実測図	32
挿図 21	輸入陶磁器	33
挿図 22	SD19 出土土器・陶器実測図	33
挿図 23	平安時代の墨書土器実測図	35
挿図 24	SD04 出土土器・陶磁器実測図	36
挿図 25	「仁清」銘陶器実測図	37
挿図 26	「仁清」銘拓影	37

挿図 27 「左」字銘緑釉軒丸瓦・無釉軒平瓦拓影	39
挿図 28 緑釉丸瓦 (21) の範傷拓影	40
挿図 29 緑釉道具瓦 (18)	41
挿図 30 無釉軒平瓦拓影 (79b)	42
挿図 31 軒平瓦の刻文拓影	44
挿図 32 種字銘軒瓦拓影	46
挿図 33 銭貨拓影	50
挿図 34 円堂院内主要遺構配置図	54
挿図 35 SD30 出土土器の器種構成	56
挿図 36 灰釉陶器鉢の陰刻文様 (部分)	58

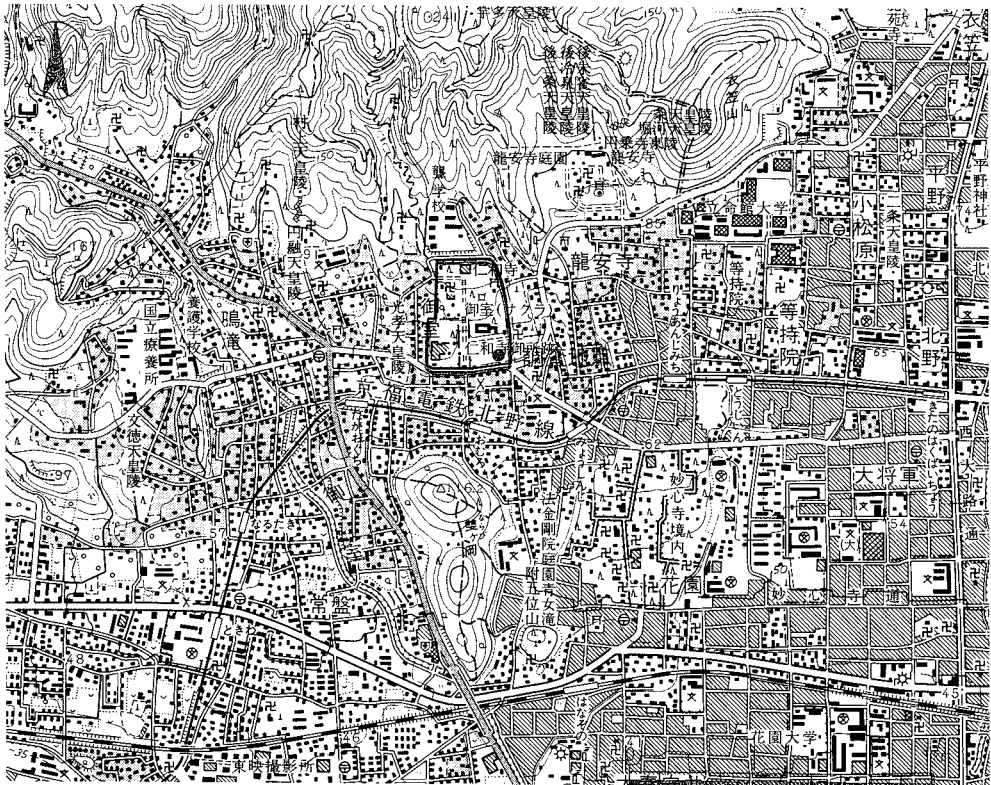
## 付 表 目 次

表 1	測量ポイントの成果表
表 2	硯の観察表
表 3	遺構別軒瓦の出土数
表 4	緑釉軒丸瓦法量表
表 5	緑釉軒平瓦法量表
表 6	無釉軒丸瓦法量表
表 7	無釉軒平瓦法量表
表 8	緑釉軒丸瓦観察表
表 9	緑釉軒平瓦観察表
表 10	緑釉鬼瓦・道具瓦・丸瓦観察表
表 11	無釉軒丸瓦観察表
表 12	無釉軒平瓦・鬼瓦観察表
表 13	銭貨の法量表

# 第1章 調査経過

## 1 発掘調査の端緒

京都市右京区御室大内町 33 番地に所在する仁和寺境内は、「仁和寺御所跡」として史跡に指定されている。仁和寺は寺城南東部の空地に御室会館の新築を計画したが、計画地点の西には旧御室会館があり、大正 4 年 (1915) の会館建設に際し、金・銀合子、越州窯青磁合子などが出土した。その後、昭和 37 年 (1962) には同建物の南・西部で文部省科学研究費による調査 (代表 梅津次郎) が、共同研究者杉山信三氏によって行われ、八角円堂が検出され、先に出土した遺物は円堂の鎮壇具と認められた。他に境内では、昭和 47 年 (1972) の調査で南北方向の築地が検出されている。円堂に隣接する新しい御室会館の計画地点でも、仁和寺に関連する遺構の検出が十分予想されたため、京都市文化財保護課の



挿図 1 調査地点位置図 (国土地理院、京都西北部) (1:25,000)

指導により、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が事前調査を担当した。発掘は昭和 51 年 (1976)12 月 10 日に開始し、翌年 6 月 18 日に現地調査を終了した。

## 2 組織体制

発掘調査の開始から報告書の作成まで、10 数年が経過したので、人員の移動も多く、調査当初と整理開始時の組織体制を掲げる。

組織体制（昭和 51 年度）

理事長 村田治郎、副理事長 福山敏男、専務理事 清水千里

所 長 杉山信三

総務部 松井克也（部長）、村内義廣（課長）、福西 喬、村木節也、吉田悦子、福島京子

調査部 田辺昭三（部長）、浪貝 毅（課長）、調査員 16 名

資料部 木村捷三郎（部長）、江谷 寛（課長）

現地調査は、百瀬正恒、堀内明博、牛嶋 茂（写真撮影）が担当した。

組織体制（昭和 62 年度）

理事長 増田 駿、専務理事 阪本雅人

所 長 杉山信三

総務部 杉原和彦（部長）、片山 巖、村木節也、金島恵一、本田憲三、菅田悦子、  
上村京子、夏原美智代、小松佳子

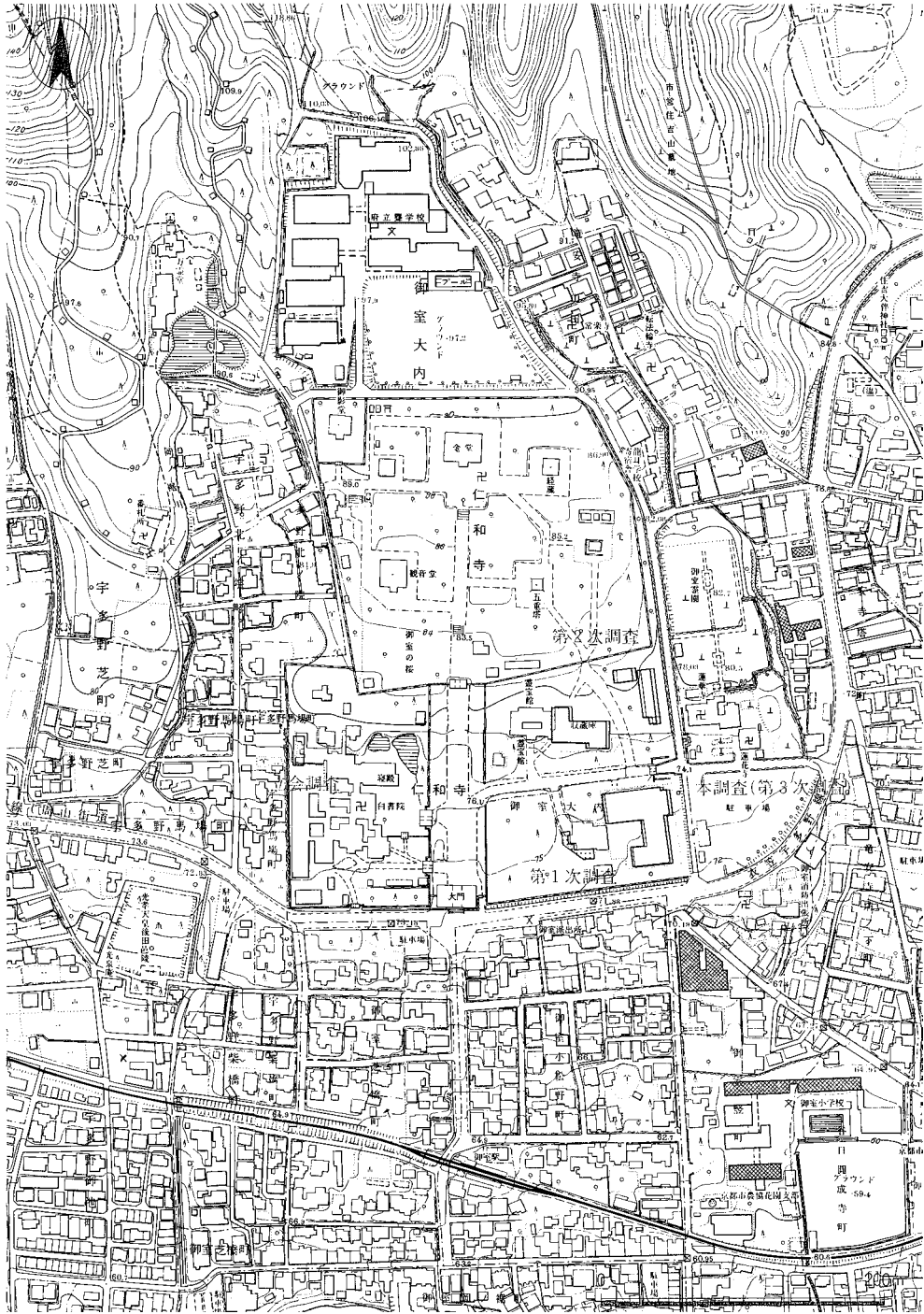
調査部 永田信一（課長）、調査員 30 名

整理作業は、百瀬正恒・牛嶋茂（写真撮影）があたり、長宗繁一、鈴木久男、鈴木廣司、  
吉崎 伸、吉村正親が協力した。

## 3 発掘調査の経過

### 調査地の地形の概要

仁和寺は南北にのびる丘陵上にあり、境内は、南北 350m、東西 290m の広さがある。形は南がやや広く北西部が一部狭い台形をし、東部と西部は崖になり、北が高く南へ傾斜する。これを現在はず南北に二分し、伽藍の中心部を北部にとり、南部の西半は本坊、東半はさらに二分し収蔵庫が北に、旧御室会館が南に造られている。建物の配置は大門・中門ならびに金堂を通る中軸線の東に五重塔、西に観音堂、南西部に本坊があり、中軸の方位はほぼ真北である。境内南端の大門の標高は 74m、北辺の金堂の標高は 89m で、比高差



挿図2 仁和寺境内の調査地点(京都市都市計画基本図、宇多野・鳴滝・衣笠山・花園)  
(1:5,000)

は15mを測り、中門のあたりで大きく二段に造成されている。

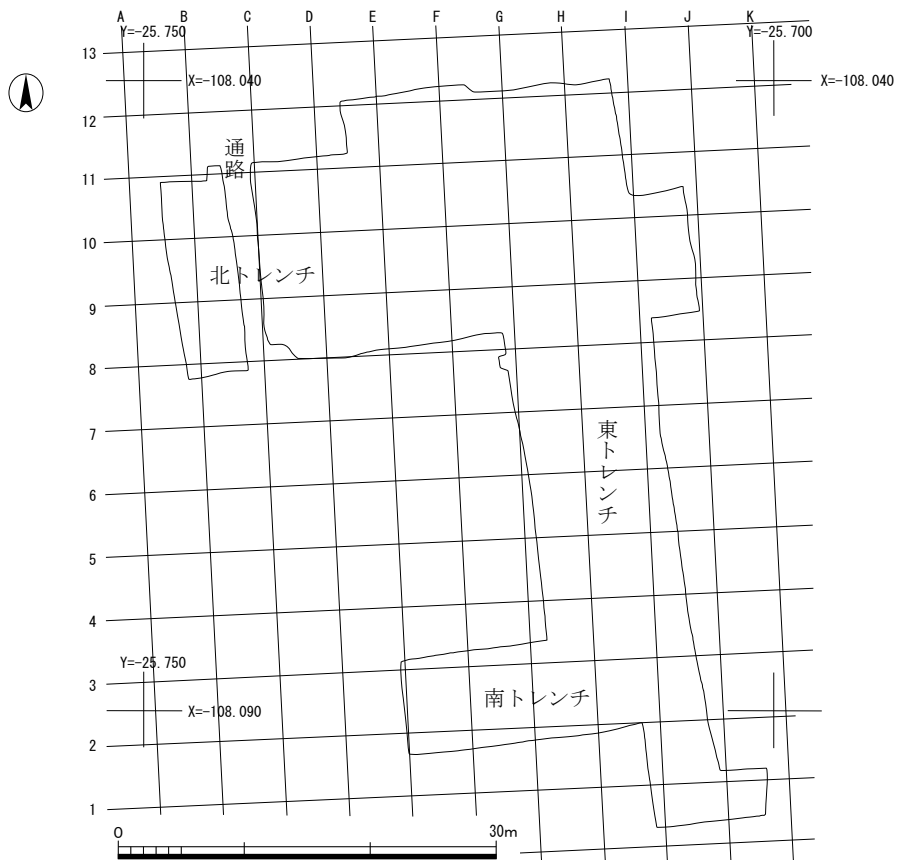
調査地点は、境内東南部の旧御室会館東側で寺域の東南隅を占める。この地点の標高は74mで寺域内としては最も低い地点である。対象面積は約1,200㎡で、内620㎡を調査した。

調査前は、約3分の1に疎な灌木が生え、北部の一部は残土の置き場になるなど荒れていた。地形は、北部がやや高く段をなし、南部は低く、約2mの比高差があった。

### トレンチの設定と名称

トレンチは、新築建物の平面形態や規模を勘案して、予定地の部分に「コ」の字形に設定した。また、トレンチの主軸方向は、真北に対して約7度西に振る寺域の東側土塁の方向を基準に設定した。

名称は「コ」の字画に添い、北部の東西トレンチを北トレンチ、中央の南北トレンチを東トレンチ、南の東西トレンチを南トレンチとした。なお、北トレンチは南西部に住宅が



挿図3 トレンチ名とグリッド配置図(1:600)

あり通路確保のため分断された。

調査面積は北トレンチ 344 m<sup>2</sup>、東トレンチ 150 m<sup>2</sup>、南トレンチ 126 m<sup>2</sup>の合計 620 m<sup>2</sup>であるが、下層遺構の調査時には、重機の搬入・掘削の都合などを考え東部の面積を縮小した。

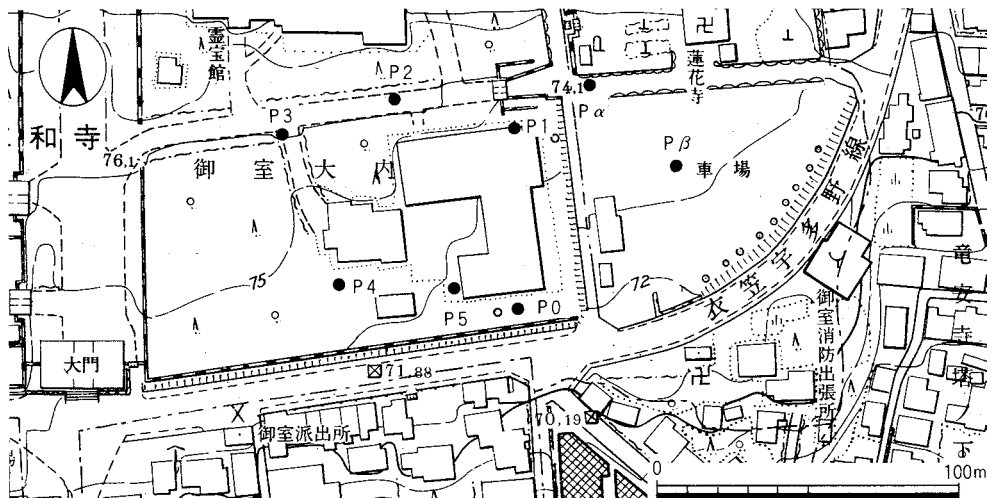
### 遺構検出の過程

遺構の検出は、当初南部からトレンチ全体の表土層（約 20cm）を機械で除去した後、手掘りで作業を進めた。しかし、東トレンチ南東部の近代土壌を掘り下げた結果、近世遺構面から 1.5m 下層で遺構面が検出され、同様の状況は南トレンチ西部の土層断面でも確認できたので、下層遺構面までは近世の整地層と判断した。

第一面の遺構検出、実測の終了後、目的とした平安時代の遺構面を検出するため、南トレンチ全域と東トレンチの大半の近世整地層を重機で平均 1.0m、約 250 m<sup>2</sup>を掘り下げた。北トレンチは当初の重機掘削後、順次全面を手掘りで遺構検出を行ったが、北トレンチ北部は遺構面が重複し深いので、平安後期の面（第3面）で西部の調査は一端中断し、調査の最終段階で3箇所にとレンチを設け、平安時代の遺構を確認した。結局、トレンチの全域で遺構を2面検出したが、北トレンチでは各時代の遺構が重なり、合計5面（時期）の遺構を確認した。

### グリッドの設定方法と測量

トレンチ掘削の終了後、測量ポイント P0、P1 をトレンチ東部の南端と北端に打ち、遺構実測用の原点とした。調査地のグリッドは 5m 方眼とし、南西隅を 1、A の原点とした。南北方向を 1、2、3、東西方向を A、B、C と割り、グリッド名を付けた。ちなみに P0 ～ P1 のラインは I ラインになる。遺方の設定は、南北に段差のある現場の状況に合わせて



挿図4 測量ポイント設定図（京都市都市計画基本図、宇多野）(1:2,500)

東西方向に5本、南北方向に4本設定した。

測量は当初、実測・割り付け用に設定したP0、P1を基点とし、トレンチと八角円堂の検出地点を包括する区域に、P2～P5の4点を設定して閉合トラバースを組み、別に天測用にP $\alpha$ ・P $\beta$ 2点を加え合計8点を設置した。その後、昭和62年(1987)4月にトラバース点の再測を行い、P0、X=-108,101.088m、Y=-25,710.229m、P1、X=-108,039.665m、Y=-25,712.796mの平面直角座標系VIに示される数値を得た(表1)。

標高は、仁和寺東門の北礎石を10.0mの仮標高として実測を行い、後日に標高の値、76.55mを得た。この平面直角座標と標高の数値をもとに遺構図の整理を進めた。

### 発掘調査の関係者

現地調査は、昭和51年(1976)12月10日から翌年6月18日まで実施した。雪の多い寒い冬から梅雨の季節まで、多数の関係者の協力を得て作業を無事終了することができた。次に関係者の氏名を掲げる。

**仁和寺** 管長 森 諦円、宗務総長 立部瑞祐

**工事関係** (財)建築研究協会 大森健二、大高土木株式会社

**作業員** 月森六三、楠 義次、高橋富之助、明石喜三郎、(故)小黒満郎、西垣 潔、本田 勇、本田敏子、本田憲三、上杉初雄、島津静雄、中川重次郎、加藤令之、畑中元次郎、牧野 誠、石井初喜、西田末四郎、田中元二郎、山口正義、中川恵美子、加藤ももよ

**補助員** 和泉田 毅、家崎孝治、久世康博、竹井治雄、沖田侃哲、清水恵三(大学OB、他)、山川弘美、片貝 剛、小野信義、中辻宣之、長谷川浩一、中村卓郎、坂口 晃、出口 勲、浜 修(立命館大学)、小貫 充、福田貴久、岩崎哲志、山本薫久、広瀬俊幸、平田 哲、福井義彦、西岡 敏(竜谷大学)、和田いずみ、谷口美紀子、安積陽子、青柳寿美子、前田喜美子、水野由子、原口鹿文、水野直人、永田 達、小島敦司(同志社大学)、長谷川洋子、西鳥羽礼子、浦山明子、吉川元子、大貫由美子、神代京子、竹内美恵子、竹之内京子(橘女子大学)、長沢加代子、田中節子、有安祐子、蛭子美代子、野々村恵津子、松下加代子(京都家政短期大学)、藤井ゆかり、山羽敦子、米山清見(精華短期大学)、山本恵子(同志社女子大学)、松井禎之(摂南大学)、乾 正和(大阪工業大学)、寺島 勉(京都大学)、渡辺丈俊(花園大学)、田村直志(近畿大学)、吉田 稔(仏教大学)、滝本三和(ノートルダム女子大学)(大学名は調査時)

### 報告書の作成

現場作業を終了した後、遺物の洗浄を行い、次に図面の整理を行っ



た。本格的な整理作業は、所長杉山信三、理事木村捷三郎、調査課長永田信一の指導のもとで、昭和62年(1987)年11月から実施し、間に発掘調査による中断を含むが、昭和64年(1989)秋に終了した。

作業は遺構の整理を長宗繁一・百瀬正恒、遺物の整理を渡辺和子・出口 勲・林ひろみ・桜井みどり・清藤玲子・鈴木久男・百瀬正恒、測量・測量成果の整理は辻 純一・宮原健吾、写真撮影を牛嶋 茂・村井伸也が、その他研究所の所員が分担し作業を行った。

調査の過程から、報告書の作成にいたるまで多数の関係者から御教示を得た。以下、芳名を列記し感謝したい。なお、報告書の刊行が遅延したため、すでに物故者が4名おられ、御教示を十分活かすことができなかつたことをお詫びします。

上原真人(奈良国立文化財研究所)、植山 茂、佐々木英夫(京都文化財団)、尾上 実(大阪府埋蔵文化財協会)、木村泰彦(長岡京市埋蔵文化財センター)、後藤健一(静岡県湖西市教育委員会)、柴尾俊介・佐藤浩司(北九州市埋蔵文化財調査室)、鈴木重治(同志社大学)、山川信夫・狭川真一(太宰府市教育委員会)、高橋美久二(京都府立山城郷土資料館)、寺島孝一(東京大学)、立石堅志・森下恵介(奈良市埋蔵文化財調査センター9)、土橋理子(奈良県立橿原考古学研究所)、中ノ堂一信(東京国立近代美術館)、原口正三(甲子園短期大学)、橋本久和(高槻市立埋蔵文化財調査センター)、星野猷二(伏見城研究会)、福山敏男・松井忠春(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、水島稔夫(下関市教育委員会)、吉田恵二(国学院大学)、吉岡康暢(国立歴史民俗博物館)、山崎純男(福岡市教育委員会)、RICHARD L. WILSON(アメリカ、テキサス州ライス大学)、(故)田中重久、(故)森田 勉、(故)中村 研(所属は現在)

註

- 1 『開山法皇宇多天皇一千五十年御忌、弘法大師御入定一千百五十年御遠忌大法会記録』 総本山仁和寺真言宗御室派宗務所 1984年
- 2 小山富士夫「仁和寺出土の越州窰盒子と影青盒子」『支那青磁史稿』文中堂 1943年
- 3 杉山信三「宇多野に関係した埋蔵文化財調査一史跡仁和寺御所跡(円堂院跡)発掘調査報告」『京都市文化観光資源調査会報告書』1974年  
杉山信三「平安京を発掘する(二)」『史迹と美術』44号 1977年
- 4 近畿大学理工学部建築学科昭和47年卒業生の内、杉山研究室ゼミナール所属の秋本秀明、小畑順治、近藤秀志、富田利昭、吉岡則行の調査にもとづく卒業論文。
- 5 調査後本坊の北部で立会調査が実施された。『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1981年

## 4 日誌抄

昭和 51 年 (1976)

12 月 10 日 調査開始。現場事務所に機材を運ぶ。調査区を設定した後、南部から重機で遺構面の検出のため掘削を開始する。

12 月 12 日 仁和寺と調整のため、15 日まで作業を中断する。

12 月 16 日 重機掘削を再開する。

12 月 20 日 北トレンチで第 2 層の暗褐色泥砂層が高くなり、比高差約 1.3m の段ができる (SA15)。段の南部では東西溝 (SD02) を検出する。緑釉軒丸瓦が表土層から出土。

12 月 23 日 重機による掘削が終了する。南トレンチから第一面の遺構検出を行う。

12 月 27 日 北トレンチの北東隅、H11・12 区で近代の土壌を検出する。土壌を掘り下げ、底部から石列 (SC20) を発見する。

昭和 52 年 (1977)

1 月 5 日 昨年末検出した近代の土壌を完掘し、径 10.0cm の石が東西に並ぶのを確認する。SA15 の中央部から西部にかけて第 2 層の掘り下げ作業を行う。

1 月 6 日 SA15 の東部、10H 区に瓦列 (SX18) があり基壇状を呈する。

1 月 11 日 SD02 の掘り下げ、南肩部で護岸



挿図 5 近世整地土層の重機掘削 (南西から)

の石積みを確認する。溝内の上層から棧瓦が出土する。

1 月 18 日 SD02 の写真撮影。撮影後、SD02 の通路から西側の SD02 の掘り下げ作業。上層の黒灰色泥土層から棧瓦など近世の遺物が出土した。

1 月 19 日 前日の SD02 西端部は広がり、池 (SG05) になる。池の中央部には石列があり、2 時期に分かれ、南側が古く SG05A、北側が新しく SG05B とする。

1 月 20 日 溝 (SD03) を掘り下げる。SD03 は 2 時期あり東溝 (SD03B) が新しく、西溝 (SD03A) が古い。「L」字状石列 (SX14) の東部は、SD03 西岸の護岸とわかる。測量ポイント P0 をトレンチ南部に、P1 を北部に設定、5m 間隔で割り付けを行う。

1 月 22 日 北トレンチ南部の遺構検出作業。井戸 (SE06・07) などを検出する。

1 月 24 日 東トレンチ第一面の遺構検出作業。東トレンチで 5 円硬貨を出土する土壌を掘り下げる。-1.5m まで黄褐色泥砂層を中心とする柔らかい土層が続く、遺物を含むことを確認する。黄褐色泥砂層は整地層と判断。

1 月 29 日 南トレンチでも G2・H3 区の柱穴群以外に遺構を検出できないため、西半部を 20.0cm 前後の厚さで掘り下げる。

2 月 4 日 南トレンチ柱穴群調査。底には根石があり、南北に並び対になるが建物としてはまとまらない。東トレンチの北部で花崗岩の切石を 2 基検出 (SB01)、間隔は 4m ある。

2 月 9 日 南トレンチ西部に土層確認トレンチを設定。近世の整地土層が厚いのを確認。大規模な南北溝 (SD04) を検出する。

2 月 14 日 重機で南・東トレンチの近世整測量を終了する。

2月16日 重機による近世整地土層の掘削作業を南トレンチの西部から開始する。

2月23日 北トレンチで遺構の検出作業を行う。小石と細片瓦の集積遺構(SX16)を検出する。SX16は暗褐色泥砂層を掘り下げると検出でき、暗黄褐色砂泥層がベースになり、北トレンチの10ラインに沿って東西に広がる。暗褐色泥砂層には土器を含まない。

2月27日 東トレンチの北部で整地土層が薄くなるので、途中の重機掘削を終了する。東トレンチの褐色泥砂層(3層)を掘り下げる。

2月28日 東トレンチの遺物包含層を掘り下げる。上層の黄褐色泥砂層から多量の瓦が出土する。下層からは10世紀の土器が出土。

3月3日 SX16の北部には明確な遺構がないため、SX16に付属する溝(SD07)から1.0m離し北部を掘り下げる。築地(SC20)が北トレンチ全体に広がることを確認する。

3月8日 東トレンチで平安時代の遺構検出作業を行う。南北溝(SD30)を検出し、その西は一段高く、小規模な柱穴があり並ぶ。掘立柱建物(SB26)とする。

3月10日 重機掘削で消失した南・東トレンチの遺方設定。レベルは、仁和寺東門の北礎石を10.00mの仮標高とする。

3月15日 東トレンチ・南トレンチの平板測量を終了する。

3月19日 北トレンチの平板実測を行う。

3月26日 SX16、築地(SC20)の実測。SX14とした石列の周辺部を掘り下げ、瓦溜めを検出し、土壙(SK25)とする。

3月30・31日 雨。室内で整理作業。

4月5日 SD30の掘り下げ、南トレンチでは土師器、緑釉陶器の小破片が多量に含まれる。近代の土壙(SK09)を掘り下げる。土壙の底で溝(SD33)を検出する。「左」字銘より後出の緑釉軒丸瓦が、検出の過程で出土する。SD02の実測作業を終了する。



挿図6 SD30の調査風景(北から)

4月6日 SD30の掘り下げ。SK09の下層で検出したSD33の規模を確認するため、SK09の肩のラインを生かし遺物包含層を掘り下げる。

4月8日 北トレンチの瓦溜(SK25)の写真撮影、撮影後、東西と南北方向にセクションを設定し掘り下げる。瓦が多量に出土。

4月11日 北トレンチの平面実測を終了。SX16の瓦・石を取り外しながら、8箇所で補足実測を行う。

4月12日 SD02西部の石組みを補足実測する。SE07の掘り下げを開始する。

4月14日 東トレンチ北部から北トレンチの遺構検出作業を行う。

4月15日 SK25断面の写真撮影。その後遺物取り上げ。北トレンチ東部掘り下げ。

4月20日 SD30の北半部調査中に瓦溜(SK24)を検出。1×1.4mの間に瓦が集中し、河上瓦窯産のほぼ完形の軒平瓦が出土。写真撮影後、平面図・断面図を作成する。

4月22日 H10区で石組溝検出。溝内は茶褐色土層が堆積土、溝内に石の落ち込みはなく、暗渠かどうか不明。SD30の既検出部と繋がり、SD31として調査する。石組みの上面には平安後期の瓦が含まれる。

4月27日 北トレンチSD30の西部を調査、径0.2～0.3mの小規模な柱穴が並ぶ。柱穴に

は一部、炭混じりの焼土を含むものがある。SK25 完掘状態の実測を行う。

4月29日 前日の雨でぬかるみ、現場作業中止。図面整理と遺物を洗う。

5月6日 北トレンチ柱穴群を調査。北トレンチの南部で2m間隔で礎石状の石を検出した。

5月11日 南トレンチ西部の遺構を検出、土壙(SK44)には土師器甕が埋まる。小穴に切られる土壙(SK43)には焼土層が詰まる。北トレンチの西部、C8～D9区には薄い炭化物層がある。

5月12日 南トレンチで南北方向の溝(SD28)の調査。瓦溜を(SK45)として調査。SD28南部の護岸石部分と瓦溜石列(SX49)間は6.7mある。SD26の北端部の全景写真。東トレンチからSB26区の実測を開始する。

5月18日 北トレンチでSB26の西側の雨落溝(SD28)を検出、南トレンチ検出の溝と続く。SD28の溝肩部には護岸用の石がある。1点は凝灰岩で方形、この石はSK25の瓦を取り上げた時点で検出した。SB26の柱穴を掘り、茶褐色の埋土から10世紀の遺物が出土する。

5月19日 北トレンチ西部の雨落溝(SD28)を調査。雨落溝(SD28)西部の清掃作業。SK47土壙の断面実測を行う。

5月20日 南トレンチのSD30北岸の東西断面を実測。北トレンチ西部を掘り下げ、炭層から10世紀後半の土器が出土する。

5月27日 ヘリコプターによる全景写真のため、全トレンチの清掃を早朝から実施する。

5月30日 北トレンチの北部でSC20の東部を残して掘り下げる。高まり状遺構(SX50)を検出する。

6月1日 平安時代遺構面の実測開始。北トレンチの南西部、E8・F8区でSB26の柱穴の延長を確認する。

6月3日 SD30の石組み溝部分(SD31)の細部実測。SD33の実測作業。SK46を掘り下げる。東部が深く、底には集石がある。

6月6日 遺構確認トレンチの掘り下げ作業を行う。

6月9日 北トレンチSD33・34・35・36の実測作業。土壙(SA15)を調査する。SD36の東部はSD31の石組みと重なり検出が困難である。

6月11日 北トレンチ南壁の断面図を作成する。SD28と土壙との関係を検討する。土壙まで溝がのびていることを確認する。

6月12日 北トレンチ西壁の断面図を作成。

6月13日 北トレンチの遺構確認トレンチの掘り下げ。SC20の直下にSX50がある。

6月14日 東端のトレンチでSX50・SD33・土壙の関係が明確になる。整地層下部からは瓦の出土が少ない。北トレンチ北壁の断面実測を行う。トラバース測量を行う。

6月15日 東端の遺構確認トレンチの断面で検出した柱穴を調査、10世紀の土器が出土する。北トレンチの東壁で断面図作成。

6月16日 SD30の土層断面を実測して取り外す。SB26の主要柱穴を断ち割る。

6月17日 トレンチ周辺を平板測量。中央の遺構確認のトレンチを調査終了。南トレンチ南壁の下層断面図の作成。南トレンチ北壁の断ち割りで幅2mの溝状遺構を検出する。トレンチ内での作業を終了。

6月18日 旧御室会館を含むトレンチ周辺部の平板測量を行い、現場の作業を終了する。

## 第2章 遺構

### 1 遺構の概要

調査前の現地は北西部が高く南部が低い地形で約2mの標高差があった。この差は後述するように仁和寺の創建以前の自然地形や高低差のある遺構の性格に起因するもので、平安時代後期から中世の遺構の密度や近世の再建に伴う整地土層の厚さとも関係していた。

調査によってトレンチ全域で遺構を2面検出したが、北トレンチは各時代の遺構が重なり、合計5面(時期)の遺構を検出した。以下、時代ごとに遺構の概要を述べる。

**近世から近代の遺構(第1面)** 仁和寺再建に伴う大規模な整地層の上に成立している(挿図15、図版31)。検出した遺構は、溝、池、井戸、土壇、柱穴、礎石などで、北トレンチに集中する。北トレンチ中央部の10ライン(挿図3)から北部は遺構面が高くテラス状になり、低い南部と遺構面を二分している。この境には東西溝(SD02)、池(SG05)がある。テラス状に高い北トレンチの北部には、顕著な遺構はないが、低い南部では溝(SD02・03)、井戸(SE06～08)、土壇(SK12)などを北トレンチで、東西溝(SD04)、柱穴群を南トレンチで検出した。東トレンチでは花崗岩の礎石(SB01)を北部でみつけた。SD02の南部の遺構群は近世の中期以降のものが多く、SD04は近世前期の遺構である。

**平安時代後期から中世の遺溝(第2・3面)** 北トレンチに限定され、土塁(SA15)、築地(SC20)、溝(SD17)、土壇(SK25)などがあり、SA15のように平安時代中期から継続する遺構もある。当該期は北部に寺域内を区画する土塁、築地などの遺構があるのに対し、南部では遺構が検出されず、南部の低地は未利用の空間であった。

**平安時代中期の遺溝(第4・5面)** トレンチの全域で検出した。掘立柱建物(SB26・27)、雨落溝(SD28・30)、土塁(SA15)、溝(SD33～36)などが中心になる。SB26は桁行12間以上、梁間4間の南北棟の建物である。SA15は東西方向の土塁で幅3.0m、高さ1.6m、延長36m確認した。SD30・33～36は寺域東北部の幹線排水路で、当初は南流するSD33を土塁の北部で東に流し(SD34)、次にSD31・30を介して南に流すが、後にSA15を突き破り(SD35)、そして東に流し(SD36)、次に南流するように付け替えている。

中期の遺構はSB26を中心に、北部には土塁を築き敷地の区画をし、建物の周囲には雨落溝(SD28・30)を掘り巡らし、土塁と水路が建物を守るために有機的に関連している。

## 2 近世から近代の遺構（挿図7～9・15、図版2・27）

近世から近代の遺構には溝（SD02・03）、池（SG05）、井戸（SE06～08）、土壌（SK09～12）、柱穴群、礎石（SB01）などがある。南トレンチのSD04は近世前期の遺構であるが、他は近世中期以降のものである。

**SB01** 東トレンチ F7・G7 区で検出した礎石列。礎石は花崗岩で2個検出した。礎石は一辺0.4mの方形、東西に並び4mの間隔がある（図版2）。

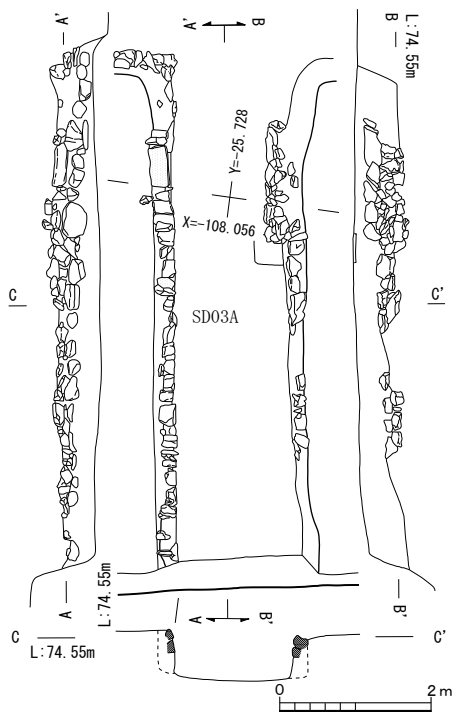
**柱穴群** 南トレンチ G2、H2 区で径0.5～1.1mの、円形ないし楕円形の掘形をもつ柱穴を8基検出した。底には根石があり、堆積土は暗黄褐色土層である。遺構は茶赤褐色砂泥層の上面から成立する（挿図15、図版2）。

**SD02** 北トレンチ10ラインで南岸を川原石で護岸し、北岸は素掘りの東西溝を、延長33m検出した。溝幅は1～2mで東部には幅1.6mの橋が架かり、中央部では直角に南流するSD03と繋がり、西端はSD02A・Bに枝分かれする。その西には対応した新旧の池、SG05A・Bがある。南岸の護岸は残りのよいところで0.6m、3～4段の石組みがある。石

は上段が一辺0.2～0.3m前後、最下段は0.3～0.6mと大きい。黒色泥土が上層に、暗褐色泥土が下層に堆積していた。近世から近代の瓦・陶磁器が少量出土した。

SD02は平安時代中期から中世まで続く土塁（SA15）の南裾に造られており、北西部の水を東部に排水する機能をもつ。窪みとして近代まで存続する（挿図9、図版2）。

**SD03A・B** E8～9区でSD02から直角に枝分かれし、南流する溝を延長7m検出した。径0.25～0.5mの川原石を2～3段両岸に積み護岸するが、東肩は残りが悪い。新・旧の2時期あり、古いA期の東肩は北部でわずかにクランク状に屈曲するが、両肩は直線である。溝の最大幅は内法で1.6m、掘形を含めると2.1mあり、深さは0.7m前後を測る。B



挿図7 SD03A平面・断面図(1:100)

期はSD03Aの西側を埋めて西岸を築き、幅を南部0.7m、北部0.5mに狭める。溝の南端部には底に棧瓦を埋め込み、その上に長辺0.7mの石を架けて蓋をする。国産陶磁器、軒瓦、丸・平瓦が出土した。(挿図7、図版2)。

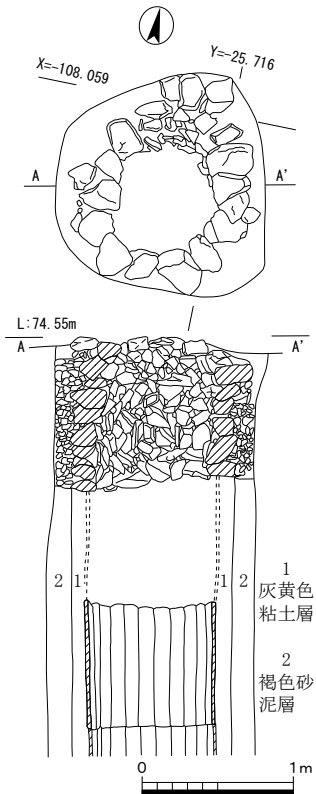
**SD04** 南トレンチE3～I3区で東西溝を検出した。規模はトレンチの東端で4.5m、中央部で5.3m前後、西端で3.6m以上の幅があり、深さは1.4m前後になる。堆積土層は大きく3層に分かれ、底部は東から西に傾斜する。遺構は暗茶褐色泥砂層の上面から成立する。国産陶磁器、「仁清」銘陶器(挿図25・26、図版37)、瓦などが出土した(挿図15、図版2)。

**SG05A・B** 北トレンチの西部、B8・9区で検出した池。南北7m、東西4.5m確認したが、東西の規模はトレンチ外にのび不明である。北肩は平安時代中期から中世の土塁(SA15)を利用し高いが、南肩は低く0.8mの高低差がある。南肩には幅0.8mの南北溝(SD13)が付属する。池には新・旧があり、新しいB期に南東から北西方向に花崗岩で池を区切り、ほぼ当初の半分の規模にする。また、池の中央部には径0.8m、深さ0.3mの円形の穴を穿つ。B期の上層には棧瓦層が、下層には暗灰色泥土層が堆積する。近世から近代の国産陶磁器、瓦が出土した(図版2)。

**SE06** G9区で径2mの円形素掘りの井戸を検出した。堆積土は暗灰色泥砂層で、細片の瓦が出土した(図版2)。

**SE07** 北トレンチG8区で井戸を検出した。掘形は1.4mの円形で、検出面から2.8mまで掘り下げたが、危険なため途中で中止した。構造は石組みの上部と木組みの下部に分かれ、上部は径0.1～0.3mの川原石を1.0mほど小口積みし、裏込めには径5.0cm前後の小石を詰める。下部には径0.85m、高さ0.8mの桶が二段分残るが、最上段は遺存しない。桶の裏込めには12.0cm幅で灰黄色粘土層を詰める。井戸内には瓦・石が密に詰まり、中心部には竹を立て息抜きをしていた。出土遺物は築地に使用する小型の瓦や棧瓦が主体である(挿図8、図版2)。

**SE08** 北トレンチD9区で、径1.3mの円形の掘形をもつ近世の井戸を検出した。堆積土の茶灰色泥砂層



挿図8 SE07平面・断面図(1:50)

から近世陶磁器、瓦が出土した（図版 2）。

**SK09** 北トレンチ中央部 F10 区で検出した大規模な近代の土壙。幅は短辺 3m、長辺 4.5m、深さ 1.5m で SA15 を破壊している。（図版 2）

**SK10** 北トレンチ南東部の I9 区で検出した土壙で、完形の口径 0.5m、器高 0.7m の甕が埋めてあった。甕は近世後期のものである。（図版 2）

**SK11** 北トレンチの D9 区で検出した SD02 に切られる長方形の土壙。（図版 2）

**SK12** 北トレンチ D8 区で検出した長方形の土壙で、南辺部はトレンチ外で未検出。短辺 0.95m、長辺 1.5m で、暗茶褐色泥砂層から近世後期の土師器、瓦が出土した。（図版 2）

**SD13** 北トレンチの西部、B8 区で検出した SG05 に繋がる南北溝。（図版 2）

**SX14** 北トレンチ西部の D9・E9 区で 0.2～0.4m の石を北面させ東西方向に並べた遺構を、延長約 2m 検出した。SD03 と直角の方向である。（図版 2）

### 3 平安時代後期から中世の遺溝（図版 3・27）

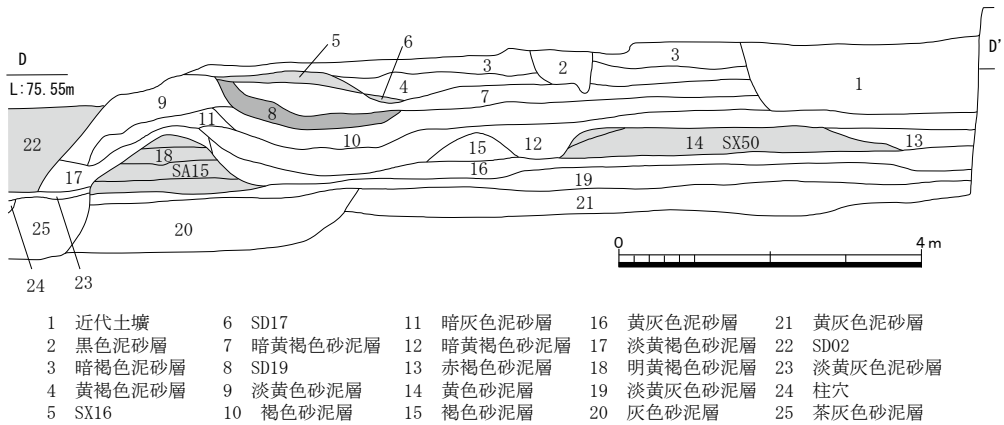
平安時代後期から中世の遺溝は北トレンチで検出した。東・南トレンチでは当該期の遺構は存在しなかった。検出の遺構は、土塁（SA15）、築地（SC20）、土壙（SK24・25）などが主なもので数も少なく、建物、井戸などの遺構はなかった。

**SA15** 平安時代中期から中世まで連綿と続く東西方向の土塁で、近世の SD02 の北肩が土塁の南肩にあたる。西部は地山の白黄色砂礫層を削り出して幅 3m の土塁を作り、東部は平安時代中期の盛土（約 0.8m）上に、さらに盛土を加えている。検出地点の東・西端の高低差は 0.5m 前後で、ほぼ平坦にトップの面を揃える。この遺構に直接関連する遺構として SX16・18、SD17・19 がある。（図版 3・27）

**SX16** 土塁（SA15）の北斜面に瓦・小石を敷き詰めた遺構で、幅が 1～2m あり、延長 30m 検出した。東部は径 2～15cm の川原石と瓦を積み上げ、約 20.0cm の厚さがあり残りが良いが、西部は径 5.0cm ほどの細かな瓦が主体で、堆積層も 5.0cm 前後と薄い。西端部は石や瓦が遺存しない。北側の平行する SD17 と 0.4m の比高差がある。細片の瓦多数と軒瓦などが出土した。瓦・小石がよく残る東部では土塁の最頂部ではなく、北側斜面部の中段に敷かれ、土塁の盛土が流出するのを防ぐ施設と考えられる。SX16 の直上を覆っていた土層は、厚さ 0.2m の暗褐色砂泥層で、近世の仁和寺再建に伴う整地層である。（挿図 9、図版 3）

**SD17** C10～H10 区で SX16 の北側に平行する溝状の遺構を延長 28m 検出した。規模は幅 0.5～1.0m、深さ 0.05～0.2m で、西部は浅く東部は深い。堆積土は赤褐色泥砂層で、





挿図9 北トレンチ土層断面図(1:100)

出土遺物はない。黄褐色泥砂層を取り除いて検出した。(挿図9、図版3・27)

**SX18** 北トレンチ東部で、SA15の南側斜面中段で瓦・川原石を土塁に平行して並べた遺構を検出した。SA15の南斜面の土留遺構である。(図版3)

**SD19** SA15に平行する溝で、東部は幅3m前後、深さ0.3mであるが、西部で幅1～1.3m、深さ0.25～0.4m前後と約3分の1の規模になる。東部の堆積土は茶褐色泥砂層で、H10区の上層には焼土層が堆積する。西部は白黄色砂礫層(地山)を掘り込み、堆積土は黄褐色砂泥層で、小礫を含む。SA15に伴う溝である。軒瓦、土量が少量出土した。(挿図9、図版3)

**SC20** 北トレンチ北部で幅1.6mの東西方向の築地状遺構を、延長32m検出した。残りの良い東部では径0.1～0.2mの川原石を一段、各辺に並べ、間には丸・平瓦や小石を詰める。これに対し、西部は残りが悪く疎らで石も小さい。石の据え付け方法は掘形がなく、褐色砂泥層の上面に石を据え付け、内部に瓦と小石を少し詰める。西部と東部では、約0.4mの比高差があり、西部が高い。丸・平瓦が出土したが土器は皆無であった。SX16の下層に堆積している土層、暗黄褐色砂泥層(0.2m)を掘り下げて検出した。SD21が付属する。(挿図19、図版3・27)

**SD21** 築地(SC20)の北辺から1.7m離れた位置で幅0.2m、深さ2～5cmの浅い溝状の窪みを延長11.5m検出した。東部・西部とも途中で切れ、続かない。窪みの堆積土層は築地を覆う暗黄褐色砂泥層である。検出面と位置関係から、築地に伴う雨落溝と推定できる。遺物は出土しなかった。(挿図9、図版3)

**SK22** 北トレンチD9区で検出した土壌。短辺0.4m、長辺0.9mの規模を測る。北辺はSD02で破壊されている。鎌倉時代前期の遺物が出土した。(図版3)

**SK23** 北トレンチ D9 区で径 0.95m の土壙を検出した。(図版 3)

**SK24** 北トレンチ G9 区の SD30 の上層で検出した瓦溜め。短辺 1.0m、長辺 1.4m の範囲に瓦が密集し、集積した状況であった。層位から平安時代後期の遺構であるが、平安時代中期の完形に近い軒平瓦などが出土した。(図版 3)

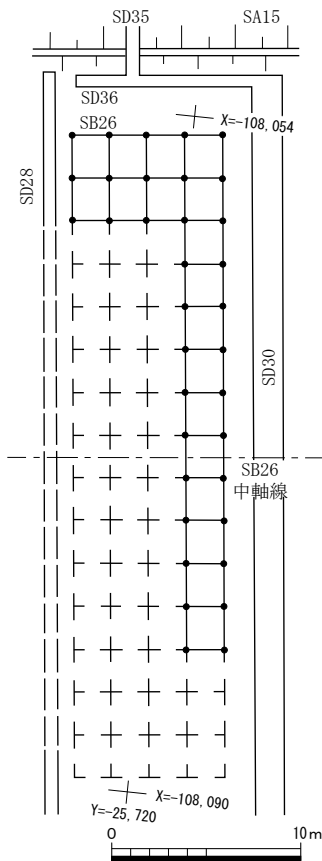
**SK25** 北トレンチの D8・E8 区で検出した大規模な瓦溜。南辺部はトレンチ外で不明、東部は SD03 で壊される。規模は東西 4.6m、南北方向 5.5m、西部の堆積層の厚いところは 0.7m 前後あるが、東部は薄くなり 0.1m 前後になる。堆積層の赤褐色砂泥層から多量の平安時代中期から後期の丸・平瓦、軒瓦、鬼瓦、緑釉丸瓦、緑釉軒瓦、鉄釘などが出土し、底には凝灰岩の礎石(図版 25・53)などがあつた。土器類の出土は少ない。円堂院の中心建物で調査が実施されている八角円堂の東北隅から約 20m 離れ、円堂に関連する瓦などを低い東部に廃棄した遺構である。(図版 3)

#### 4 平安時代中期の遺構(図版 4・27～30)

平安時代中期の遺構は調査地の全域で検出した。北トレンチ中央部の 10 ラインを境に、南部には掘立柱建物(SB26・27)や雨落溝(SD28・30)など建物に関連した遺構が、北部には土壙(SA15)や溝(SD33・34)など寺域内を区画する遺構がある。南トレンチには土壙(SK43～46)などがある。

**SB26** 北トレンチ南部から東・南トレンチにかけて長大な掘立柱建物を検出した。梁間は 4 間で、桁行は 12 間まで確認したが、南部は近世の溝(SD04)で壊され規模は不明である。しかし、第 1 次調査で検出した円堂の中軸線が SB26 の北から 8 間目の中心を通り、この線を建物の中軸として復元すると規模は、梁間 4 間、桁行 15 間となる。柱間は桁行 2.26m、梁間 1.98m に復元でき、全体の規模は南北 33.9m、東西 7.92m となる。

建物の柱穴は径 0.3～0.5m、深さ 0.1～0.2m で規模が小さく、石や瓦を礎石にしたものもあるが、数は少ない。



挿図10 SB26復元図(1:400) 堆積土は茶灰色砂泥層で、一部に灰・炭を含む。柱穴の

検出面の北端と南端では約1.2mのレベル差があり、南が低い。

建物と雨落溝の関係は、西側柱から西雨落溝(SD28)までは0.9m前後、東側柱から東雨落溝(SD30)の肩口まで1~1.5m、溝の中心までは2m前後ある。また、東・西の溝心々間は11.5mを測る。建物の方位は5度37分西に傾く。

規模・構造から円堂院に付属する僧坊にあたる。柱穴からは10世紀の土師器・緑釉陶器(挿図19-98)などが出土した。SB26には東・西に雨落溝(SD30・28)が付属する。(挿図10、図版3・4・28・29)

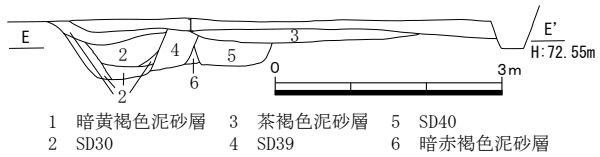
**SB27** 東トレンチの北東部、H6・H7で掘立柱建物を検出した。規模は1間×2間で、桁行、梁間とも2.2mの等間に復元できる。

柱穴は径0.4~0.6m、深さ0.1m程残っていたが、北東の隅柱は削平され検出できなかった。建物の方位はSB26より振れがわずかで、5度30分西に傾いている。(図版4)

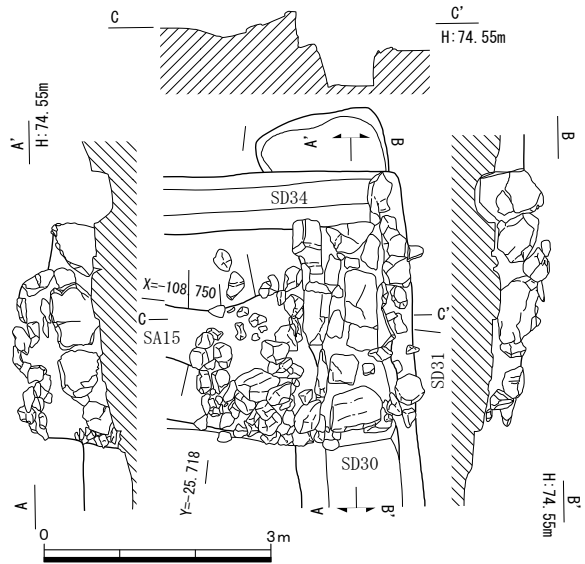
**SD28** 北トレンチE8・9区、南トレンチF2区で検出したSB26の西側雨落溝。北トレンチでは幅が0.5~1.0m、深さ0.4m前後あり、中央部に暗渠状の施設(SX29)がある。溝の堆積土は上層が赤茶灰色泥砂層、下層は暗黄茶色泥砂層であった。南トレンチでは4.7m検出したが、北部はSD04で壊されている。幅は0.6~0.7m、深さ0.2mで、東岸の一部を約2m、川原石と瓦を積み護岸する。北トレンチで8m、南トレンチで4.7m検出し、東トレンチ西部の未掘部分を含むと延長40m続く。(挿図15、図版3・4・28)

**SX29** 北トレンチのSD28の中央部で両岸を幅1.5mほど、甎や凝灰岩、石で護岸し、暗渠状にした遺構を検出した。(図版3・4)

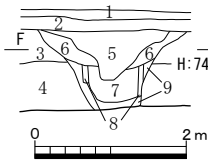
**SD30** 北トレンチのHラインに沿って検出した南北溝で、SB26の東雨落溝にあたる。幅



挿図11 SD30・39・40土層断面図(1:100)



挿図12 SD31平面・断面図(1:100)



- |           |                |                           |
|-----------|----------------|---------------------------|
| 1 淡褐色泥砂層  | 5 SD33(茶褐色泥砂層) | 1.2 ~ 1.8m、深さ 0.4 ~ 0.6m、 |
| 2 黒褐色泥砂層  | 6 SD33(褐色砂泥層)  | 延長 42m 検出した。北端の土          |
| 3 黄褐色泥砂層  | 7 SD33(茶褐色泥砂層) | 塁 (SA15) を横断し、SD34 と      |
| 4 暗黄褐色泥砂層 | 8 SD33(灰色粘土層)  | 接する幅 3m の部分は石で護岸          |
|           | 9 SD33(灰褐色泥砂層) | (SD31) する。この南には杭穴         |

挿図13 SD33土層断面図(1:100)

が約 3m にわたってあり (SX32)、さらに南の H7・8 区には両岸と底に石を投げ込み、溝を狭めた部分があった。また、H2・3 区の西岸には瓦で一部を護岸したところがあり、溝の護岸のために工夫をしている。堆積土層は基本的に 4 層で、完形の緑釉軒丸瓦 (図版 9-1a) や土器など、各層から平安時代中期の遺物が出土した。(挿図 11・15、図版 3・4・28・29)

**SD31** 北トレンチ G10・H10 区で検出した土塁 (SA15) を横断する SD30 の石組溝。長さは土塁の基底部幅の 3m、石組みの幅は 1.8m 前後、溝の内法は 0.8m。両岸には 0.5 ~ 0.9m の大きな石を組み、底には 0.2 ~ 0.7m の石を平坦に敷き詰める。西岸の土塁頂部には崩壊を防ぐため、石・瓦などを置く。(挿図 12、図版 3・4・28・29)

**SX32** 北トレンチ G8・9、H8・9 区の SD30 の両肩部で径 5cm 前後の杭穴を 10 数個検出した。検出位置は SB26 を挟んで、SX29 に対応する。(図版 3・4・29)

**SD33** 北トレンチ F10 ~ 12 区で、幅 0.8 ~ 1.8m、深さ 0.3 ~ 0.5m の南北溝を延長 9m 検出した。北部は底部が U 字状をしており深く、F11 区南壁の土層断面の観察では厚さ 8.0cm、高さ 0.2 ~ 0.4m の側板痕跡 (灰色粘土層) が両岸にあり、間隔は 0.7m を測る。溝の堆積土は大きく 4 層に分かれ、上層から第 1 層は茶褐色泥砂層、第 2 層は褐色砂泥層、第 3 層は茶褐色泥砂層、第 4 層は灰褐色泥砂層である。北端と南端 (SD34 との交点) で 0.7m 前後の高低差がある。(挿図 13、図版 3・4・29)

**SD34** 北トレンチ F10、G10 区で東西溝を検出した。規模は幅 0.7m、長さ 7.7m、深さ 0.3m で、側板・杭の痕跡が灰色粘土層として残る。側板の痕跡は厚さ 4 ~ 8.0cm、高さ 10.0cm、杭の痕跡は径 4 ~ 6cm で、杭で側板を溝の内側から保持した状態が観察できた。堆積土は上層が暗茶褐色土層、下層が灰褐色砂層である。土師器、灰釉陶器、軒瓦など 10 世紀の遺物が出土した。(図版 7) 溝の東端は SD30 の石組溝 (SD31) と接し、西端は SD33 に接する。(図版 3・4・29)

**SD35** SD33 を南に延長した南部の F10 区で側板のある南北溝を検出した。幅 10.0cm、高さ 10.0cm 前後の側板の痕跡と径 6cm の杭跡があり、溝幅は 0.75m を測る。SD36 との合流点には水流で南岸が破壊されるのを防止するため川原石と平瓦を溝の南肩に貼り付け護岸する。SD33 と比べ浅く、底の傾斜もなく平坦である。SD35 が SA15 を暗渠で潜っていた

かどうかは、近世の土壌 (SK09) で壊され不明である。  
(図版4・29)

SD33 は当初、土塁 (SA15) の手前で直角に曲がり、SD34 を介して SD30 に繋がっていたが、後に SA15 を貫き (SD35)、SD36 を介して SD30 に繋がる。(図版3・4・29)

**SD36** 北トレンチ F9・G9 区で東西溝を検出した。幅 0.6  
～ 0.8m、深さ 0.3～0.5m、長さ 9m、褐色泥砂層が堆積する。

SD26 は当初 (第5面) は浅いが、第4面期には SD35 と繋げるために SD35 から SD30 間を掘り下げ、また SD35 との合流点部の西部に瓦と石で護岸し、岸の破壊を防いでいる。SB26 の北辺に位置する。(図版3・4・29)

**SD37** 北トレンチの F10 区で SD35 で切られた浅い南北溝を検出した。幅 0.6m、深さ 7.0cm、延長 2.2m で、北部は SK09 で壊されている。(図版3・4・29)

**SX38** 東トレンチ H5・6 区で検出した石列。径 0.15 挿図14 SX38平面・断面図 (1:100) 0.3m の平たい石を一行、東に面を揃え 4.5m 並べる。SD30 の東肩に沿い、SD40 の堆積土の上に築く。八角円堂の中軸線を東に伸ばした位置にあたる。(挿図14)

**SD39** 東・南トレンチで SD30 に先行する溝 (SD39～41) を検出した。SD39 は幅 1.2m 前後、延長 23m 検出した。南部は SD30 と SD40 で両肩を壊されている。(挿図11・15、図版4)

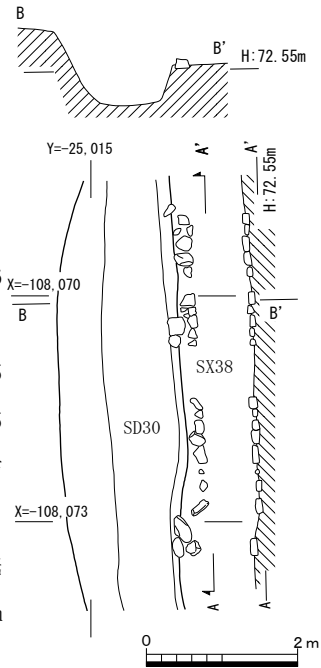
**SD40** SD39 と同様 SD30 に平行する溝、幅 0.7m、延長 27m 検出した。(挿図11・15、図版4・29)

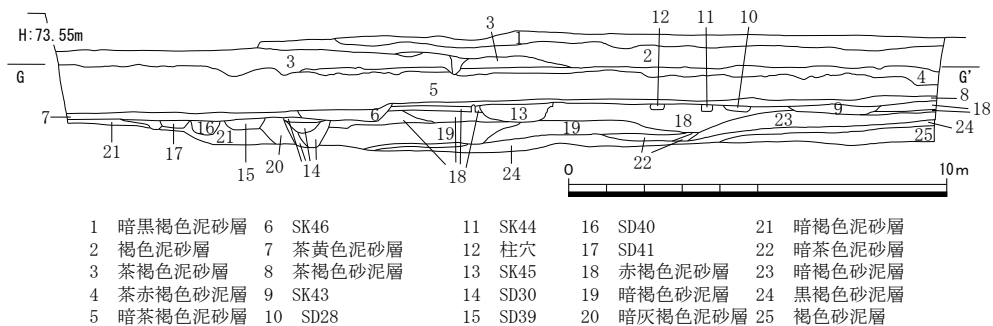
**SD41** 南トレンチの東部で幅 0.7m、延長 3m の小規模な溝を検出した。(挿図15、図版4)

SA15 平安時代の規模は、基底部幅が 2～2.6m、高さは 0.8m 前後あり、地山のレベルが高い西部の約 9m は白黄色砂礫層を削り出し、低い東部は明黄褐色砂泥層 (挿図9-18) を 0.2～0.3m、全体で 0.8m 積み上げ、盛土で形成する。延長 36m 確認した。土塁は、SD31 と SD35 で連続しない。(挿図9、図版3・4・29)

**SK42** 北トレンチ E8 区で検出した小規模な土壌。幅は 0.7m、長さ 3.6m ある。(図版4)

**SK43** 南トレンチ E1 区で検出した土壌。長辺 2.3m、短辺 0.6m、大半がトレンチ外で規模は不明。3つの径 0.2～0.3m の小穴が切り合っている。堆積土には焼土・灰が詰まり、瓦、鉾滓状の遺物が出土した。(挿図15、図版4)





挿図15 南トレンチ南壁断面図(1:200)

**SK44** 南トレンチ F1 区で検出した径 0.4m の土坑。頸部から上部を欠いた甕が正位置で埋めてあった。甕の残存高は 12.0 cm、内からは遺物が出土しなかった。(挿図 15、図版 4・7・28)

**SK45** 南トレンチ G2 区で検出した長方形の土坑。南辺はトレンチ外にのび、北辺は SD04 で壊されている。規模は長辺 4.5m、短辺 2.9m で、深さは 0.1 ~ 0.4m で東側が深い。堆積土は 1 層で多量の瓦を含む。SE26 の柱穴を壊している。丸・平瓦、土器(挿図 19)、釘などが出土した。(挿図 15、図版 4)

**SK46** 南トレンチ H2 区で検出した浅い土坑。南部は浅いが北部は 0.3m と深く、底の一部に集石があり、堆積土は茶黄色泥砂層であった。SD30 の上面から成立している。(挿図 15、図版 4)

**SK47** 東トレンチ H3・I3 区で検出した南北幅 3.3m、東西幅 1.7m、深さ 0.2m の浅い土坑。堆積層は 3 層で、上層は淡褐色土層、中層は黒褐色土層、下層は褐色土層で、中層には炭を含む。平安時代中期の土器がまとめて出土し、中には SD30 出土の陰刻花文のある灰釉陶器鉢と接合する破片、緑釉鬼瓦などがある。(図版 4)

**SK48** 東トレンチ H4 区で、長辺 2.2m、短辺 1.7m の歪んだ三角形の土坑を検出した。堆積土は暗茶褐色土層で、瓦・土器が少量出土した。(図版 4)

**SX49** 南トレンチ東部の G2 区で石列を 1.7m 確認した。石は径 0.15 ~ 0.3m で西に面がある。SD28 の護岸石組みとほぼ同一の規模で平行し、間隔は 6.9m を測る。(図版 4)

**SX50** 北トレンチ D11 ~ E11 区で検出した東西方向の高まり状の遺構。幅は上端のフラット部分が 2.8m、基底部分は 4.5m あり、延長 8.5m 検出した。高まりの部分は平坦で北・南に対し落ち込む。高まりを形成している土層は黄色砂泥層で、厚さは 0.4m ある。検出位置は中世の築地遺溝(SC20)の下層でほぼ重なる。土塁(SA15)からは北に 7.5m 離れ、頂部のレベルとほぼ同じである。礫敷きなど特別な施設は平坦面上になく、性格は不明。SX50 の下層には薄い黄灰色泥砂層の整地層が約 0.2m あり、SA15 はこの整地層の下層から成立していることから、SA15 の方が古いことがわかる。(挿図 9、図版 4・30)

## 第3章 遺物

### 1 遺物の概要

調査によって、整理箱で約 530 箱の遺物が出土した。その大半は瓦で土器やその他のものは少ない。時代別に概観すると、平安時代中期の遺物が最も多く、瓦を中心に、土器・陶磁器、硯、金属器などがある。平安時代後期は瓦と土器・陶磁器があるが、共に少ない。鎌倉時代は少量の瓦と土器・陶磁器があり、室町時代の遺物は土器・瓦ともほとんど確認できなかった。近世の遺物は「仁清」<sup>註1</sup>銘陶器など前期のものが少量あるが、中期以降のものが多く、瓦、土器・陶磁器、硯、寛永通寶などの錢貨、金属器などがある。

以下、土器は、平安時代から中世までと、近世の仁和寺再建以降に分けて説明する。なお、瓦、金属製品などの遺物は一括して概要を述べる。

### 2 平安時代から中世の土器・陶磁器（挿図 16～22、図版 5～8・32～36）

土師器は、SD30 から出土したものが大半で、その他の遺構からは少ない。器種には、土師器、黒色土器、白色土器<sup>註2</sup>、須恵器、緑釉陶器、緑釉陶器素地<sup>註3</sup>、灰釉陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器などがある。器形は、土師器・須恵器の杯は高台のない杯 A、ある杯 B に大きく分ける。緑釉・灰釉陶器など施釉陶器の椀は、底部から内湾しながら立ち上がり、端部でやや外反する器形を椀 A、体部中位に稜の付く器形を椀 B、皿は直線的な体部の皿 A、体部の中位で外反するものを皿 B とする。以下、遺構ごとに概要を述べる。

#### SD30 出土の土器・陶磁器

平安時代中期の遺物が溝の各地点から出土したが、分布の粗・密の片寄りはなく、大きく 4 層に分かれた層位（挿図 11）による土器の形式差もなかった。土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、灰釉陶器、輸入陶磁器（青磁・白磁）などの器種がある。土器の総量は、合計 11,423 片を数え、重量にして 85.7 kg を量った。

#### 土師器（1～12）

皿（1・2）、杯（3～7）、高杯（8）、盤（9）、甕（10・11）と羽釜（12）がある。皿・杯は、体部の上半部を強く横になでて屈曲させ、水平の平坦面を作り、さらに端部をつまみ上げ「て」字状にし、その下半は未調整のままにする（1～5・7）と、体部上半部を屈曲させず

二回のナデ処理（二段ナデ）で端部を整える（6）に分かれる。内面は共通して右巡りの横ナデ調整をする。いずれも器壁が薄く3mmを超えるものは稀である。皿・杯以外には高杯（8）、盤（9）、甕（10・11）と羽釜（12）がある。

1・2 皿。口径9.4～11.2cm、器高0.8～1.0cmの皿で、口縁部の上半部を強くナデ「て」字状にする。胎土は淡灰褐色で、焼成は軟質。内面は刷毛目調整し、後に横なでする。（図版5）

3～6 杯A。口径は14.0～18.8cm、器高は2.0～3.9cmで、浅い（3・4）と深い（5・6）がある。（6）の端部は二段ナデし、杯・皿の中では新しい要素がある。（図版5・32）

7 杯B。口縁端部が外反する器形。底部に貼り付けの輪高台を作るが、低いため目立たない。口径19.6cm、器高3.9cmと大きく、胎土は粘質で色調は淡褐色。（図版5・32）

8 高杯。口径25.7cm、器高21cm前後に復元できる。杯部は深く端部は内側に巻き込む。脚は棒を芯にして成形し、不整形な10角形。粘土は淡灰褐色で砂粒を含む。（図版6）

9 盤。外に開く高台がつき、内面は刷毛目調整し、外面は未調整である。胎土は淡褐色で、焼成は良好。底部径は17.6cmを測る（図版6）。

10 甕。口縁部が「く」字状に曲がり、胎土は赤褐色で、砂粒を含む。（図版6）

11 甕。底は平に近く、口縁部は「く」字状に外反する。端部は直立し受け口状になる。内外面の調整は保存状態が悪く不明。胎土には軟質の白色粒子や長石粒を多く含み、褐色をしている。口径22.0cm、器高14.7cm。（図版6）

12 羽釜。口径21.8cmで、口縁端部の下に太く短い鏝が付く。内面は横ナデするが、外面は不明。多量の砂粒を含み、色調は暗茶褐色を呈する。外面に煤が付着する。（図版6）

#### 黒色土器（13～17）

椀（13・14）、鉢（15・16）と壺（17）、風字硯（150）が出土した。椀には内面だけを黒色処理したA類と全面処理のB類がある。鉢・壺は大型の器形が主体で、全形のわかる資料がないため、A類、B類が判断ができないものがある。鉢・壺は椀に比べ出土量が多い。

13 椀。口径12.0cm、器形4.0cmで、丸い体部に低い輪高台がつき、内面の端部に沈線がある。体部の篋磨きは磨滅のため不明。黒色土器B類（図版5）。

14 椀。口径15.6cm、器形4.2cm。低い三角高台の底部からわずかに内湾しながら立ち上がり、端部で外反する。内面には篋磨き痕があるが外面は不明。胎土は淡灰色で、焼成は軟質。黒色土器A類（図版5）。

15 鉢。口径12.8cmの把手付き鉢で、把手の幅は中心部で一辺1.4cm、長さは8.4cmを測る。胎土は灰茶色で、焼成は良好。内面だけを黒色処理する（図版6）。



16 鉢。口径 21.6cm、体部から端部までがほぼストレートな鉢。胎土は淡茶灰色で微砂を含む。内面と外面の上半部に、丁寧な篋磨き痕がある。黒色土器 A 類（図版 6）。

17 壺。大型の獣脚が付く壺底部で、残存部には炭素が付く。黒色土器 B 類（図版 6）。

#### 白色土器 (18 ~ 26)

皿 (18・19)、盤 (20)、椀 (21 ~ 24)、高杯 (25・26) がある。胎土は白色ないし淡灰褐色で、後者は焼きの硬いものが多い。皿・椀の製作はロクロ成形を基本とし、輪高台は削り出しが一般的であるが、高台を貼り付け、その再調整にロクロヘラケズリをしたものが一部ある。器形は緑釉陶器と共通するものが多いが、緑釉陶器の器面調整に一般的な篋磨きはない。

18・19 皿 A。(18) は口径 11.9cm、器高 2.1cm、(19) は口径 13.6cm、器高 2.2cm とやや大きい。高台は削り出しの輪高台で、高台脇も同時にケズる。外面上半部と内面はロクロナデのままである。胎土に砂粒を含み、焼成は硬い（図版 5・32）

20 盤。小破片で、推定口径が 15.9cm、器高が 2.4cm 前後で、三足の付く盤である。胎土は灰白色で硬質（図版 5）

21 小椀。円盤高台で底径は 6.7cm あり、口径 13.2cm、器高 4.1cm 前後になる。底部外面に糸切り痕が残り、胎土は白色で、焼成は軟質である（図版 5）

22 椀。高台は細く高い輪高台。胎土は粘質で、精良、底径は 7.9cm ある（図版 5）

23 椀。口径 15.1cm。体部中位で屈曲し、外面にはロクロナデの痕が残る（図版 5）

24 椀。蛇の目高台の椀。調査で出土した白色土器の高台の大半が輪高台であるのに対し、蛇の目高台は数が少ない（図版 5）

25 高杯。脚と杯部の接合部に帯状に粘土を巻く。胎土は灰白色で軟質（図版 6）

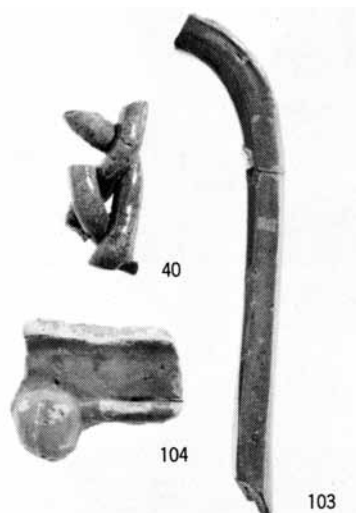
26 高杯。脚部の破片で、10 数角形に面取りしているが面は正確でない。胎土は灰色で、焼成は軟質。棒に粘土を被せ、脚の芯を作る（図版 6）

#### 須恵器 (27 ~ 30・133・136・139・140・142 ~ 146・148)

供膳形態では、椀 (27)、杯 (28)、蓋などがあり、貯蔵・煮沸形態では鉢 (29・30)、甕、壺がある。出土の中心は鉢で、供膳形態の量はわずかで細片が多い。甕も少量あるが体部の破片が主体で、しかも二次的に打ち砕き硯に転用したものが多く、口縁部の実測できる破片は出土しなかった。風字硯 (148)、硯に転用された甕 (133・136・139・140・142 ~ 1459)、壺 (146) は硯の項で説明する。

27 椀。口径 14.8cm、器高 5.1cm。糸切りの底部から内湾して立ち上がり、端部で外反する。ロクロなで痕が顕著で凹凸が目立つ。胎土中に白色微砂を含み、硬質（図版 5・32）。

28 杯 B。口径 16.8cm、器高 6.3cm 前後の杯。高台は削り出しの輪高台で、通常の須恵



器杯の貼り付け高台と異なる調整をする。灰黒色で硬質、精良な胎土を使う（図版5）

29 鉢。口径 23.0cm、器高 10.0cm。糸切り底の底部からわずかに内湾しながら立ち上がり、端部は発達し丸くなる。内面の下半には使用痕があり、磨滅する。胎土は青灰色で硬質、精良な胎土である（図版6・33）

30 鉢。(29)と同形態の鉢。胎土は灰青色で、粘質、焼成は硬質である（図版6）

#### 緑釉陶器 (31～40)

皿 (31～33)、托 (34)、椀 (35～38)、鉄鉢 (39)、水注 (40) などがあり、他に小片の蓋がある。

挿図 16 緑釉陶器香炉、水注把手 31 皿 A。口径 14.5cm、推定器高 2.6cm で、体部が直線的に開く皿。胎土は灰青色で、釉は暗緑色で厚く施す（図版5）

32 皿 A。口径 12.7cm、器高 2.9cm。底部から直線的に体部がのびるが、口縁部直下でわずかに上方に屈曲する。体部下半から底部にかけてロクロヘラケズリし、内面はヘラミガキ調整する。釉は底部外面を除く部分に施す。釉は緑色、素地は暗青灰色である（図版5・32）

33 皿 B。底部は削り出しの輪高台で、体部中位で屈曲し外反する。底部外面を除く部分に施釉し、胎土は灰青色、細砂を含む。口径 11.2cm、器高 2.6cm（図版5）

34 托。底部と受け部が残り、口径 14.8cm、器高 3.2cm 前後に復元できる。高台は幅の広い貼り付けの輪高台で、蛇の目高台を模倣している。受け部は垂直に立ち、釉は全面施釉で厚く、明緑色に発色し、貫入がある（図版5・32）

35 小椀。口径 8.4cm、器高 3.1cm。底部に糸切り痕が残り、体部はロクロナデ調整する。施釉は底部外面を除き、釉は緑色で薄い。胎土は灰青色である（図版5）。

36 椀 B。口径 12.4cm、器高 3.9cm で、体部中位で屈曲し、端部で外反する。削り出しの輪高台の畳付け部には糸切り痕が残る（図版5）。

37 椀 B。口径 14.8cm、器高 5.1cm。高台は削り出しの輪高台、体部の中位に屈曲点がある。外面の下半をロクロヘラケズリ調整し、内面は篋磨きをする。底部外面にも施釉するが部分的である。釉色は暗緑色で、底部内面に重ね焼き痕がある（図版5・32）。

38 椀 A。口径 15.2cm、器高 6.7cm。貼り付けの輪高台は高く、段が付く。底部内面には沈線が巡り、底部の内外にトチン痕がある。底部外面はロクロナデし、糸切り痕を残す。

胎土は暗灰青色で硬質、暗緑色に発色する（図版5）。

39 鉄鉢。口縁部の小破片で口径13.4cm、器高は7.0cm前後に復元できる。胎土は灰青色で硬質。釉は緑色で薄い（図版5）。

40 水注。径0.6cm前後の丸い粘土紐を3本縫り合わせた把手で、素地は青灰色で硬質、釉は灰緑色に発色する。国産陶器では類例の少ない把手である（挿図16）。

#### 緑釉陶器素地（41）

破片は多いが実測できるものでは、椀（41）が出土した。

41 椀B。体部の中位で屈曲し、端部には輪花がある。口径16.6cm、器高5.9cm。外面はロクロ篋削りの後篋磨き調整し、内面も篋磨きする。胎土は暗茶色で細かい、表面は暗青灰色に発色する（図版5・32）。

#### 灰釉陶器（42～48）

皿（42・43）、椀（44・45）、深椀（46）、鉢（47）、段皿、小型壺、四耳壺（48）などがある。

42 皿A。口径10.3cm、推定器高3.2cm。底部から内湾しながら立ち上がり、端部でわずかに外反する。施釉は浸け掛け。胎土は灰色で、硬質である（図版5）。

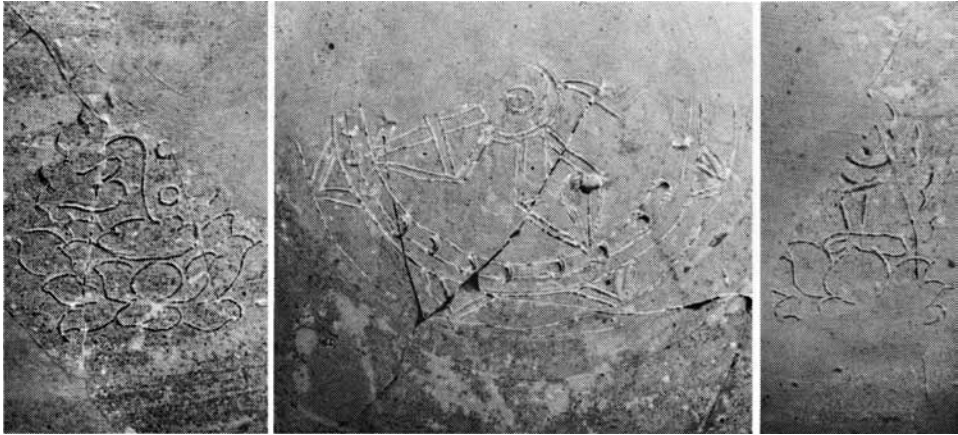
43 皿A。口径11.8cm、推定器高2.9cm。器形は浅く、釉は浸け掛けである。硯として使用する（図版5）。

44 椀A。口径11.6cm、器高4.1cm。三日月形の低い貼り付け高台から斜め方向に体部がのび、端部で少し外反する。硯として使用する。（図版5・32）。

45 椀A。底部からわずかに内湾しながら立ち上がり、端部で外反する。口径14.2cm、器高4.7cm。外面下半にわずかにロクロヘラケズリ痕がある。施釉は刷毛塗りによる。胎土は暗灰色で硬質、釉は暗灰緑色に発色する（図版5）。

46 深椀。口径14.8cm、器高6.7cm、底部から内湾して立ち上がり、端部で外反する。高台は高い三日月形。内面の口縁端部には二本の沈線があり、下部や底部にはコテ痕がある。外面調整はロクロナデ。施釉は刷毛塗りで、胎土は灰色で極めて硬質である（図版5・32）。

47 鉢。口径25.4cm、器高10.9cm。底部から内湾しながら立ち上がり、端部で直立する。高台は三日月形で、外面は上半部までロクロヘラケズリ、内面はロクロナデする。底部内面に輪宝、体部の内面は5分割し、蓮を台にした梵字「■」・「■」を陰刻し、向かい合わせに置く。「■」・「■」の間には花文がある。釉は底部外面を除き、体部は高台脇まで丁寧に刷毛で施すが、薄く目立たない。胎土は灰白色で硬質である。平安時代後期の軒瓦にも同一の梵字を含む丸・平瓦がある（挿図17・32・36、図版5・32）。



挿図 17 灰釉陶器鉢の陰刻文様

48 四耳壺。口径 10.7cm、器高 26.2 cm。短い口縁部は直立し、頸部の下に体部の最大径がある。耳は半円形で径 5 mm の穿孔があり、その下部までロクロ篋削りする。口頸部から肩部にかけて灰緑色の釉を厚く施し、胎土は灰色で硬質（図版 6・33）。

輸入陶磁器（49～60）

49 青磁碗。平底の底部から直線的に斜め上方に立ち上がり、底部と体部の境を篋削りし、目痕が付く。底部内面にも大きな目痕がある。胎土は灰青色で硬質、釉は灰緑色。口径 20.2cm、器高 5.9cm。（挿図 18、図版 34）。

50 青磁碗。輪花のある碗。釉は灰緑色で、胎土は灰青色（図版 34）。

51 青磁壺。体部の小破片、灰黄色の素地に暗茶色の細線と緑色の太い線で波頭状の文様を描き、後に釉をかける。胎土は灰色で細砂を含み、焼成は硬質である。長沙銅官窯の製品である（挿図 21）。

52・53 白磁碗。小さい玉縁口縁の碗。（53）は体部のロクロヘラケズリを口縁の直下まで行う（図版 34）。

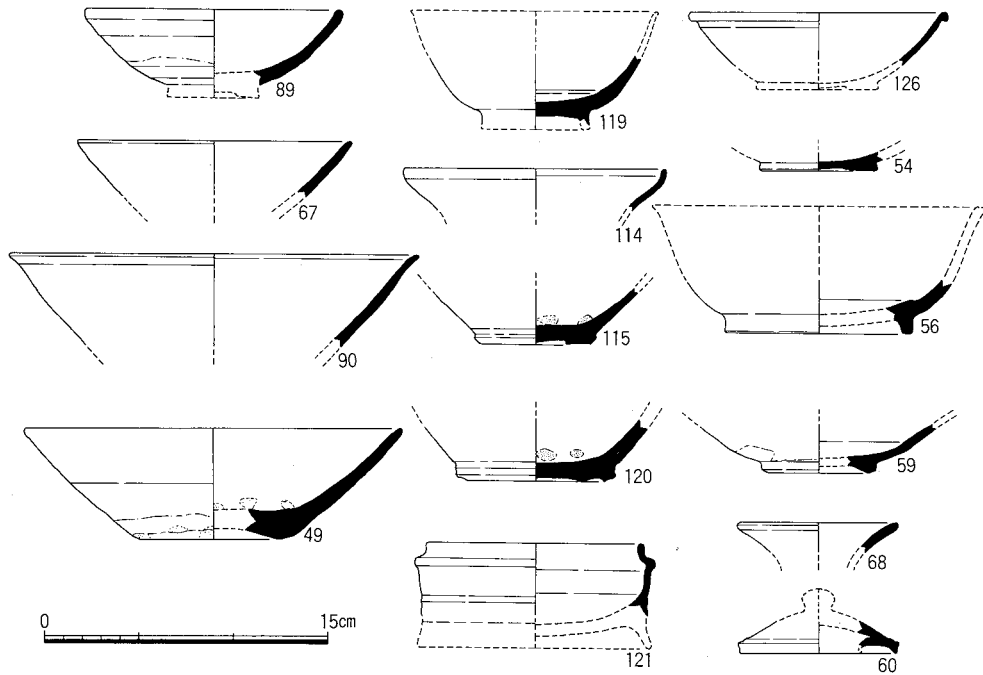
54 白磁碗。蛇の目高台の底部破片。灰白色の胎土で、乳白色の釉を施す。底径 6.5cm（挿図 18、図版 34）。

55 白磁碗。端部が外反し、釉は灰白色で厚い（図版 34）。

56 白磁碗。高台は台形をした高い輪高台で、しっかりしている。釉は灰色で、胎土は灰白色である。底径 10.2 cm（挿図 18、図版 34）。

57 白磁皿。体部中位に稜がある皿、釉は灰白色で薄い（図版 34）。

58・59 白磁碗。底部と体部の破片で接合しない。輪高台は低く内側の削りは斜め方向、



挿図 18 中国陶磁器実測図 (1:4)

胎土は灰色で釉は灰青色。(58・59)と(128)は北宋代の白磁である(挿図18、図版34)。

60 白磁蓋。口径8.4cm、器高3.4cm前後に復元でき、法量から万年壺の蓋と推定する。胎土は白色で、釉は乳白色をする(挿図18、図版34)。

#### その他の遺構出土の土器・陶磁器

SD30 以外の各遺構からも少量の遺物が出土した。以下、主なものを掲載する。

#### SD34 出土の土器・陶磁器 (61～68・138)

土師器(61・62)、緑釉陶器(63・64)、灰釉陶器(65)、須恵器(66・138)、青磁(67)、白磁(68)が出土した。(138)は硯の項で説明する。

61 土師器皿。口径13.0cm、器高1.6cm。口縁部の上半を横なでし、以下を未調整にする。胎土には砂粒が混じり、色調は淡褐色である(図版7)。

62 土師器杯。口径12.8cm、推定器高2.9cm。胎土は粘質、色調は淡褐色で、焼成は良好。口縁部に炭化物が付着し、灯明皿として使用されている(図版7)。

63 緑釉陶器皿A。口径13.6cm、器高2.9cm。削り出しの輪高台で、底部からわずかに内湾しながら端部にいたる。指押しの輪花があるが数は不明である。内面をヘラミガキし、外面はロクロヘラケズリ調整する。釉は緑色で薄く、底部外面を除く部分に施す。底部内

面には、径 6.5cm の重ね焼き痕がある（図版 7・33）。

64 緑釉陶器椀 B。口径 13.2cm、器高 4.6cm。体部中位に稜をもつ器形。外面の下半は幅の狭いロクロヘラケズリをし、内面はロクロなでのまま放置する。胎土は灰青色で硬質、施釉は底部外面を除き、釉は緑色に発色する（図版 7）。

65 灰釉陶器椀 A。口径 16.8cm、器高 5.6cm。三日月形高台から内湾しながら立ち上がり、端部は丸く収め、四輪花が端部にある。内外面をロクロナデ調整し、施釉は刷毛塗りである。胎土は灰青色で硬質、釉は灰緑色で厚い（図版 7・33）。

66 須恵器鉢。口径 20.0cm、推定器高 9.8cm。口縁端部が発達し玉縁状になる鉢、玉縁口縁タイプの中では古い形態である。青灰色で硬質に焼成する（図版 7）。

67 青磁椀。口径 14.8cm、灰青色で硬質な胎土、釉は灰色である（挿図 18）。

68 白磁壺。頸部から外反して立ち上がる口径 8.4cm の壺の口縁部破片。灰色の硬質な胎土で、釉は貫入があり乳白色をする。（挿図 18、図版 34）。

#### SD33 出土の土器・陶器 (69～73、152)

土師器 (69・70)、灰釉陶器 (71～73)、須恵器 (152) が出土した。(152) は墨書土器の項で説明する。

69 土師器皿。口径 14.2cm、器高 2.2cm。外面の上半部を横ナデする（図版 7）。

70 土師器小型鉢。口径 8.0cm、器高 2.8cm。丸底の底部から立ち上がり、端部で外反し平坦面を形成する。胎土は淡褐色で微砂が混じる（図版 7・33）。

71 灰釉陶器皿 A。底部から内湾しながら立ち上がり、端部で外反する（図版 7）。

72 灰釉陶器皿。高台は三日月形で、外面はロクロナデする（図版 7）。

73 灰釉陶器椀 A。低い三日月形の高台が付き、端部はわずかに外反する。胎土は灰青色で硬質、釉は剥離する。口径 16.8cm、器高 4.9cm。硯として使用する（図版 7）。

#### SD28 出土の土器・陶器 (74～77)

土師器 (74・75)、灰釉陶器 (76)、緑釉陶器 (77) が出土した。

74 土師器皿。口径 9.6cm、器高 1.0cm。「て」字状口縁の皿（図版 7）。

75 土師器杯。口径 16.0cm。口縁端部で外反し、胎土には細砂を含む（図版 7）。

76 灰釉陶器段皿。口径 14.0cm、器高 2.9cm。細く撥形に開く高台で、底部外面には糸切り痕が残る。施釉は刷毛塗り、胎土は灰青色で硬質である（図版 7・33）。

77 緑釉陶器椀。高台は貼り付けの輪高台で段がある。底部外面には糸切り痕が残る、器形は深い椀形をする。口縁部から体部にかけて、篋で器壁を外側から縦方向に押し、四

輪花を作る。釉は暗緑色で、底部外面を除き施釉する。胎土は暗青灰色で硬質、砂粒を含まない。口径 11.9cm、器高 4.4cm(図版 7・33)。

#### SK47 出土の土器・陶磁器 (78～91・132・134・135・137)

土師器、黒色土器 (78・79)、灰釉陶器 (80)、緑釉陶器素地 (81)、緑釉陶器 (82～84)、須恵器 (85～88・132・134・135・137)、青磁 (89・90)、白磁 (91) が出土した。須恵器転用硯 (132・134・135・137) は硯の項で説明する。

78 黒色土器椀。口径 14.4cm、器高 4.8cm。底部から内湾して立ち上がり、端部で外反する。胎土は灰黒色で粘質。内面の磨きは磨滅して不明。黒色土器 A 類 (図版 7)。

79 黒色土器椀。口径 14.0cm、推定器高 5.6cm。内湾して立ち上がり、内面端部には沈線がある。ヘラミガキは内面は密で外面は粗い。灰黒色の粘質の胎土。黒色土器 B 類 (図版 7)。

80 灰釉陶器椀。口径 16.2cm、器高 5.0cm。底部に低い三日月形高台が付き、口縁端部は外反する。外面下半はロクロ篋削り調整し、胎土は灰色で硬質、釉は緑色である (図版 7・33)。

81 緑釉陶器素地椀 A。底径 5.8cm、口径 10.7cm、器高 4.8cm 前後に復元できる。削り出しの輪高台で、外面はなで調整する。(図版 7)。

82 緑釉陶器椀 B。口径 11.8cm、器高 4.4cm。削り出しの輪高台から内湾して立ち上がり、端部で外反する。外面下半はロクロヘラケズリ、内面はヘラミガキ調整し、器壁が薄い。胎土は灰青色で硬質、釉は緑色で薄い (図版 7)。

83 緑釉陶器椀 A。口径 16.6cm、器高 5.7cm と大きく、深い椀。貼り付けの輪高台は高く幅が狭い。底部内面には径 3.0cm、幅 0.5cm の沈線があり、底部内面と底部外面には三又トチン痕がある。素地は暗青灰色で薄く硬質で、全面に厚い緑色釉を施す (図版 7・33)。

84 緑釉陶器壺。口径 10.0cm、端部をつまみ上げ、須恵器瓶子の口縁と同様の形態をする。胎土は青灰色で硬質、焼成も良好である。釉は緑色で薄い (図版 7)。

85 須恵器鉢。口縁端部が玉縁状になる通常の鉢とは形態が異なり、底部からわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁下で外反しさらに短く伸び尖る。口径 19.2cm、器高 8.6cm。胎土は灰白色で軟質、砂を含まない (図版 7・33)。

86 須恵器鉢。口縁部が玉縁状の鉢。胎土は青灰色で硬質、砂を含まない (図版 7)。

87 須恵器甕。端部を外反させて台形の平坦面を造る甕。推定口径 25.8cm、胎土は灰暗色で硬質、砂を含まない (図版 7)。

88 須恵器甕。端部の外面が幅 2cm ほど帯状に肥厚。胎土に細砂を含み硬質 (図版 7)。

89 青磁杯。底部からわずかに内湾しながら立ち上がる器形で、口径 13.9cm、推定器

高 4.8cm。外面上半をロクロなどで、下半はロクロヘラケズリ調整する。釉は内面と外面の上半部に施し、灰オリーブ色で貫入があるが、剥離した部分が多い。器形・釉調が越州窯青磁と異なり、長沙銅官窯青磁の可能性ある（挿図 18、図版 34）。

90 青磁椀。口径 22.0cm の大型青磁椀で、口縁端部が外反する。外面下半部はロクロ篋削りし、灰色をした硬質な胎土で、釉は灰オリーブ色（挿図 18、図版 34）。

91 白磁椀。蛇の目高台椀の底部破片（図版 34）。

#### SK46 出土の土器・陶磁器（92～96・157）

土師器（92・93）、須恵器（94）、緑釉陶器素地（95）、白磁（96）、緑釉陶器（157）が出土した。（157）は墨書土器の項で説明する。

92 土師器杯。口径 14.0cm、推定器高 2.7cm。端部が外反し受け部状になる（図版 7）。

93 土師器甕。頸部が「く」字状になる甕。推定口径 20.2cm。内面はなで、外面には指押さえ痕が残る。胎土は赤褐色で、微砂が混じる（図版 7）。

94 須恵器杯。口径 10.8cm、器高 3cm。内外面をロクロなどでし、底部には篋起し痕が残る。胎土には白色の砂粒が混じる（図版 7）。

95 緑釉陶器素地椀。口径 15.2cm、器高は 5.0cm 前後に復元できる。内湾しながら立ち上がり、端部でわずかに外反する。胎土は灰青色で、焼成は硬質（図版 7）。

96 白磁椀。蛇の目高台椀の底部破片（図版 34）。

#### SK44 出土の土器（97）

小規模な柱穴状の土壌から土師器（97）が出土した。

97 土師器甕。小さな土壌内に正位置で埋めていたが、上半部は欠損していた。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整を行う。胎土は淡赤褐色で大粒の砂が混じる。残存部の最大径は 24.1cm。内面には灰黒色の物質が付着する（図版 7）。

#### SB26 柱穴出土の陶器（98）

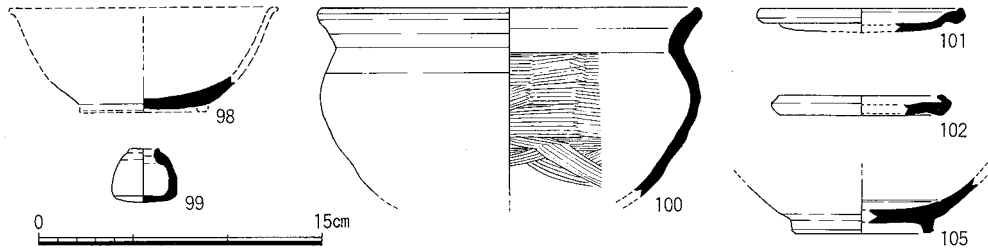
98 緑釉陶器。高台は低い輪高台で、幅が狭い。胎土は砂粒を含まず、白灰色で軟質、釉は明緑色で厚く全面施釉である。釉下は灰色をしている（挿図 19）。

#### SK45 出土の土器（99・100）

黒色土器（99）、土師器（100）が出土した。

99 黒色土器のミニチュア壺。口径 1.6cm、器高 2.8cm を測り、類例は少ない。粘土板で底部を作り、体部は粘土紐を巻上げて作る。口縁部は短く端部は直立する。色調は黒色で、胎土中に少量の砂を含む（挿図 19、図版 33）。





挿図 19 SB26 柱穴、SK25・45 出土土器・陶磁器実測図 (1:4)

100 土師器甕。口頸部が「く」字状になる。口径 20.6 cm。外面はなで調整し、体部内面には粗い刷毛目痕がある。胎土は粘質で、色調は淡灰色。外面に煤が付着する（挿図 19）。

#### SK25 出土の土器・陶磁器 (101 ~ 105)

土師器 (101・102)、緑釉陶器 (103・104)、青磁 (105) が出土した。

101 土師器皿。口径 11.2cm、器高 1.2cm の浅い「て」字状口縁の皿。胎土は灰色（挿図 19）。

102 土師器皿。口径 9.6cm、器高 1.1cm。底部は厚く平らで、体部は短く内傾しコースター状をする。色調は灰褐色で細砂を含む（挿図 19）。

103 緑釉陶器水注。把手の破片、幅 1.4cm、厚さ 0.8cm の粘土板を篋削りし整形する。素地は暗灰青色で硬質、釉は暗緑色である（挿図 16）。

104 緑釉陶器香炉。小型の三足香炉で、素地は灰白色で軟質。釉は緑色（挿図 16）。

105 青磁椀。輪高台で底部内面と置着部に目痕がある。釉は灰青色で胎土は灰色である。越州窯青磁である（挿図 19、図版 34）。

#### 遺物包含層、他出土の土器・陶磁器

遺物包含層や遺構確認トレンチ、攪乱層から土器・陶磁器が若干出土した。以下主要なものに限って掲載する。

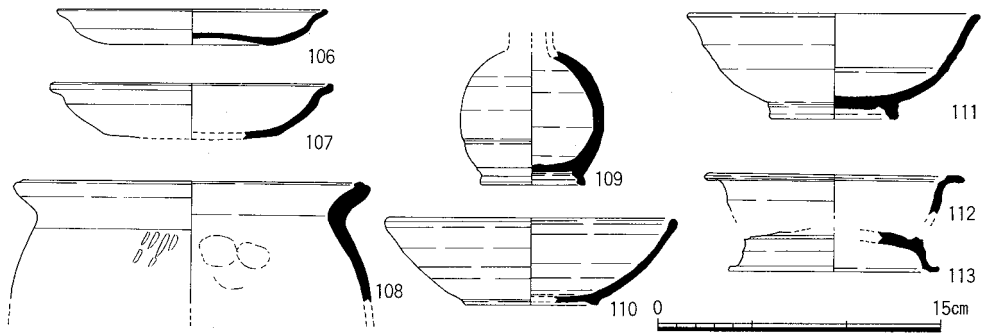
#### 北トレンチ淡黄灰色泥砂層出土の土器・陶器 (106 ~ 108)

北トレンチの淡黄灰色泥砂層から土器 (106 ~ 108) が出土した。

106 土師器皿。口径 14.4cm、器高 1.9cm。口縁部の上半部を強く横ナデし、端部を丸く収める。内面に刷毛目痕が残り、胎土に細砂を含み、色調は淡灰褐色である（挿図 20）。

107 土師器杯。口径 15.1cm、推定器高 3.0cm。口縁部上半部を強く横ナデ調整し、下半は未調整である。胎土は粘質で、色調は淡褐色である（挿図 20）。

108 土師器甕。口径 19.0cm。口頸部が「く」字状になり、端部には横ナデで平坦面ができる。外面を叩き調整し、内面には当て板の痕跡がある（挿図 20）。



挿図 20 遺物包含層など出土土器・陶器実測図 (1:4)

#### 遺物包含層など出土の陶磁器 (109 ~ 128)

109 須恵器瓶子。底径 5.5cm。高台が付き体部は卵型で、今回の出土遺物の中では最も古い一群に属し、9 世紀前半のものである (挿図 20)。

110 須恵器碗。口径 15.6cm、器高 4.7cm。底部をロクロヘラケズリし、輪高台状にする。口縁部は玉縁状に肥厚させる (挿図 20)。

111 緑釉陶器碗 B。口径 15.7cm、器高 5.6cm。底部から内湾しながら立ち上がり、端部でわずかに外反する。高台は削り出しの輪高台で、幅があり台形をする。内面にはヘラミガキ痕がある。全面施釉で重ね焼き痕があり、釉は緑色に発色する。胎土は灰青色で硬質。出土の緑釉陶器の中では古い形式をもつ (挿図 20)。

112・113 緑釉陶器香炉。同一胎土の口縁部と底部片が出土しているが接合しない。法量は口径 13.8cm、底径 11.2cm 前後に復元できる。胎土は暗茶灰色で硬質、釉は厚く暗緑色で、貫入がある (挿図 20)。

114 青磁杯。内湾しながら立ち上がり、端部はほぼ垂直になる。端部に目跡があり、素地はシルバーグレー、釉は灰緑色である。口径 14.1cm (挿図 18、図版 34)。

115 青磁杯。蛇の目高台。高台暈着部と底部内面に、目痕が残る (挿図 18、図版 34)。

116 青磁杯。外面の上半までロクロ篋削りする。胎土は灰黒色で硬質 (図版 34)。

117 青磁杯。蛇の目高台で、底部外面の暈着部と見込みに、目痕が残る (図版 34)。

118 青磁杯。端部が外反する碗で、釉は緑色 (図版 34)。

119 青磁碗。細い輪高台の底部から体部が内湾しながら立ち上がる器形。底部内面には段が付く。胎土は灰青色で硬質、釉はモスグレー色 (挿図 18、図版 34)。

120 青磁碗。円盤形の高台脇をさらに抉り込み、幅の広い輪高台状にする。底部内面

には目痕があり、胎土は青灰色で硬質、釉の色は剥離して不明である（挿図 18、図版 34）。

121 青磁合子。口径 11.6cm。蓋受け部があり、3.0cm 間隔で目痕が残る。身と蓋を共焼きにしている。硬質の灰青色胎土で、釉はオリーブ色である（挿図 18、図版 34）。

122 青磁壺。体部の小破片で、細線で唐草文を陰刻する。胎土は淡灰色で硬質、釉は灰緑色。越州窯青磁である（挿図 21）。

123 青磁。底部の破片である。器壁は 3.5 mm と薄く、底部内面に八弁の花と葉を陰刻している。底部外面の中心はロクロ篋削りで尖る。胎土は淡灰青色、釉は青緑色で厚い。高麗青磁である（挿図 21）。

124 白磁椀。玉縁口縁の椀、貫入がある（図版 34）。

125 白磁椀。灰緑色のガラス質釉で貫入があり、胎土は灰青色である（図版 34）。

126 白磁椀。玉縁口縁で胎土は白色で硬質、白灰色の釉が掛かる（挿図 18、図版 34）。

127 白磁椀。玉縁口縁の断面に細い穴が開く。灰白色の釉が掛かる（図版 34）。

128 白磁椀。口縁は発達した玉縁で、釉は灰青色、貫入がある（図版 34）。

### SD19 出土の土器・陶器 (129 ~ 131)

北トレンチ SD19 の上層の焼土層から土師器 (129)、瓦器 (130)、山茶椀 (131) が出土した。

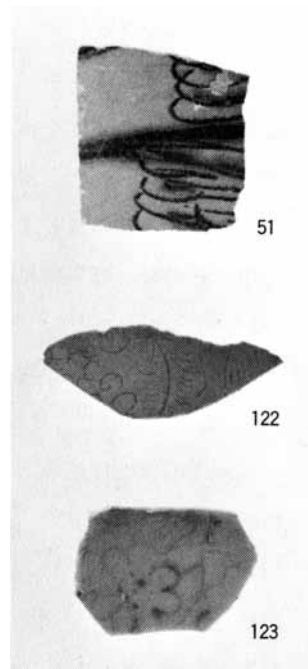
129 土師器皿。口径 11.2cm、器高 1.7cm。口縁上半部を横ナゲし、下半は未調整である（挿図 22）。

130 瓦器皿。口径 10.4cm、推定器高 1.9cm。体部上半部を横ナゲ、内面は荒くナゲる（挿図 22）。

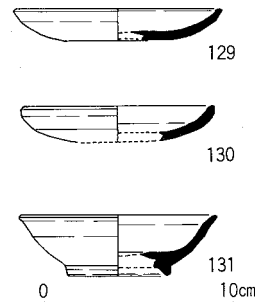
131 山茶椀。口径 10.6cm、器高 3.2cm の小椀で、断面三角形の高台が付く。胎土は灰青色で、焼成は硬質（挿図 22）。

### 3 硯（図版 5・7・8・32・35、表 2）

硯は合計 45 点出土した。素材別では土器 43 点と石製品 2 点で、石硯は近世のものである。



挿図 21 輸入陶磁器



挿図 22 SD19 出土土器  
陶器実測図 (1:4)

器種別では須恵器の硯が 33 点で、内訳は、風字硯 4 点、猿面硯 1 点、甕の体部を加工した転用硯 25 点、壺の体部を加工した転用硯 3 点である。灰釉陶器の硯はいずれも転用硯で 6 点出土し、平瓶の体部を転用したものが 1 点、椀の底部内面を利用したもの (43・44・73) があり、同様のものは他に 2 点ある。緑釉陶器は椀の転用硯が 1 点ある。黒色土器の硯は 3 点で、風字硯 2 点、鉢の転用硯が 1 点ある。

#### 灰釉陶器の転用硯 (43・44・73)

- 43 灰釉陶器の皿 A を使用した硯。底部内面に黒墨が付着する (図版 5)。
- 44 灰釉陶器の椀 A を使用した硯。底部内面に朱墨が付着する (図版 5・32)。
- 73 灰釉陶器の椀 A を硯に転用している (図版 7)。

#### 須恵器の硯・転用硯 (132～148)

132 唯一の猿面硯で、内面には同心円のタタキメ、外面には平行のタタキメが付く。側面は丁寧にケズリ調整する。使用痕が顕著に残る (図版 8・35)。

133 甕の転用硯で、比較的残りがよく全形を復元できる。長辺 12.0cm、最大幅 9.5cm 前後。内面中心部に使用痕が顕著にある (図版 8・35)。

134 甕の体部を利用した硯。長辺 11.0cm と比較的小さい (図版 8・35)。

135 甕の側面を丁寧に削り調整する。使用痕は少ない (図版 8)。

136 甕の体部内面を利用した硯。形は台形で使用痕が目立つ (図版 8・35)。

137 甕を転用した硯。側面は丁寧にケズリ調整し、使用痕が顕著である (図版 8・35)。

138 須恵器壺を転用した硯。形態は円形に近く、直径 13.3cm を測る (図版 8・35)。

139 外面格子タタキ、内面平行タタキの甕を転用した硯 (図版 8)。

140 外面平行タタキの甕を転用した硯 (図版 8)。

141 甕の体部を利用した硯、内面は平行叩き、外面は格子の叩き目が付く (図版 8・35)。

142 甕の転用硯。形態は円形に近く、径 8.0cm ほどに復元できる (図版 8・35)。

143 壺の転用硯。内面はよく使い込まれている (図版 8)。

144 甕の転用硯。規模が大きく長辺は 17.5cm を測る (図版 8・35)。

145 甕の体部内面を利用した硯。長辺は 19.0cm と大きい (図版 8)。

146 体部に二本の凸帯と縦方向の鱗の付く須恵器壺を利用した硯 (図版 8・35)。

147 須恵器風字硯。前面の脚は短く器壁も薄い (図版 8)。

148 須恵器風字硯。海部の小破片、胎土は灰青色で焼成は良い (図版 8)。

(147・148) 以外に風字硯の小破片が 2 点出土している。

黒色土器の硯・転用硯 (149～151)

- 149 黒色土器の風字硯。小片で全形は不明。内外面を黒色処理する（図版8）。
- 150 黒色土器の風字硯。器壁は薄くシャープに端部を作る。黒色土器B類。（図版8）。
- 151 黒色土器転用硯。鉢の底部を削り台形に形を整える（図版8）。

4 平安時代の墨書土器（挿図23、図版36）

墨書土器が10数点出土した。灰釉陶器の底部外面に記すものが多く、土師器・須恵器に書くものは少ない。陰刻の文字資料についてもここで取り上げる。

墨書土器 (152～156)

152 須恵器鉢の体部外面に「仁和寺」と記す。小破片であるが文字がよく残る。SD34から出土した（挿図23、図版36）。

153 灰釉陶器の底部外面に「南御房」と記す。南トレンチ西部の平安時代の包含層、茶褐色砂泥層から出土した（挿図15・23、図版36）。

154 灰釉陶器の底部外面に「珍重」と記す。東トレンチから出土（挿図23、図版36）。

155 灰釉陶器の底部外面に「■」と記す。「蓄」と同義か。北トレンチ東の遺構確認トレンチから（156）と共に出土した（挿図23、図版36）。

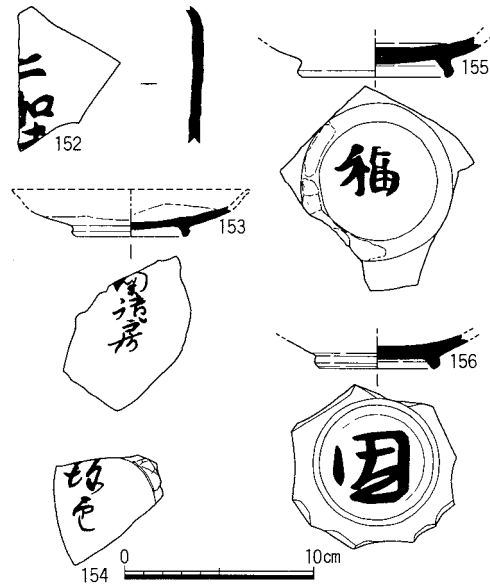
156 灰釉陶器の底部外面に「因」字状の文字を記す（挿図23、図版36）。

文字陰刻の陶器 (157)

157 緑釉陶器の供膳形態の底部外面に文字を陰刻する。高台は撥型に開く輪高台で、明緑色釉を全面に施す。胎土は灰色で焼成はやや甘い。陰刻は釉下であり、下半部が欠けているが「南」と読める。SK46から出土した（図版36）。

5 近世の土器・陶磁器（挿図24～26、図版36・37）

近世の土器は、溝・土壌などから出土した。ここでは近世前期のSD04出土遺物



挿図23 平安時代の墨書土器実測図 (1:4)

と「仁清」銘陶器を中心に報告する。

#### SD04 出土の土器・陶磁器 (158～165)

SD04からは、土師器(158・159)、瓦質土器(160)、国産陶器(161・162)、国産磁器(163～165)などが出土した。なお、(162)は「仁清」銘陶器の項で説明する。

158 土師器皿。口径8.6cm、器高1.8cm。底部内面の底部と体部の境になでによる凹線が巡り、端部はやや立ち上がる。焼成は軟質で、色調は淡褐色である(挿図24)。

159 土師器塩壺。口径5.8cm、器高9.2cm。体部は厚く端部で薄くなる(挿図24)。

160 瓦質土器甕。口径40.6cm、器高35.7cm。体部は内湾し、端部は直角に曲げ平坦面を作る。外面の上半部は櫛描き文で飾る。焼成は軟質で色調は淡灰色である。(挿図24)

161 陶器皿。口径11.4cm、器高2.1cmの浅い皿。底部は内反りで、体部は斜上方に開き端部にいたる。内面と体部外面に長石釉が掛かる(挿図24)。

163 白磁碗。口径12.0cm、器高6.1cm。釉は白色で貫入がある(挿図24)。

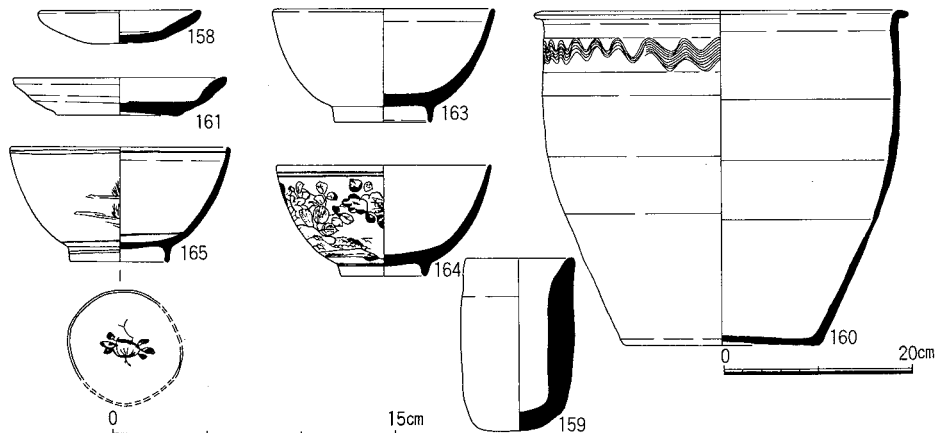
164 青花磁器碗。口径11.6cm、器高5.9cm。体部外面に呉須で花卉文を描く(挿図24)。

165 青花磁器碗。口径12.0cm、器高6.1cm。外面に呉須で松葉文、内面に圏線と花卉折枝文を描くが、発色は(164)に比べ薄い。底部の外面に「宣明」銘がある(挿図24)。

#### 「仁清」銘陶器(162・166～169)

SD04や近世の包含層から「仁清」銘の陶器が数点出土した。

162 陶器鉢。口径13.1cm、器高10.4cm、底径7.0cmの直口で平底の鉢。灰青色の釉を内面と外面上半部に掛け、一部釉の厚い部分は暗緑色に発色する。施釉の境界部分は淡赤色になる。外面の体部から底部にかけて丁寧なロクロヘラケズリ痕が残る。銘はないが、技法・



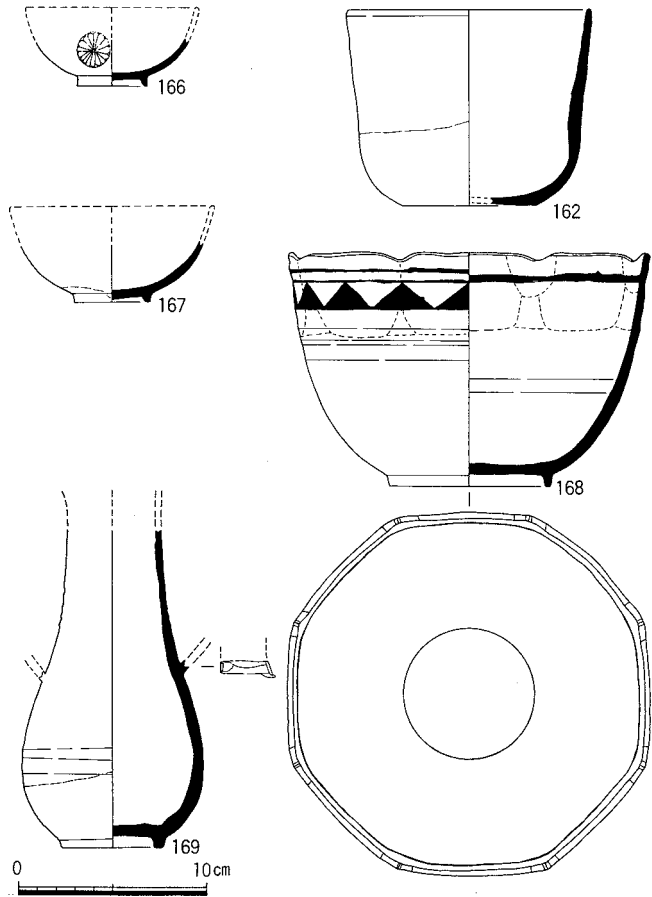
挿図24 SD04出土土器・陶器実測図(1:4)(1:8)

素地・釉調は「仁清」銘の一連の遺物と同じである。SD04から出土した（挿図25、図版37）。

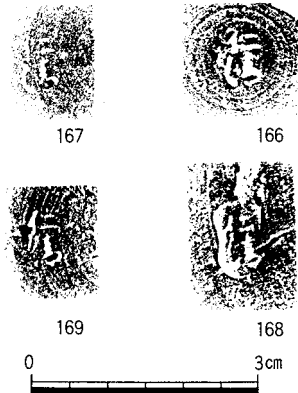
**166** 陶器椀。高台径3.6cmの底部片。輪高台は幅が薄く低い、胎土は灰色で、釉は淡灰黄色である。体部の外面中位に薄青色の呉須で16弁の菊花文を描く。底部外面の中央部に「仁清」銘がある。SD04から出土した（挿図25・26、図版37）。

**167** 陶器鉢。下半部の破片で、外面に文様があるが残りが悪く不明。底径4.0cm。底部外面の左側に「仁清」銘がある。SD04から出土した（挿図25・26、図版37）。

**168** 陶器鉢。口径19.4cm、器高12.6cm、底径8.3cm。底部から丸く内湾しながら立ち上がり、口縁部は八角形に加工し、各コーナーには輪花を付ける。外面はロクロヘラケズリし、見込みには灰被りがあり、二次的にその凹凸を削り取る。施文は、暗茶色の鉄釉（錆絵）で、外面の口縁部下に二重圏線、その下には鱗の三角文を16個配置し、内面の上半部は一重の圏線を巡らす。施文の上には灰白色釉を高台と底部外面を除く部分に施す。胎土は砂粒を含み、焼成は硬質。底部外面の左側に分銅型の「仁



挿図25 「仁清」銘陶器実測図(1:4)



挿図26 「仁清」銘拓影(1:1)

清」銘がある。北トレンチの近世土層から出土した（挿図 25・26、巻頭図版、図版 37）。

169 陶器花瓶。把手・口縁部が欠損し、全体を復元できない。底部から湾曲して立ち上がる体部は口縁端部に向かって細くなり、その中位に幅が 2.5cm の把手が付く。貼り付け高台で、低い台形をする。体部と底部は幅の狭いロクロヘラケズリを行う。施釉は外面の上半部と内面全面で、文様は不明。釉は灰色で素地は淡灰青色である。底部外面の左側に「仁清」銘がある。底径 5.3cm、胴部最大径 9.6cm、推定器高 21cm。SD04 から出土した（挿図 25・26、図版 37）。

「仁清」銘陶器の胎土はいずれも長石粒を含むが、鉢・花瓶（162・168・169）は鉄分の多い胎土を使い、（162）は施釉の境が赤褐色に発色する。椀（166・167）は白い精良な土を使う。

#### 註

- 1 近世の遺物は 17 世紀の遺物を中心に整理した。
- 2 白色土器は中世の白土器と用語が似ており、また位置づけが様々あり概念が混乱しているが本報告では用語設定の当初の概念（大石良材・甲元真之『少将井遺跡発掘調査報告』平安博物館 1972 年）に従う。
- 3 緑釉陶器の基本は素地を焼成した後に施釉し、再度低温度で焼き製品に仕上げる。窯跡には素地と施釉した破片が共に廃棄されている。平安京近郊の緑釉陶器の生産窯に特徴的であるが、緑釉陶器を製品にする過程の素地（未施釉）と施釉した本来の製品を共に、消費遺跡に供給する。消費遺跡出土の素地を無釉陶器とした報告書も多いが、ここでは緑釉陶器素地として報告する。  
百瀬正恒「長岡京跡右京第 69 次（7ANSDD 地区）発掘調査概要」『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第 4 集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1984 年
- 4 墨書土器の积文作成は、（故）中村 研氏（同志社大学人文科学研究所）に依頼した。
- 5 京都市内での類例は少ないが、奈良市内の 17 世紀の遺構から瓦質で体部上半に楡描き文のある甕が出土し、共通する調整・胎土である。
- 6 「仁清」銘陶器については、東京国立近代美術館の中ノ堂一信氏から教示を受けた。  
中ノ堂一信『京都窯芸史』淡交社 1984 年



## 6 瓦（挿図 27～32、図版 9～24・38～52、表 3～12）

瓦は各トレンチから多量に出土した。その量は出土遺物の約3分の2を越え、時代的には円堂院成立期の平安時代中期のものが大半で、軒瓦、丸瓦・平瓦、道具瓦などがあり、緑釉瓦が含まれる。<sup>註1</sup>量的にはこれに近世の仁和寺再建以降のもの、平安後期、鎌倉前期のものが続くが、室町時代の瓦はほとんどない。緑釉瓦は軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・熨斗瓦・面戸瓦・道具瓦・丸瓦が出土した。<sup>註2</sup>

## 緑釉瓦

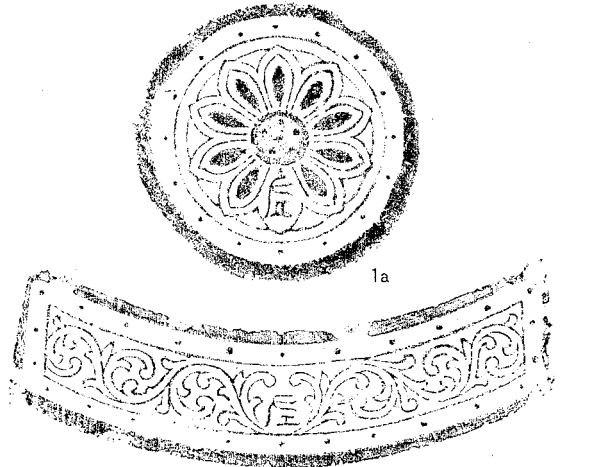
## 緑釉軒丸瓦（1～4）

1a 花卉は杏仁様で10葉、蓮子は6(1+5)顆。花卉の外縁、中房と花文のまわりを二重線で囲む。花卉の1枚に篆書で「左」字銘を刻している。外区には小型の珠文を16個巡らした。優れた図柄である。「左」字銘のある緑釉軒平瓦(5)とセットをなす。(1b)は下半部を欠損。裏面の一部に布痕がある(挿図 27、巻頭図版、図版 9・38)。

2 花卉は8葉、分離式でやや長めの桜花様、輪郭を線で表す。子葉は2本、頭部で連なる。全体の印象は大極殿出土の緑釉大瓦(『平安京古瓦図録』49、以下『図録』と記す)に近<sup>註3</sup>い。ただ花文に弁間文を欠き、中房外圏が二重円で、蓮子が5(1+4)顆であることなどが異なる。栗栖野瓦屋製か。<sup>註4</sup>一本造(図版 9・38)。

3 蓮子は6(1+5)顆で、花文はやや(1)に似通い、花卉は単弁式9弁で、弁先を通る円と外側の圏が造る文様もまたそれに類している。一乗寺向畑町<sup>註5</sup>遺跡から同範瓦が出土している(図版 9・38)。

4a 複弁4葉蓮華文系の亜種である。(7)と共に池田瓦屋<sup>註6</sup>(略称「右」)の製である。(4b)は灰褐色で硬質、暗緑色の釉を厚く施す。裏面が欠け、一本造か不明(図版 9・38)。



## 緑釉軒平瓦（5～11）

内裏跡出土

0 10cm

5a 5～6葉の蕨手からなる 挿図 27 「左」字銘緑釉軒丸瓦・無釉軒平瓦拓影(1:4)

円形単位文の外行3転式を複線で描く。内裏跡から出土した無釉軒平瓦（挿図27）によると、中心に(1)と同様の「左」字銘がある。「左」は造瓦所名の頭字で、その完称・所在は未詳。(5b)は左側の破片（図版9・39）。

6 主文は3葉蕨手外行3転式で、中心のC字様対向文と共に複線で表現され、中心に楷書体の「栗」（左字）銘がある。単位文の外形は円に近い（図版10・39）。

7 中心は対抗C字文の変形。両辺の唐草文もかなり乱れがみえる。外区を巡る珠文は24個、互いに細い線で結ばれている。池田瓦屋製（巻頭図版、図版10・39）。

8 右辺の細片で、文様の細部は不明（図版10・39）。

9 内裏内郭回廊跡・豊楽院跡出土の同范例（『図録』388～390）によると、文様は蕨手外行3転式の一つ、複線と単線と交えて描き、中心には特異なC字対向文をもっている。小野瓦屋註8に同范がある（図版10・39）。

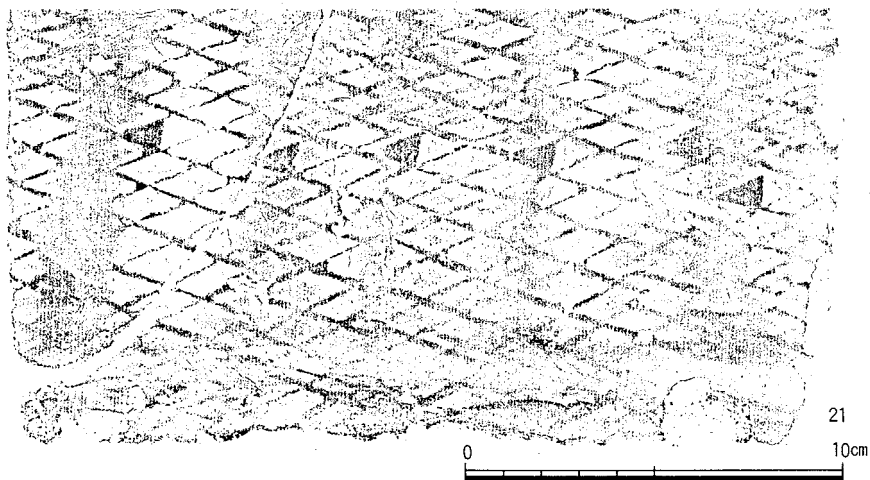
10 細片の軒平瓦であるが、文様は無釉の軒平瓦(90)に近い（図版10）。

11 中央から右辺を失っているが、無釉の同范瓦(88)によると、中心に「垂」字様の変形文があり、両辺の唐草は、単位文の先が次の単位にまでのびるもので、栗栖野瓦屋系（『図録』367・368）の垂種註9で、河上瓦屋の製である（図版10・39）。

#### 緑釉鬼瓦・道具瓦・丸瓦(12～21)

12 緑釉鬼瓦。右眉の破片で、上部右に小さな突起があり、刺突文の細い穴が開く。眉は左上から右下に細い平行する沈線を描き、毛を表現する。釉は暗緑色で厚い（図版11・40）。

13 緑釉熨斗瓦。熨斗瓦は凸面が斜格子のタタキ(13・14)と縄タタキ(15・16)のもの



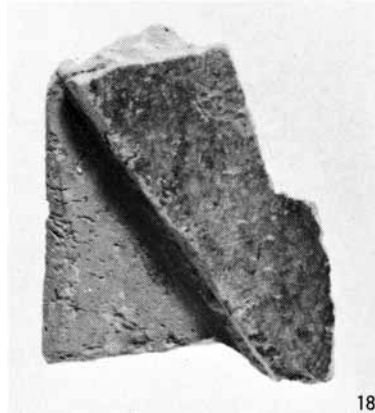
挿図28 緑釉丸瓦の范傷拓影(1:2)

があり、いずれも割熨斗瓦である。(13)は凸面が斜格子のタタキ、施釉は側面から凸面にかけて行い、凸面の施釉幅は約2cmである。灰褐色の胎土で、焼成は軟質(図版11・40)。

14 緑釉熨斗瓦。凸面に斜格子の叩きがある熨斗瓦(図版11)。

15 緑釉熨斗瓦。凸面に縄目タタキがある。(16・17)に比べ焼成があまり(図版11)。

16 緑釉熨斗瓦。凸面に縄目タタキがある熨斗瓦。右側面には平瓦を半截した痕がある(図版11・40)。



挿図29 緑釉道具瓦

17 緑釉面戸瓦。丸瓦を半截して四隅を切り落とし、亀甲形に作る。側面の一部に打ち欠いて二次的に整形した痕がある。凸面の全面に施釉する(図版11・40)。

18 緑釉道具瓦。丸瓦を凸面部の左側面の下方を斜に切り落とし、その角度は側面に対し約40度になる。凸面に施釉する(挿図29)。

19 緑釉丸瓦。通常の丸瓦(20・21)に比べ幅が2.5cmほど大きく、凹面の布目は1.0cmあたり8本で他のものに比べ細かい。釉は銀化し暗緑色に発色する。法量や釉から平安時代前期の製作(図版12・40)。

20 緑釉丸瓦。完形の丸瓦で凸面に斜格子のタタキメがある。タタキは一辺1.2～1.4cmの斜格子で、叩き板の範傷から5～6回で一枚の丸瓦の凸面処理をしたことがわかる。釉は焼成時にとんだ部分が多いが、残存部は明緑色に発色する(図版12・40)。

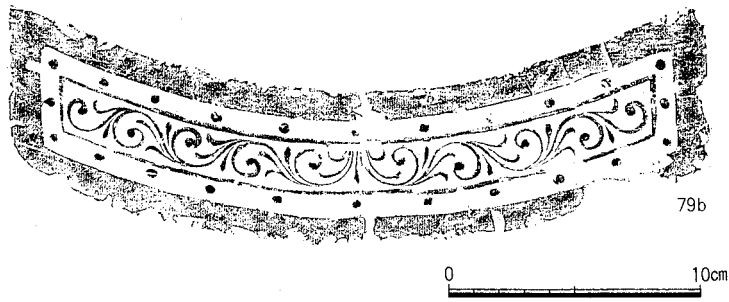
21 緑釉丸瓦。(13・14・20)と同じ斜格子の叩きがある。(20)と同様の範傷がある(挿図28、図版12)。

#### 無釉軒瓦

#### 仁和寺でよく見かけるもの、その他(22～25、79～82)

22 無子葉8弁、花卉は中高で、弁間文はない。中房は平型で圏内に9(1+8)顆の蓮子がある。花文の外周は太く、外区に16個の珠文を巡らし、周縁はやや広い。瓦当は厚い。内裏跡に出土例があるが、類例は少ない(図版13・41)。

23 単弁風12葉花文。外側を先端で連続する弁間文で囲み、外圏を巡らし外区を作らない。中房は平型で、弁基に沿って周圏があり、5(1+4)顆の蓮子を入れる。本寺域で多く見かける(図版13・41)。



挿図 30 無軸軒平瓦拓影 (1:3)

24 単弁風 12 葉花文。中房は広く、外圏がある。蓮子は 5(1+4) 顆らしい。弁間文、外区はない。文様はかかなり退化している。本寺に多い

(図版 13・41)。

25 単弁式 16 葉 (?), 花卉は互いに密接し、中房は二重圏、蓮子は 9(1+8) 顆 (図版 13)。

79a 主文は 4 葉 (両端は 3 葉) 蕨手の外行 4 転唐草文からなり、いわゆる均整唐草文であるが、中央文はまったく異式である。図版 19 では上縁にかすかな白線がみえるが、これは笱の外郭線で、周縁が広い。内裏跡ならびに蘭林坊跡に同笱例がみられる。これらは下線のみが広い。(79a) は周縁が著しく広いが、(79b) は通常幅である。今回の調査で出土した軒平瓦の中では最も数が多い (挿図 30、図版 19・47)。

80 主文は左端から起る反転式唐草文と、左行する 1 単位で構成される。外区は二重の圏線で囲まれ、珠文を配す (図版 19・47)。他に (81・82) も類似した文様である (図版 19・47)。

#### 木工寮瓦屋 (栗栖野瓦屋・小野瓦屋)、修理式瓦屋 (池田瓦屋) とそれに近いもの

(26 ~ 33、83 ~ 87)

26 菊花様単弁 13 葉花文で、中房は周圏がなく、6(1+5) 顆の蓮子を含む。外区には 13 個の珠文を配す。他に内裏跡などに出土例 (『図録』90・91) がある。一本造 (図版 13・41)。

27 中劃線のない複弁 8 葉。弁間文はなく、中房は平型で、無周圏である。花文外側に 1 圏があり、外区に珠文を 20 個巡らす。一本造。同笱例は平安宮康楽堂・豊楽院跡・中務省跡などにある (図版 13・41)。(28) は類似した文様の細片 (図版 13)。

29 文様未詳 (図版 13・41)。その他 (33) も類似した文様である (図版 14)。

30 複弁 8 葉花文。弁間文があり、外圏はない。珠文は 7(1+6) 顆で中心のものが大きい。裏面に布痕が残る。朝堂院跡・豊楽院跡などに出土例 (『図録』81) がある (図版 13)。

31 複弁 8 葉花文。無圏の中房内に 5(1+4) 蓮子。主文に接して花形圏、その外に円圏があり、外区に連珠文 11 個を配す。同笱 (『図録』80) は、内裏跡・朝堂院跡・豊楽院跡・蘭林坊跡などにみられる (図版 14・41)。

- 32 複弁系の瓦で、裏面に布痕がある（図版 14）。
- 83 緑釉の（6）と同範である（図版 19）。
- 84 栗栖野瓦屋系の亜種で、池田瓦屋の製である。朝堂院跡・豊楽院跡・真言院跡・民部省跡・東寺などに出土例（『図録』370・371）がある（図版 19・47）。
- 85 中心は対向C字文で、栗栖野瓦屋に同範がある（図版 19）。
- 86 原型は栗栖野瓦屋にあり、その亜種（図版 19・47）。
- 87 同一個体であるが2片に分かれている。完形品では、中央に立位の蓮華文、両辺に図案化した散蓮華を配したもので、小野瓦屋の作である（図版 19・47）。

#### 河上瓦屋製（88～90）

- 88 （11）の緑釉瓦と同範、ほぼ完形である（図版 20・48）。
- 89 内裏跡出土の完形品（『図録』412）でみると、主文中心上部の空間に「上■河」の銘があり、同範で無銘のもの（『図録』41）もある。同範は民部省跡・野寺跡（北野廃寺）・<sup>註11</sup> 釈迦谷廃寺などにある（図版 20・48）。
- 90a 文様の特徴は（88）に近いので、ここに入れる。（90b）は中心から右辺の破片。緑釉の（10）は、これに類似する文様である（図版 20・48）。

#### 森ヶ東瓦屋の製品、または類似のもの（34～39、91～99）

- 34 主文は単弁菊花様 12 葉で、無圏の狭い中房内に 5(1+4) 顆の蓮子を含む。花文を巡り 1 圏があり、外区に珠文 12 個 (?) を巡らす。周縁の有無は不明である。森ヶ東瓦屋<sup>註12</sup> から出土する（図版 14・42）。
- 35 内裏跡から出土した同範の完形品（『図録』98）では、花文は 8 葉。弁間文があり、有圏の中房内には「下」の銘がある。無釉瓦は内裏跡・豊楽院跡・蘭林坊跡などから、緑釉瓦は大極殿跡から出土する（図版 14・42）。
- 36 主文は複弁 8 葉で中房は広い。蓮子数は不明。外区は二重で、内側に多数の珠文、外側に単葉蕨手の連続反転文を飾る。類文は池田瓦屋にもある（図版 14・42）。
- 37 図文は前者に近いが、これは単弁であり、珠文・唐草文は粗である。栗栖野瓦屋に類文がある（図版 14・42）。
- 38 低い凸型の 8 葉花卉からなり、隣り合う弁の基部に切り欠きを加え、花蕾状の小点を入れる。外区には 16 個の珠文を巡らす。周縁不明（図版 14・42）。
- 39 同範の完形品（『図録』160）によると複弁 6 葉で、珠文帯の内外を圏線で囲む。近年<sup>註13</sup>の調査で森ヶ東瓦屋製であることが判明した（図版 14・42）。

91 主文は蔓草文で、いわゆる唐草文とは一見異なる。<sup>註14</sup>完形品では中央上部の空間に小さく「下」の銘、外区に大粒の珠文を巡らす。同范は広隆寺などにある(図版20・48)。

92 主文は蔓草文様で、中心の下方に磨り消した痕跡がある。あるいは以前に銘でもあったのであろうか。(93)も同様であるが、文様が太く、法量も大きい(図版20・48)。

94 単位文はほぼ円形で、左行反転偏行唐草文からなる(図版21・49)。

95 単位文は前者よりさらに円に近い(図版21・49)。

96 (95)に近い(図版21・48)。(97)も同様である(図版21・49)。

98 確証はないが、作瓦技法の類似からここに入れた(図版21・49)。

99 単葉蕨手内行3転式唐草文で、山形でつなぐ。森ヶ東瓦屋からは同文が出土し、この型式は河上瓦屋にもみられる(図版21・49)。

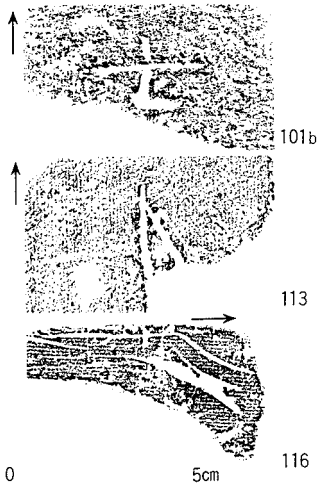
#### 大宮北山ノ前瓦屋(40)

40 図柄は(36・37)などに似ているが、花卉は無子葉の凸型で、中房内蓮子は13(1+4+8)顆である。大宮北山ノ前瓦屋 註15 の発見品である。この瓦屋からは森ヶ東瓦屋と同范瓦を出土する(図版14・42)。

#### 主に栗栖野瓦屋系の遺瓦の内、平安後期に属するもの(41～55、100～114)

41 8様の単弁で栗栖野瓦屋系に属する(図版15・43)。(42～48)は同瓦屋の製で、複弁あり、単弁あり、弁数にも8葉から12葉までまちまちで、文様にも斉不斉がみられる。

瓦当径は一般に小さい。周縁の外周は本来瓦范は正円であるが、成瓦の周縁では、左右径が上下よりも大きく、偏円形をするものが多い(図版15・43)。



挿図31 軒平瓦の刻文拓影(1:2)

51 文様は3巴文であるが、外形はやはり偏円形に近い(図版16)。(49・50・52～55)も同様(図版15・16・43・44)。

100a 主文はいずれも円形単位の蕨手反転文からなる。(100b)は右辺の破片(図版21・49)。

101a 主文は円形単位の蕨手反転文からなる。土御門烏丸内裏跡から同范<sup>註16</sup>瓦が出土している。(101b)は顎面に「七」の刻文がある(挿図31、図版21・49)。他に同様の唐草文様のもの(102～107)がある(図版21・22・49・50)。

(100・101)と同系統の瓦は、森ヶ東・池田・栗栖野・小野などの諸瓦屋にもみられるが、産地はいまのところ明

らかでない。

108 斜格子文の瓦で、(109・110)も同様(図版22・50)。他に剣頭文・花菱文・巴文など(111～114)があり、前代にはない新しい文様が出現する(挿図31、図版22・50)。

#### 近京窯関係と製作地不明のもの(56～65、115～122)

既知の官窯製瓦のほか、作瓦技法や文様など、京都風と思われるものがみられる。将来この中から官窯と決定されるものが出る可能性があり、とりあえず「近京窯」と名づけておく。ここでは、近京窯系関係と製作地不明のものを一括する。中には官窯作品と思われるものもあるが、一応この項に入れた。

56 宝珠様凸型8弁花文で、有圈平型中房内に銘を刻している。ただし、文字は解読不能。なお同文で異銘のものに「栗」、「左」、「河」、「下」など官窯の頭文字を刻した瓦がある(図版16・44)。

57 複弁風8葉花文<sup>註17</sup>で、弁の外側にこれにそって花形圏があり、その上に帯状の円圏を巡らし、その上に16個の珠文を配しており、周縁がある。同範瓦は朝堂院跡・民部省跡などにみられる(図版16・44)。

58 花卉のまわりを盛り上がった形で表す(図版16・44)。(58)は外区に珠文帯があり、同様の(59)は外区を欠く(図版16)。

60 複弁8葉花文の中房内に「卍」字を入れたもので、いくつかの亜種がある。三条西殿跡・広隆寺などにもみられる(図版16・44)。

61 複弁6葉花文を配し、弁間に単葉花卉を覗かせるもので、花文外に細圏があり、狭い外区に小珠文16個(?)を配している(図版17・44)。

62 無子葉の凸式花卉8枚。中房は凸型でやや広く、5(1+4)の蓮子を入れる。花卉を単圏で囲み、外区を欠く。瓦当裏面は断面が亀甲状に盛り上がるものが多い(図版17・44)。鳥羽離宮南殿跡その他でみられ、南殿では(116・117)とセット組む。

63 3巴文でまわりを細い二重圏で囲む。周縁は狭い。瓦当裏は亀甲状(図版17・45)。

64 3巴文でまわりを28個の珠文で囲む。瓦当裏は亀甲状で、技法からみてここに入れた(図版17・45)。

65 3巴文で、外区に珠文帯を巡らす(図版17・45)。

115 様式的には、平城宮の3葉蕨手外行3転式唐草文に近いが、これは中心文を欠き、側文には付加があり、両辺の単位文も3葉ではあるが2小葉を主蕨手が抱き、描線も肥厚し、温雅な表現をとる。この瓦と前述の(56)は平安時代中期の作であろう(図版22・50)。

116 単葉蕨手外行3転式の新様式である。左側面に「一」の刻文がある(挿図31、図版22・50)。鳥羽離宮南殿跡・広隆寺・法勝寺跡・法金剛院、その他各所でみられる。

117 (116)の左右逆文で、作瓦技法はまったく同様。両者は同一瓦屋の製作である。鳥羽離宮南殿跡<sup>註18</sup>の例では、軒平瓦(116・117)と、軒丸瓦(62)に加えて別の3巴文の軒丸瓦が一群として葺かれている(図版22・50)。

118 文様は(116)に近い(図版22・50)。

119 内向する唐草文の瓦(図版22・51)。

120 唐草文系。小片で瓦当面が荒れているため、同定が不能。瓦当面は施釉瓦と同様に平滑にしている(図版22・51)。

121a 花菱半截文の瓦。(121b)は右辺の破片である(図版23・51)。

122 主文は剣頭文(陽刻)で、上下外区に連珠を配したもの。栗栖野瓦屋では発見されていない図文である(図版23・51)。

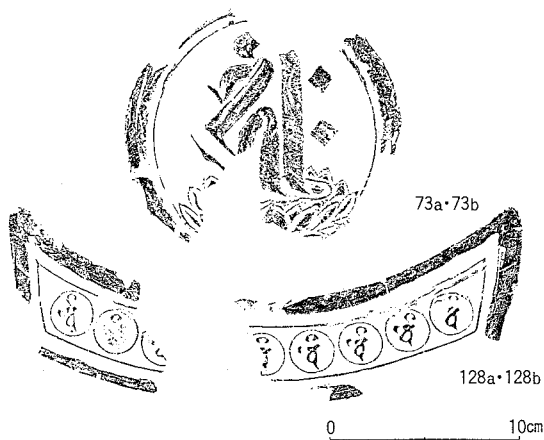
#### 地方国産の瓦(66～71・73、123～135)

平安後期に入ると、地方国産の瓦が多量に流入する。本遺跡でも顕著とはいえないがその傾向が認められる。

123 技法からみて丹波産<sup>註19</sup>と考えられる(図版23・51)。

124 作瓦技法などからみて播磨産<sup>註20</sup>の瓦と認められる(図版23・51)。播磨産の瓦は他に(66～68・73、125～128)がある(挿図32、図版17・18・23・45・46・51)。

129a 作瓦技法などからみて大和系<sup>註21</sup>とみられる。(129b)は右辺の破片である。鎌倉時代のものか(図版24・52)。他に大和系は(69、130～132)がある(図版17・24・45・52)。



挿図32 種字銘軒瓦(1:4)

70 わずかに膨らむ無子葉の6花弁。弁間文を欠く。弁形は前者に近いが先端がわずかに尖る。中房は平型で太い圈があり、蓮子は大型1顆のみ。外区には8個の珠文を疎らに配する。讃岐の小坂池瓦屋出土のものと同范<sup>註22</sup>である(図版17・45)。

133 技法が讃岐産に類似してい



る。(99)に近い(図版24・52)。

134 讃岐で同範の瓦が出土しており、東寺にも運ばれている(図版24)。

71 三巴文の瓦。無釉であるが尾張産の瓦<sup>註23</sup>である。焼成は硬質。灰釉を施すものを散見する(図版18・46)。

135 花菱半截文の瓦。灰釉が掛かり、(71)と同様尾張産の瓦である(図版24・52)。

#### 種字文軒瓦(72・73、128)

72 種字文の軒丸瓦。(73)も同様の破片(挿図32、図版18・46)。

128 種字文の軒平瓦(挿図32、図版23・51)。

瓦当文に、仏像・仏塔・仏具・種字などを用いるのは平安後期に始まる。播磨産の(73・128)はセットになり、平安後期に近い頃のものであろう。(72・73)の梵字は「■」(キリーク)、(128)の梵字は「■」(ベイ)で、近世の再建期の瓦当にも模倣する。ただし、円堂院内には梵字に表現される堂字はみあたらない(挿図32、図版18・23・46・51)。

#### その他の軒瓦(74～78)

74 当時の建久年間の再興にあたって案出された図案<sup>註24</sup>である(図版18)。

75 中世の三巴文の軒丸瓦である(図版18・46)。

76 近世の仁和寺再建期の三巴文の軒丸瓦である(図版18・46)。

77 「仁和寺」字銘のある軒丸瓦。再建期の瓦である(図版18・46)。

78 (77)と同様「仁和寺」字銘のある軒丸瓦。近代の瓦である。(図版18)。

#### 鬼瓦(136)

136 鬼瓦。右下部と鼻の一部、牙などを欠損するがほぼ全形を復元できる。眉は大きくつり上がり、目は半円形で二段に造る。調整は全体をなで、一部に離れ砂の痕がある。全体の約3分の1が残り、復元すると縦24cm、横23.0cm、厚さ5.0cm前後になる(図版24・52)。

#### 註

- 1 石田茂作『古瓦図鑑』大塚巧芸社 1930年 仁和寺境内出土の瓦がまとめて報告されている。図版には62-203、63-204、78-245、90-282、102-322、165-624、183-715、205-872、219-948の9点が掲載される。図版167-635は出土地不明とされているが、この瓦は円堂院で多量に出土する平安時代中期の軒平瓦である。なお、47ページの古瓦発見地名索引の仁和寺の項の瓦番号は広隆寺の瓦で、一行右の円宗寺の瓦が仁

和寺の瓦である。なお、949 は 948 にしないと対応しない。

- 2 緑釉瓦は全体で 334 kg 出土しているが SK25、SD30 から出土した緑釉瓦に限った検討では、縄叩き緑釉丸瓦 24%、斜格子タタキ緑釉丸瓦 15%、無文緑釉丸瓦 42%、平安前期緑釉丸瓦 12%、不明緑釉丸瓦 7%であった。SK25、SD30 から出土した緑釉丸瓦の縄タタキと斜格子タタキの比率は (61:38) で前者が多い。
- 3 『平安京古瓦図録』平安博物館編 雄山閣出版株式会社 1977 年
- 4 栗栖野瓦屋 京都市左京区岩倉幡枝町(以下、関係する瓦屋のうち中心的な文献をあげる)
  - a 木村捷三郎「山城幡枝発見の瓦窯址 - 延喜式に見えたる栗栖野瓦屋 -」『史林』15 巻 4 号 1930 年
  - b 「栗栖野瓦窯址調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』15 京都府 1935 年
  - c 乗安和二三「平安時代後期の瓦に関する覚書 - 栗栖野瓦窯出土の軒丸瓦を巡って -」『日本古代学論集』財団法人 古代学協会 1979 年
  - d 『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和 60 年度 京都市文化観光局 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1986 年
- 5 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和 61 年度 京都市文化観光局 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
- 6 池田瓦窯 京都市東山区今熊野池田町
  - a 広瀬都巽「山城国紀伊郡柳原庄発掘の古瓦」『考古学雑誌』1 巻 8 号 聚精堂 1911 年
  - b 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会 1984 年
- 7 内裏跡に推定される京都市上京区出水通智恵光院西入田村備前町 236-10 で、1989 年 11 月立会調査を行い、土壌から 10 世紀の遺物と共に出土した。
- 8 小野瓦屋 京都市左京区上高野小野町
  - a 「修学院村平安宮所用瓦窯址」『京都府史蹟勝地調査会報告』3 京都府 1922 年
  - b 坂東善平「小野瓦窯跡出土の瓦について」『古代文化』10 巻 5 号 古代学協会 1963 年
- 9 河上瓦屋 京都市北区西賀茂丸川町  
木村捷三郎「京洛北『河上瓦屋』址発見の宇瓦について」『古代文化』27 巻 10 号 古代学協会 1975 年
- 10 「瓦」『板東善平収蔵品目録』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1980 年
- 11 京都市北区大宮釈迦谷から出土した。  
安田茂登「京多大宮釈迦谷出土の古瓦」『史迹と美術』46 号 1934 年

- 12 森ヶ東瓦窯 京都市右京区太秦森ヶ東町  
 a 「森ヶ東瓦屋跡立会調査」『京都市埋蔵文化財研究所概報集』1978- I 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年  
 b 「森ヶ東瓦窯跡 (UZ18)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1987年  
 c 「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和60年度 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 13 註12-c
- 14 「広隆寺礎石及び古瓦」『京都府史蹟勝地調査会報告』1 京都府 1919年
- 15 大宮北山ノ前瓦屋 京都市北区大宮北山ノ前町  
 「瓦」『板東善平収蔵品目録』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 16 『平安京土御門烏丸内裏跡-左京一條三坊九町-』平安京跡研究調査報告第10輯 財団法人 古代学協会 1983年
- 17 静岡県湖西市教育委員会の後藤健一氏から(図版16-57、22-115)と同文の瓦が、湖西市山口16号地点窯から出土しているとの教示を得た。
- 18 「鳥羽離宮跡出土瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報』1968 京都府教育委員会 1968年
- 19 a 安井良三「篠村A号瓦窯址」『亀岡市史』上巻 亀岡市 1960年  
 b 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号合併号 1978年
- 20 a 今里幾次「播磨国魚橋瓦窯址の研究」『兵庫史学』6 1955年  
 b 丹治康明「東播磨における瓦生産-神出・魚住窯を中心に-」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ 日本中世土器研究会 1987年
- 21 註19-b
- 22 a 安藤文良「歴史時代-古瓦-」『香川県史』13 考古 四国新聞社 1987年 P 508、P 118の軒丸瓦は(図版17-70)と同範である。この瓦は綾上町円蔵坊跡出土、同範が小坂池瓦窯から出土している。  
 b 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』8 1967年 380-1と(図版24-134)が同範。
- 23 柴垣勇夫「尾張における平安末期の瓦生産-その分布と史的背景-」『愛知県陶磁資料館研究紀要』1号 愛知県陶磁資料館 1982年
- 24 『財団法人真言宗京都学園洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』東寺境内発掘調査団洛南高校班 1981年

## 7 その他の遺物（挿図 33、図版 25・53、表 13）

金属製品には釘・銭貨などがあり、その他甌、礎石なども少量出土した。

### 金属製品

金属製品には、鉄・銅・鉛を素材にした製品がある。製品の種類は鉄釘が中心で、他に、近世の銅線・鉄銭が少量あり、銅製の煙管・筆軸部、鉛なども出土した。

1～15 鉄釘は総数 500 本出土した。遺構別では SD30 から 263 本、SK48 から 21 本、SK25 から 69 本、SK45 から 15 本など平安時代の各遺構からの出土が多いが、中世・近世の遺構からも出土した。釘の長さは約 4.5～10.2cm に復元でき、大半が 6cm 以下のものである。

頭部の形状は、頭を短く L 字状に折り曲げたもの（1・2）、両側面から叩き幅を広くしたもの（3～5）、四角形に整えたもの（6～11）などがある。長く太い（5）の頭部幅は 1.2cm あり、長さは 9.2cm ある。

16 刀子は東トレンチの SB26 の柱穴から出土した（図版 25・53）。残存長 8.4cm、幅 1.6cm と短く、先端と基部を失う。

17 一方が太く全体は三角形の断面を有する大型の鉄器で、U 字状に湾曲している。長さ 10.6cm、幅は基部 4.3cm、先端 3.1cm。機能・用途は不明（図版 25・53）。

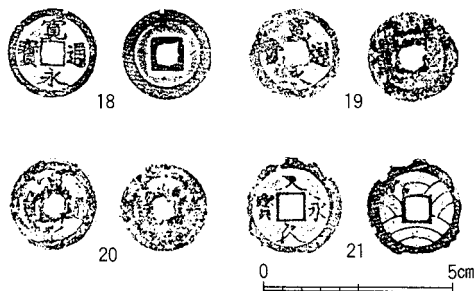
18 寛永通寶の銅銭。（19）は同じ銅銭、（20）は鉄銭（挿図 33、図版 53）。

21 文久永寶の銅銭（挿図 33、図版 53）。

### 甌

22 一辺 28cm、厚さ 7.5cm のほぼ完形の甌。上面と側面はヘラケズリ調整し、下面は磨滅し不明である。胎土は灰暗色、焼成は軟質である（図版 25・53）。

23 長さ 14.5cm、幅 7.4cm、厚さ 3.5～4.2cm の残片で、中央部がやや凹む。全体をヘラケズリで仕上げる。灰黒色でやや軟質である（図版 25）。



挿図 33 銭貨拓影（1:2）

### 石製品

石製品には、礎石、近世の硯などがある。

24 凝灰岩製で、一辺が 31cm の正方形、厚さは 16.5cm。上面に径 26～28cm の柱の外周の焼け焦げた痕跡がある。SK25 の底から出土した。他に 2 点破片がある（図版 25・53）。

## 第4章 結 語

### 1 円堂院東部の遺構の変遷

#### 仁和寺の略史

仁和寺は、宇多天皇が先帝、光孝天皇の供養のために仁和4年(888)8月17日に「於新造西山御願寺、先帝周忌御齋会<sup>註1</sup>」を創立したことに始まる。円堂院は遅れて昌泰3年(900)11月19日に「応置仁和寺円堂院分声明業年分度者一人事<sup>註2</sup>」とあり、延喜3年(903)にも「八角御堂、号円堂院、寛平御願<sup>註3</sup>」と記され、9世紀末から10世紀初頭に成立している。本寺には、金堂・講堂・薬師堂・五重塔・三面僧坊など伽藍が整っていたが、元永2年(1119)4月14日に寺の主要部を焼いたが、南方に位置していた南御室、円堂などは焼け残った<sup>註4</sup>。

その後、仁和寺は故地を離れ、北院・南院など双ヶ丘の周辺を移動する。応仁2年(1468)9月4日には、応仁の乱に伴う兵火で焼け、壊滅的な打撃を受けた。近世に入って、寛永11年(1634)に仁和寺第21世覚深法親王は幕府に再建を願い、正保3年(1646)10月に堂宇が整った<sup>註5</sup>。

#### 近世の仁和寺再建に伴う寺域の造成・整地作業

北トレンチのSD01から南部、東・南トレンチにかけて大規模な近世の整地層を検出した。整地層は大きく2層に分かれ、下層は炭・灰混じりの黒色土層と暗茶褐色砂泥層が5.0cmほどの厚さでブロック状をなし、上層は褐色土層ないし茶褐色土層が水平に堆積し整地面を整えていた。全体で0.5～1.1mの厚さがある。

整地層は南トレンチ南壁では水平堆積(挿図15、図版31-2)し、SD04北部の東トレンチ東壁(図版31-1)・西壁南部では北から南に傾斜していた。この差はSD04を境にした整地方法の違いに起因しており、SD04付近までは北部から順次傾斜にそって整地を行い、その先端部から南部にかけては、整地でできた斜面を埋めて水平面を形成している。いずれにしても、北部から低い南部に順次土を運びだし整地した状況がうかがえる。また、東トレンチ北部、北トレンチ南壁には赤褐色泥砂層が厚く堆積し、平安時代の瓦が多量に含まれており、西部の円堂付近の土層で整地したことが推定できる。

整地層は広範囲かつ大規模であることから寛永の再建に伴う造成・整地層と認定できる。仁和寺は旧地に寺を再建するにあたり寺域を確定し、四至を定め、樹木の伐採・焚火による雑木の処理をした後、造成工事に入り低い南部を埋め立てた状況が復元できる。南部を

整地で盛り上げた結果、周囲と隔絶した敷地が確保でき、現在の寺域南端は、寺域南部の府道金閣寺宇多野線と4～5mの比高差があり、その多くは近世の整地作業に伴うものであることが知られる。

### 遺構の時期区分

仁和寺は略史や整地層の存在から、第1期を仁和寺の創建から応仁の乱まで、第2期を寛永の再建から現代までの、大きく2時期に分けて考えることができる。

遺構の調査では、各トレンチとも近世の整地層を確認し、その上層と下層で大きく検出遺構が分かれた。したがって、歴史的な時期区分は遺構の区分にも妥当性がある。北トレンチでは1期のa～d期(5・4・3・2面)、2期(1面)の遺構を検出し、東・南トレンチでは1期のa期・2期に対応する遺構を検出した。

#### 第1期 創建から応仁の乱まで

1-a 平安中期

2-b 平安中期

3-c 平安後期

4-d 中世

#### 第2期 寛永の再建から現代まで

第1期は上記したように遺構の変遷から、さらに4小期に分けることができる。

1期-a段階は土塁(SA15)、僧房(SB26)、雨落溝(SD28・30)、溝(SD33・34)などがある。SD34は土塁を横断するために、土塁を石で護岸(SD31)し、土塁の頂部には崩壊を防ぐため石を敷き詰める。1-b期との違いは、南北溝SD33が土塁の北で東に折れ曲がり(SD34)、土塁と平行に流れていることである。

1期-b段階は建物など主要遺構は残るが、土塁の北で水が停滞するためか、土塁を突き抜いて溝(SD35)を造り、SD36を介してSD30に流し込んでいる。北トレンチの北部では土塁に平行する土塁状の遺構(SX50)を造る。

1期-c段階はSD33・35・30などの主要排水溝が埋没し機能しなくなり、僧坊建物も廃絶する。しかし、元々地形的に高かった土塁の北部では、土塁(SA15)の北に浅い溝(SD19)を掘り、この北には築地(SC20)を作る。

1期-d段階は築地(SC20)を埋めて整地し、土塁の残存部のわずかな高まりの北斜面に瓦・小石を敷き土塁の崩壊を防いでいる。

第2期は北と南で段差のある敷地の全面を整地し、全体を平坦にする。特に南部は平均

1.0m前後の盛土をする。遺構の密度は、北トレンチが高く、他のトレンチは低い<sup>註6</sup>。

#### 遺物からみた円堂院東部の変遷

調査で出土した遺物は、第3章で述べたように9世紀から近世までの長期間にわたるが、その大半は平安時代中期の、10世紀中葉から後半のものである。

しかし、わずかではあるが円堂院の創建を遡る遺物が出土した。土師器(106～108)、須恵器瓶子(109)、緑釉陶器碗(111)などで、須恵器瓶子は頸部を欠損しているが形態から、9世紀前半の遺物である。土師器や緑釉陶器碗は形態から9世紀後半の特徴を示す。須恵器瓶子は仁和寺創建以前の遺物、緑釉陶器碗は円堂院建立以前で、仁和寺の始まりを示す仁和4年(888)8月17日条の「於新造西山御願寺」の年代に重なる<sup>註7</sup>。

円堂院の創建期の10世紀前半の遺物は、須恵器鉢(66)、灰釉陶器鉢(47)などが少量ある。SD30が廃絶した11世紀前半以降の遺物は、瓦類は各種の瓦当など比較的に目立つのに対し、土器は極端に少ない。SK25からは平安中期から後期の瓦が多量に出土したが、後期の土器はわずかしかない。さらに、南・東トレンチからはほとんど出土しなかった。北トレンチからは中世の土器が少量出土しているが、鎌倉時代に収まるものが中心で、それ以降のものはほとんどない。瓦にもこのことはいえ、明確な室町時代の瓦はない。

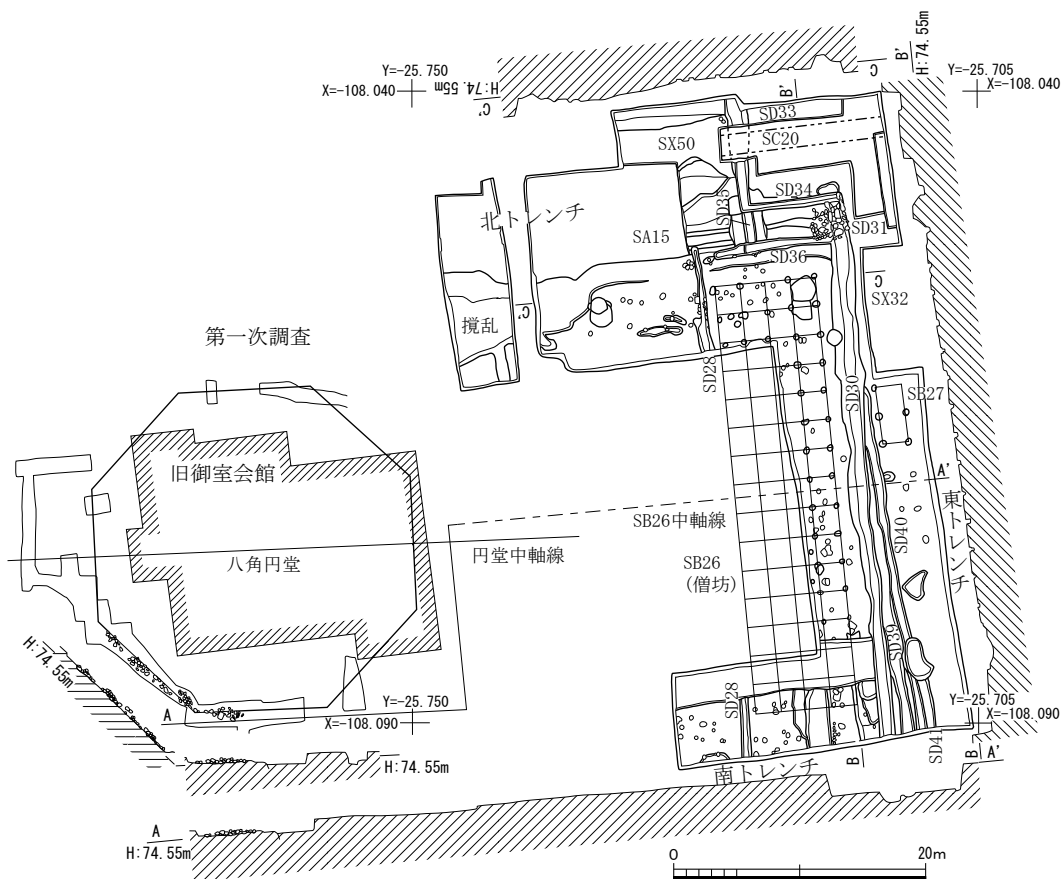
円堂院は『葉黄記』の暦仁元年(1238)6月23日の条に北院で出家した九条道家の子福王が髪を収めた記録があり、鎌倉時代まで存在を確認できるが、敷地東部の利用はSD30が廃絶した11世紀前半以降はあまりなされず、円堂だけが瓦の補修を加え、建物の命脈を保っていたと推定できる。さらに、円堂が滅びた後の、遺構・遺物は皆無に近いことから、この地はほとんど利用されなかった。これは、仁和寺の衰退と当地の立地が小規模な開析谷に位置し、土地条件が悪かったことにも起因する。

#### 円堂院の遺構配置

仁和寺は寛永の再建にあたり、旧地に復することを前提に古文書を捜求し、かつ旧寺域内に残る基壇など遺構の遺存にも注意し再建を進めたことが、「本要記」<sup>註9</sup>に記してある。

寺域内では今回の調査を含め、これまで3回の発掘調査と1回の立会調査を実施している。円堂院に関連する調査では、1962年に実施された第1次調査と今次の調査があり、1次調査では八角円堂の南辺・西辺基壇を検出し、今次の調査では僧坊跡を検出した。円堂院には円堂・中門・西門・経蔵・護摩堂・僧坊・円堂鎮守などの存在が知られ、このうち調査で八角円堂と僧坊の位置が解明された。

円堂院僧坊(SB26)は梁間4間、桁行15間の南北棟建物で、桁行2.26m、梁間1.98mに



挿図34 円堂院内主要遺構配置図(1:600)

復元でき、南北 33.9m、東西 7.92m の規模になる。建物の北端と南端の柱穴では約 1.2m の比高差があり、南が低い。建物には東・西の雨落溝 (SD30・28) が付属し、方位は 5 度 37 分西に傾いている。

円堂は昭和 32 年 (1962) の発掘調査で、南辺・西辺基壇が検出され、出土した隅束石が 135 度であり、裏込石の散乱から、一辺が 10.6m の八角円堂に復元された。

僧坊と八角円堂の距離は建物の心々間で 45m、15 丈になる。円堂の中軸線を東に延長し僧坊との位置関係を見ると、僧坊の北から 8 間目のほぼ中央を円堂の中軸線が走り、この延長上には SD30 の東肩に一列石を並べた遺構 (SX38) があり、溝に架かる橋などの構造物の一部と推定できる。この円堂からのびる中軸線が通る僧坊柱間を僧坊の中央間とすれば、北に 7 間あり、折り返すと合計 15 間の僧坊になる。仮にこの中軸線で検出遺構の距離を測れば土塁 (SA15) までは 21m、SX50 までは 28m、中世の築地 (SC20) までは SX50 までと



同様の28mを測る。

「本要記」の記載によると円堂院の規模は東西50間、南北30間とあり、1間を6尺5寸で計算すると1間は約1.97mになり、円堂の中軸から北築地までは29.5mになり、僧坊の中軸から築地までの距離とほぼ合う。同じく円堂の中軸線を円堂院の中軸線とすると東築地はSD30の東肩付近にくる。円堂の方位は僧坊に比べ振れはわずかである。

## 2 円堂院僧坊出土の土器・陶磁器

### 遺構出土土器の年代観

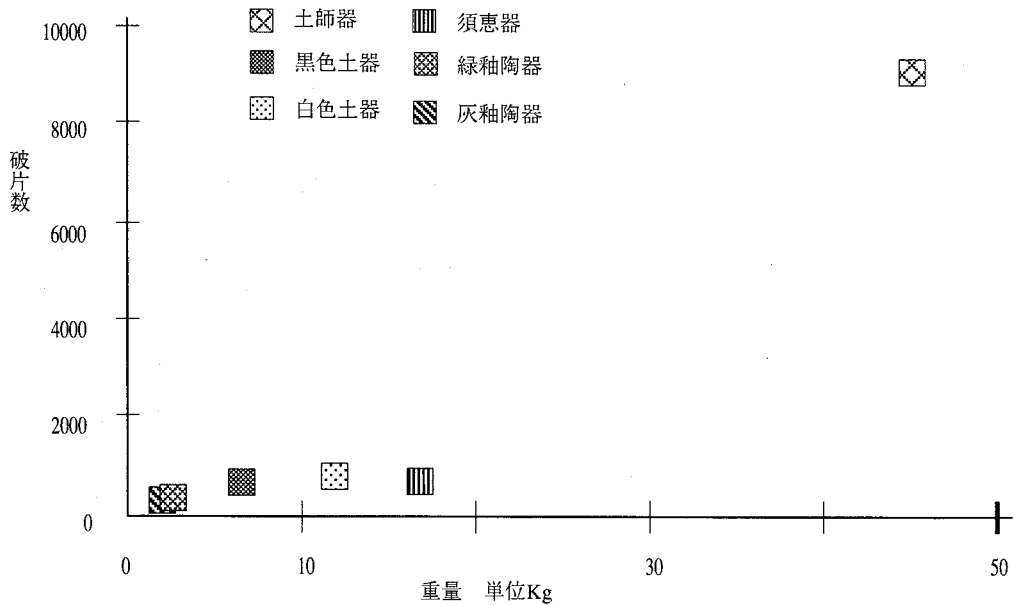
遺構・包含層出土遺物を年代の古い順に並べると、9世紀後半の遺物群には北トレンチの淡黄灰色泥砂層（挿図9-19）、10世紀前半の遺物にはSD34から出土した遺物がある。SD30出土遺物は量的に多く、前記したように様々な器種・器形があり、時代的にも10世紀中葉から11世紀初頭までの遺物を含むが、その中心は10世紀後半の遺物である。SD33、SK47などの遺物群もSD30と同様の10世紀後半の遺物が中心である。僧坊建物（SB26）の西雨落溝（SD28）から出土した遺物は、SD30出土遺物の終末期に近い10世紀末の特徴がある。SK25、SD19の焼土層から出土した遺物は、調査地内で数少ない平安時代後期、鎌倉時代の遺物である。

### SD30出土土器の器種構成

僧坊（SB26）の東雨落溝と仁和寺北東部の主要排水溝を兼ねたSD30からは、土師器、黒色土器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、輸入陶磁器など各種の土器が出土した。

SD30出土土器の破片数と重量の関係（挿図35）は、重量別では土師器、須恵器、白色土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁の順に多く、破片数では土師器、白色土器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁、白磁の順になる。土師器は破片数で78%と多数を占め、重量比でも53%と半数を占める。緑釉と灰釉の重量比は、緑釉陶器がやや多いがほぼ同数である。須恵器は破片数では5.6%と少ないが、重量比では鉢と甕などの重い破片が多いため19%を占める。この中で注目されることは、白色土器の比率が重量比で14%、破片比で6.4%と高いことで、国産の施釉陶器に比べ数倍の出土比率になる。

供膳形態の器種は土師器を中心に、白色土器がこれに続き、緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器などがほぼ同率で、少量の青磁・白磁がある。ただ、須恵器は杯・椀・皿などの器形がなく、供膳形態の世界から撤退し、そのかわりを白色土器・緑釉陶器・灰釉陶器が担っ



挿図 35 SD30 出土土器の器種構成

ている。白色土器は高台のある椀・皿が多数で一部高杯がある。皿の形は施釉陶器と異なり、底部からはほぼ水平に体部がのび、容器としての機能より、椀の台としての機能が勝り、下皿と椀がセットで機能する構成をもつ。高台のある椀・皿が一体で機能する構成は、高級な緑釉陶器・灰釉陶器と同様の構成であるが、白色土器を多量に出土する遺跡は普遍的でない<sup>註10</sup>ので、若干異なった使用状況を復元できる可能性がある。また、青磁・白磁の出土が43点と比較的多く、壺の蓋・合子<sup>註11</sup>など特徴的な遺物も出ている。

煮沸形態では、土師器甕が中心で、少量の羽釜がこれに加わる。貯蔵形態では須恵器甕が主体となるが、体部破片が多く全形を復元できないなど使用の状況に疑問が残る。他に黒色土器の鉢・脚が付く壺・把手の付く鍋状の鉢など、比較的多様な遺物がまとまって出土した。

以上のことから円堂院の僧坊内では、土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器に加えて白色土器を多用する供膳形態の構成が復元でき、器種構成上の特徴である。

#### 須恵器、緑釉陶器の生産地について

須恵器には蓋・杯・椀・鉢・壺・甕などの器形があるが、出土量の大半を鉢が占め、供膳形態の蓋・杯・椀は数が少ない。周辺地域において10世紀代に操業していた窯は京都府亀岡市篠古窯跡群(丹波国)であるが、ここからは鉢の大半が供給され、他の生産地の鉢は(85)以外にはない。産地不明の中では外面に凸帯と鱗の付く壺(146)が注意され

る。この壺は播磨や中国地方の須恵器窯で出土しており、遠隔地から供給されている。甕は10世紀代の篠古窯跡群では生産しておらず、他の生産地からの供給を考える必要があるが、現在その産地を特定できない。

須恵器・陶器には生産地が判明する資料が少しある。須恵器のうち、(27～30・66・86)は亀岡市篠古窯跡群から供給された椀・鉢で、(85・87・88・94)は他地域から供給されている。平安時代の緑釉陶器の生産窯は現在、京都市近郊<sup>註13</sup>、愛知県、岐阜県を中心とする東海地方<sup>註14</sup>、滋賀県<sup>註15</sup>、山口県の4地域に大きく分けて考えることができる。これらの地域はそれぞれ特徴的な器形・技法・胎土があり、これらの要素を組み合わせるとかなりの確率で産地を確定することができる。出土遺物を分類すると、京都市近郊(32・33・35～37・41・63・64・81・82・111)、東海地方(31・34・83)、滋賀県(38・77)、山口県(98)になり、多数を近隣の京都市近郊生産窯が占めることがわかる。なかでも、(41)は胎土・体部外面をロクロ篋削りの後にヘラミガキする特徴から、小塩1号窯<sup>註17</sup>の製品である。

#### 僧坊出土の硯・墨書土器について

僧坊の存在を示すと思われる遺物に硯<sup>註18</sup>・墨書土器がある。平安時代の硯は43点出土したが、平安時代前期の遺構で多く出土する円面硯が皆無で、風字硯は少量あるが、その大半は転用硯が占める。転用硯は、形態から四タイプに分類できる。Aは楕円形をしたもの(133・134・139・141・144)。Bは円形のもの(138・142)。Cは菱形のもの(136・145・146)。Dは不明(135・137・140・143)。この中でA・Cタイプに法量の大きいものがあり、Bタイプは小さい。

転用硯は須恵器甕・壺など大型の器形の体部を、長径10.0cmほどの楕円形に打ち欠き、側面を削り形に整えているが、丁寧に削り調整したものは少なく、割り面の部分が多く総じて粗い仕上げのものが多い。なかでも須恵器甕の転用硯が多いのが目立ち、ちなみに須恵器甕の破片に占める転用硯の比率は20%で、硯全体に占める甕・壺などの転用硯の比率が85%と極めて高いことが注目される。なお、転用硯を台に固定した痕跡はなく、墨痕から判断すると黒墨が中心で、朱墨はわずかであった。

墨書土器の中には「南御房」、「仁和寺」と記されたものがある。「南御房」は、円堂院にあった僧坊のことで、遺構と遺物の両方から直接僧坊と関係することを示している。

10世紀における須恵器生産の衰退・崩壊の中で、須恵器の硯が供給されず甕の転用硯で不足を補ったと推定できるが、これらの硯や墨書土器は院内の僧坊という特殊な現象を現している。



挿図 36 灰釉陶器鉢の陰刻文様（部分）(1:300)

#### 灰釉陶器鉢の陰刻文様について

梵字を陰刻した灰釉陶器の鉢（挿図 17・36、図版 5-47）は、口径 25.4cm、器高 10.9cm で、底部から内湾しながら立ち上がり、端部が直立する類例の少ない器形である。底部内面に輪宝、側面を 5 分割し、その位置に蓮台の上に梵字種字を一字刻し、それに火焰を附した三昧耶形の一宇を据え、その間を花文（陰刻）で埋める。種字は画が崩され、明確でないが「■」（バン）、「■」（キリーク）と読める。この 2 次を含む 5 字の種字は、「胎蔵諸尊種字復金界」（東寺蔵）にみられる 註 19。ちなみに『本要記』には円堂院内に金剛界三昧耶金銅曼陀羅を安置してあったことを『古記』を引いて説明している。

### 3 円堂院東部出土の瓦について

#### 円堂院の緑釉瓦

仁和寺の旧円堂院跡付近から緑釉瓦<sup>註20</sup>が出土することは以前から良く知られていた。かつて、円堂院跡に旧御室会館が建設された際、その南西に捨てられた余土の中から数十片の緑釉瓦を採集した。寛永時本寺再興の頭証僧正の『本要記』にも「円堂院、葺以瑠璃之瓦云々、今猶散落在之」と記している。瑠璃之瓦は緑釉瓦の古称である。

平安京における緑釉瓦使用の例は、宮内では大極・豊楽の二殿、京内では東西両寺の講堂に限られる。大極殿は八省院（朝堂院）の正殿で、国家の大義が行われた宮内最大の殿舎で、大殿とも呼ばれる。豊楽殿は豊楽院の正殿で大極殿に次ぐ重要殿舎であり、大嘗会・節会・賜宴・射禮、その他の節会が行われた。

東寺講堂は弘法大師が本寺拝領の後、天長～承和年間の頃に建てられたもの、真言宗の

重要伽藍である。西寺講堂も同じ経営になる。以上のように緑釉瓦はそれぞれ最重要の建築物に限って用いられている。

仁和寺円堂は、延喜3年(903)3月はじめて御齋会が行われ、翌閏3月、堂内に金剛界三七尊ならびに外院天の三昧耶が安置され、堂内を大日如来の世界に准えられたのである。<sup>註21</sup>また『本要記』には或記を引いて、堂内上障子にはその内外に龍猛・龍智・弘法など十六師、下壁には達磨大師以下、鑑真和尚の八祖像が描かれていたと記している。堂の外壁は純白、木部は朱塗、屋蓋は瑠璃の瓦で葺かれており、内部の造設と相俟って、寺内の偉観であった。

円堂は宇多法皇の修法堂場として建立されたものである。葺瓦に緑釉品を用いたのは由ありというべきであろう。今回の発掘によって多数の緑釉瓦が発見されたが、軒先瓦をはじめ丸瓦・熨斗瓦・鬼瓦があり、これによってはじめて緑釉瓦の葺用が明らかになった。

### 緑釉瓦の造瓦所

円堂院に關係する緑釉造瓦所は以下の5箇所が知られる。

#### 1 栗栖野瓦屋

造宮職の西賀茂瓦屋に次いで設立された木工寮所属の造瓦所である。平安時代前期から末期まで稼働した。

#### 2 小野瓦屋

栗栖野瓦屋から分かれたもの。延喜式木工寮式に「凡自小野栗栖野両瓦屋至宮中車一両賃■文」<sup>註22</sup>とあり、木工寮官下に属していたことがわかる。主として平安中期に活動する。

#### 3 『左』字銘瓦屋

文様面に「左」字を刻したものがあり、現在、軒丸3種、軒平2種、平瓦一種が確認されている。「左」を頭字とする瓦屋の存在が想定される。

#### 4 池田瓦屋

昭和59年(1984)に大谷高校の構内で3基の平窯が発掘された。「左」字銘瓦と同文の「右」字銘唐草文軒平瓦が出土しており、他に「修」字の押印のある平瓦も発見されている。

#### 5 河上瓦屋

「左」・池田瓦屋と共に寛平2年(890)に設置された修理職所属の造瓦所である。

以上の瓦屋はいずれも円堂の緑釉瓦を焼成しており、互いに密接な関連がある。修理職瓦屋にはなお森ヶ東瓦屋があり、緑釉瓦を焼成しているが、やや時代の下がるもので、円堂のそれとは関係がない。また、大宮北山ノ前瓦屋は平安後期に近い頃のもので、森ヶ東

瓦屋と同範瓦も出土しておりその支窯とも考えられる。

### 倍厚の無釉瓦

無釉瓦のうちには、創建当初の緑釉瓦と同範品(6・83)、(11・88)も若干含まれている。上記官窯のほか、森ヶ東瓦屋産のものがいくつかみられるが、官窯中、本寺と至近の距離にあることによるものだろうか。

軒平瓦(79)は技法ならびに文様から平安時代中期前半の作と思われる。(79a)の瓦範は通常のサイズを用いながら、周縁のみを倍厚で、外形は異常に広がっている。文様は対称的でよく整い描線も美しいが、中央の文様構成は他に例が少ない。この軒瓦は今回43点(内3点は通常周縁)出土し、他の瓦に比して特に多い(表3・7)。他には内裏・蘭林坊跡の7点が知られるのみである。円堂院の第1次調査で円堂の基壇周辺から出土した無釉瓦のうちでもこの類が多い。私も昔、表採で円堂跡西辺で通常周縁を1点発見している。以上の事実から考えて、一応円堂に関係する瓦と推測されるが、これら特に頭部のみが肥大した瓦が、軒先に葺かれていたとは考え難い。ちなみにこれに対応する軒丸瓦(22)は通常サイズのものである。

### 地方国産の瓦

平安後期の瓦は栗栖野瓦屋製品が特に多い。地方産の瓦には大和・播磨・讃岐・東海などのものがあるが、絶対数はさほど多くない。京都近傍産瓦と国産瓦との関係は六勝寺や鳥羽離宮跡とは反対である。

仁和寺と大和産瓦については、大治元年(1126)11月19日の「東大寺三綱申文」<sup>註23</sup>に、「近者依仁和寺焼失、忽造営之間、偏於南都交易瓦、併以件住人所令運上仁和寺也」の記事がある。近者云々とは、元永2年(1119)4月13日の仁和寺大火を指すもので、『長秋記』4月14日の記事によると、「去夜子時、自北僧房火出来、仁和寺金堂、食堂、新堂、三面廻廊、三面僧房、宝倉一字、鐘樓、中薬師堂、<sup>二条院</sup>建立、<sup>遣立</sup>観音三昧堂、灌頂堂、不動堂皆悉焼、所殘、四面門、南御室、円堂、惣社、大湯屋、藏等也」と記されている<sup>註24</sup>。所掲の大和産の瓦(69・129～132)が交易瓦にあたるかどうかは明らかでない。

今回出土瓦の大半に罹災の跡を認めがたいことなどからも、この記事は裏付けられるが、(72・73、128)の種字(梵字)銘軒瓦は、前者の軒平瓦は阿弥陀如来を本尊とする仁和寺金堂の軒に、後者の軒平瓦は薬師堂に葺かれていたことが『本要記』に明記してある。薬師堂は、「号中薬師堂 二条院御建立」と註している。二条天皇在位は、保元3年～永万元年(1158～1165)の約7年間である。

したがって、これら種字文瓦の出土から、今回の出土瓦の中には円堂院境内以外のものも含まれていることが知られ、瓦は円堂院のみならず仁和寺の堂舎造修史の一面を物語ることとなろう。

#### 4 円堂院付属の建物、特に僧坊について

現仁和寺境内が、ほぼ仁和寺創建の地と推定されることに誤りがないことは、円堂院跡を発掘したことから認められた。この円堂院の地と『本寺堂院記』（『仁和寺史料』所収）が円堂院の項で引く『仁海僧正記』に、「仁和寺内巽方、寛平法皇御念誦堂、八角堂内金剛界三昧耶金剛曼陀羅安置也。坤方有御房云々」

とあることから、今の寺内南方部と合い、この円堂の西方に御坊（本字御所）のあることを示す。仁海僧正は永承元年（1046）、93歳でなくなった人<sup>註25</sup>で、この記は真実を語るものとして創立時の仁和寺の境域が今のそれに合うことを示す。

円堂院は八角円堂を主体にして、付属の堂舎に僧坊・経蔵・護摩堂・中門が具わっていた。まず経蔵については、元永2年（1119）4月14日、仁和寺が火災時には円堂院は焼亡していないので持ち出した宝物類はこの経蔵の中に納めていたし、仁平元年（1151）閏4月4日に再興された宝蔵の修理にあたり、円堂経蔵に移されていた記録がある。この経蔵の跡は今次の調査では出ていない。また護摩堂・中門と認められるものはない。

ところで、僧坊については『本寺堂院記』の円堂の項に裏書として、「円堂院内在僧坊云々、見古記」とあり、円堂僧坊のことは『本要記』に「広澤僧正御灌頂記云、阿闍梨房、円堂院南第一房也云々」とある。広澤僧正は寛朝で敦実親王の息になり、天曆2年（948）師寛空より職位を受けている。その師（阿闍梨）寛空は天禄2年（971）に東寺長者・法務・円堂三僧などを辞退している記録『仁和寺相承秘記』があるので、仁和寺では円堂の僧坊にいたことがわかるし、その坊が円堂院南第一坊であることは広澤僧正の『灌頂記』が指し示す。この寛空は宇多法皇第5子敦実親王の息といい、灌頂を法皇から受けていることも記録されている。円堂院僧坊にいたことはよく諒解できる。このように円堂院僧坊が位置（南）と番号（第一坊）で呼ばれることは南都諸寺の三面僧坊について行われていたものである。たとえば東大寺戒壇院僧坊については「北の一室～五室」・「東の一室～三室」があり、西も一～三室の呼び名がある。これら僧坊の単位は、二間四方の主室に左右に一室宛を添え、さらに時には前、あるいは後ろに庇を構えるものがあるが、連続した長い建物である。なお寺によって規模の大小はある。

このたびの調査ではSB26としたのが、円堂の東方にあたり、南北の棟の長い建物ができている。これは以上示した南都諸寺院の僧坊により復元は可能となって、その南端の単位が南第一坊と推定できる。遺物の墨書土器「南御房」（挿図 23-153）とあるものをこのあたりで採取しているのは、以上のことを確かめる資料になる。

この円堂院僧坊跡の実測図（挿図 34）を、先にみた円堂の基壇のうち、南辺・西南辺・西辺と調査した図に合わせると、後者の中心を通る東西中軸線と、僧坊の南北の中心線とは、真南北の方位に対し違った角度を示す。すなわち統一した東西線でないことがわかった。このように円堂と僧坊が同じ軸線でないことは、その二つの建物は同時に作られていないことを示すのではない<sup>註26</sup>か。

今次発掘した僧坊は、使用した僧侶が円堂院草創に近い人で、また僧坊の形式が奈良時代の僧坊に通じた点が多いから、その跡は円堂院草創期のものである。とすれば、さきに出した円堂基壇は時期の遅れたものと推定しなければならないであろう。そのように考えると、その基壇を発掘していて、草創期のものであれば凝灰岩であるだろうに、その痕跡はなく、かえって基壇の隅束石とみたのは花崗岩であった。ゆえに発掘した花崗岩で基壇を作成されているなら創建のものでないことは明白で、普通に花崗岩で基壇を作っていた時期まで下げねばならない。元永 2 年（1119）には創建時のものは焼け残っているのに、それを示すような資料は、先年の調査では十分に発見していない。円堂の位置に今は旧御室会館があるから、その改築を待って、徹底した調査を行った後に改めて考えなければならない問題となる。

## 註

- 1 『日本紀略』第二（前篇下）仁和 4 年 8 月 17 日条 新訂増補国史大系 1979 年
- 2 『類聚三代格』前篇 P 102 新訂増補国史大系 1983 年
- 3 『仁和寺資料』寺史編二 『本要記』所引の『古徳記』所載 奈良国立文化財研究所史料 第 6 冊 1967 年
- 4 『長秋記』増補史料大成 16 卷 臨川書店 1965 年 P 127
- 5 『京都市の地名』日本歴史地名体系 27 平凡社 1979 年
- 6 近世の絵図によると、調査地点には真光院と書かれ、南門のみが描かれている。西は真乗院と記載され、南門・西門が描かれる。
- 7 註 1



- 8 『葉黄記』暦仁元年6月23日条 史料纂集(第三期) 続群書類従完成会 P 9～13
- 9 註3『本要記』には「円堂院、葺以瑠璃之瓦云々、今猶散落在之」、「私云、……、円堂院敷地、東西五十間、南北三十間、円堂之土台十間餘方形、従南築地十四間、従北築地六間、」などの記述がある。
- 10 内裏などから多量に出土するが、他の遺跡からは少ない。
- 11 小山富士夫「仁和寺出土の越州窯盒子と影青盒子」『支那青磁史稿』文中堂 1943年
- 12 水谷寿克・石井清司・波多野徹 他『篠窯跡群』1 京都府遺跡調査報告書第2冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984年  
水谷寿克・石井清司・引原茂治・岡崎研一・立花正寛 他『篠窯跡群』2 京都府遺跡調査報告書第11冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989年
- 13 百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器—平安京近郊の生産窯について—」『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会 1986年
- 14 斉藤孝正・植崎彰一 他『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告』1 1980年
- 15 日永伊久男『作谷窯跡』日野町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 滋賀県日野町教育委員会 1989年
- 16 長門の緑釉陶器については、水島稔夫(下関市教育委員会)・柴尾俊介・佐藤浩司(北九州市埋蔵文化財調査室)の各氏から教示を得ると共に、関連資料を実見させていただいた。
- 17 註13
- 18 吉田恵二・巽 淳一郎 他『考察-遺物-』「薬師寺発掘調査報告」奈良国立文化財研究所 学報45冊 奈良国立文化財研究所 1987年  
薬師寺西僧坊は天禄4年(973)に焼失した。調査で残りの良い一括の土器群が出土し、僧坊の土器組成が復元できる。硯は円面硯が1点出土しているが、転用硯の出土報告はない。
- 19 『梵字貴重資料集成』東京美術 1981年所収の東寺金剛藏『胎藏諸尊種字復金界』中の「金剛界諸尊種字」の冒頭「胎藏諸尊種字復金界」(東寺藏)P 48
- 20 木村捷三郎「仁和寺出土の緑釉瓦」『仏教芸術』115号 毎日新聞社 1977年  
この論考で仁和寺出土の緑釉瓦に触れ、挿図2の軒平瓦I・Jは2個体として報告したが、整理の結果接合した。また、22ページの窯の比定には誤記があり、Hの記述は誤り。緑釉(H)の解説中、「同範無釉の瓦が河上瓦屋跡から出土している」が正しい。

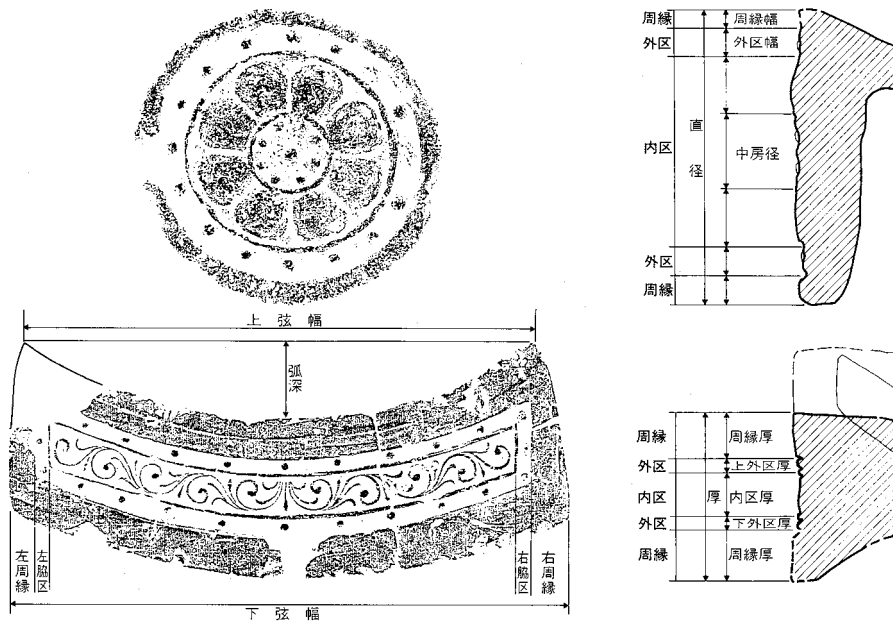
「D・I・Jを河上系」としたが1984年に池田瓦屋跡が発見され、その製品と判明した。

- 21 『扶桑略記』延喜4年3月26日条 新訂増補国史大系 P 174
- 22 『延喜式』後篇 新訂増補国史大系 P 794
- 23 『平安遺文』第5巻 東京堂出版 1963年
- 24 註4
- 25 『僧綱補任 第四』大日本仏教全書 興福寺叢書1 P 118 1914年
- 26 円堂院内主要遺構配置図(挿図34)は、円堂と僧坊が同じ軸線になることを示している。この差は建物の時期差ととらえたが、僧坊の規模復元においては、円堂と僧坊が同じ軸線であると仮定し、15間に復元した。

## 付 表

## 凡 例

- 1 表1の数字の単位はm、表2・4～7・13の数字の単位はcmである。
- 2 表4～7の法量のうち、同範のあるものは残りのよいもので削り、出土点数は合計してある。
- 3 表3の遺構・層名の「遺構確認 T」は遺構確認トレンチの略である。
- 4 表4・6の軒丸瓦の文様、単弁、複弁、珠文、圏線は、それぞれ、「T」、「F」、「珠」、「圏」と略記した。
- 5 表5・7の軒平瓦の文様、唐草文、種字文、半截花文、剣頭文、斜格子目文は、それぞれ、「唐草」、「種字」、「半花」、「剣頭」、「斜格」と略記した。
- 6 表8・11・12の軒瓦の接合方法は、軒丸瓦は一本造り、軒平瓦は折曲げ、半折曲げ、包込み式に分け、「一本造」、「折曲」、「半折」、「包込」とそれぞれ略記した。
- 7 表9・12の軒平瓦の顎は、段顎と曲線顎に分け、「段顎」、「曲線」と略記した。
- 8 表8・9・11・12の同範例は上段に遺跡名、下段に図版番号を記載した。なお、この欄が番号だけのものは『平安京古瓦図録』の瓦番号である。出典は表の最後にまとめた。
- 9 生産窯は上段に関係した文献による瓦屋、下段には生産窯を記載し、平安時代後期の瓦は生産国を入れた。
- 10 軒瓦の各部位の名称と法量の計測部は下記による。



軒瓦部位の名称と法量計測部位

表1 測量ポイントの成果表

ポイント	X座標	Y座標	ポイント	X座標	Y座標
P0	-108, 101. 088m	-25, 710. 229m	P4	-108, 091. 774m	-25, 769. 482m
P1	-108, 039. 665m	-25, 712. 796m	P5	-108, 092. 270m	-25, 731. 827m
P2	-108, 030. 925m	-25, 751. 711m	P α	-108, 023. 700m	-25, 692. 687m
P3	-118, 042. 709m	-25, 789. 646m	P β	-108, 053. 153m	-25, 659. 785m

表2 硯の観察表

番号	種類	口径 (天地)	器高 (左右)	硯面 (内面調整)	裏面 (外面調整)	色調 胎土	備考	出土 遺構	図版
43	灰釉陶器椀転用硯	11. 8	(2. 9)	ロクロナデ		灰色		SD30	5
44	灰釉陶器椀転用硯	11. 6	4. 1	ロクロナデ		灰色		SD30	5・32
73	灰釉陶器椀転用硯	16. 8	4. 9	ロクロナデ		灰色		SD33	7
132	須恵器猿面硯	8. 2	9. 5	同心円タタキ	平行タタキ	灰青色	側面丁寧に着る	SK47	8・35
133	須恵器甕転用硯	12	9. 5	青海波タタキ	平行タタキ	灰青色	使用痕目立つ	SD30	8・35
134	須恵器甕転用硯	11	4. 2	青海波タタキ	平行タタキ	暗青灰色		SK47	8・35
135	須恵器甕転用硯	10. 5	8. 5	同心円タタキ	正格子タタキ	灰青色	側面丁寧に着る	SK47	8
136	須恵器甕転用硯	12	10. 6	ハケメ	平行タタキ	暗灰色	中心部に使用痕	SD30	8・35
137	須恵器甕転用硯	8. 1	5. 5	青海波タタキ	正格子タタキ	青灰色	側面丁寧に着る	SK47	8・35
138	須恵器壺転用硯	13. 3	10. 4	青海波タタキ	平行タタキ	青灰色		SD34	8・35
139	須恵器甕転用硯	10. 7	5. 6	平行タタキ	正格子タタキ	灰青色		SD30	8
140	須恵器甕転用硯	9	5. 5	ハケメ	平行タタキ	灰青色		SD30	8
141	須恵器甕転用硯	12. 5	8. 6	平行タタキ	格子タタキ	灰色		遺構確認トレンチ	8・35
142	須恵器甕転用硯	8	6	ハケメ	平行タタキ	暗青灰色		SD30	8・35
143	須恵器壺転用硯	8. 1	8	ナデ	格子タタキ、ナデ	暗青灰色	使用痕目立つ	SD30	8
144	須恵器甕転用硯	17. 5	7	青海波タタキ	格子タタキ	灰青色		SD30	8・35
145	須恵器甕転用硯	19. 5	11. 7	同心円タタキ	平行タタキ	青灰色	中心部に使用痕	SD30	8
146	須恵器壺転用硯	11. 2	8. 7	ロクロナデ	ロクロナデ	灰青色		SD30	8・35
147	須恵器風字硯	5. 4	5. 6	ナデ	ヘラケズリ	灰青色		北トレンチ包含層	8
148	須恵器風字硯	4. 4	4. 8	ナデ	ヘラケズリ	灰青色		SD30	8
149	黒色土器風字硯	4. 1	5. 4	ナデ	ナデ	灰黒色		SD30	8
150	黒色土器風字硯	7	4. 5	ナデ	ヘラケズリ	灰黒色		SD30	8
151	黒色土器転用硯	5. 8	9. 5	ナデ	不明	灰黒色		SD39	8

表3 遺構別軒瓦の出土数

検出面		遺構・層名																									合計		
		1							2		3					4					5					各トレンチ			
種類	瓦番号	S D 02	S D 03	S D 04	S G 05	S E 08	S K 09	S X 14	S X 16	S X 18	S D 19	S C 20	S K 24	S K 25	S D 30	S D 31 西肩	S D 33	S D 39	S K 46	S K 47	S K 48	S D 34	遺構確認T	包含層	近世整地層	攪乱層	不明	表採	
		緑軸軒丸	1													2	3								2	4	1		2
2																								1				1	
3																								1				1	
4														4										2			1	7	
不明														3	3													6	
小計														9	6									2	8	1		3	29
緑軸軒平	5						1							3	3						1			1	1		1	11	
	6																	1						1				2	
	7													1														1	
	8													1														1	
	9													1														1	
	10														1													1	
	11														2													2	
不明																											0		
小計							1						8	4			1		1					2	1	1	19		
合計							1						17	10			1		1				2	10	2		4	48	
無軸軒丸	22								2					3	4	1			1		1		1	1	4		2	20	
	23				1		2	2						3										2	1			11	
	24			1			1	2						3										3	4			14	
	25																								1			1	
	26								1						2	1	1							2		1	1	9	
	27								1					1	1					1		1		1	1			7	
	28																									1		1	
	29																							1				1	
	30													1										1				2	
	31														1								1	1			1	4	
	32																			1					1			2	
	33																1											1	
	34																					1						1	
	35														1													1	
	36													1												2	1	4	
	37			2							1											1			1	1	1	7	
	38																						1		1			2	
	39																										1	1	
	40																									1		1	
	41				1										3									1	1	2	1	9	
	42																											1	1
	43																							1				1	
	44																									1		1	
	45																								1			1	2
	46								1															1		1			3
47											1																	1	
48																							1	1		1		3	
49				1										1														2	
50			1											1														2	

(つづく)



表 3

検出面		遺 構 ・ 層 名																								合 計				
		1							2	3					4					5	各トレンチ									
種 類	瓦 番 号	S D 02	S D 03	S D 04	S G 05	S E 08	S K 09	S X 14	S X 16	S X 18	S D 19	S C 20	S K 24	S K 25	S D 30	S D 31 西肩	S D 33	S D 39	S K 46	S K 47	S K 48	S D 34	遺 構 確 認 T	包 含 層	近 世 整 地 層	攪 乱 層	不 明	表 採		
		無	94							1																				1
95																									1			1		
96																								1				1		
97																								1				1		
98																										1		1		
99							1								2	1											1	5		
100											1												6	2			1	10		
101															5													5		
102																										1		1		
103				1																								1		
104																										1		1		
105																											1	1		
106				1																						1		2		
107																										1		1		
108																	1											1		
109														1											1		2			
110																								1			1			
軸	111							1																			1	2		
	112																									1		1		
	113													1														1		
	114																								1			1		
	115																								1	2	1	4		
	116	1						1			1														1	3	2	9		
	117																									1		1		
	118																									1		1		
	119																							1				1		
	軒	120									1																		1	
121									1							1								1	1			4		
122			1																								1	2		
123																												1		
124														1														1		
125				1																								1		
126				1																								1		
127				1																							1	2		
128		1	1						1						1										1		1	6		
129																									1	1	1	3		
平	130																								2	1	3			
	131																								2		2			
	132																								1		1			
	133																								1		1			
	134																									1	1			
	135														1												1			
	不明			3					7						5	1					1	1			3	3	1	5	2	32
	合計	2	2	11				1	1	24	3	4	1	1	48	11	4			7	1	1		8	21	37	6	27	3	223
	無軸瓦計	4	6	17	2	1	6	5	48	5	9	1	2	77	23	8	1			10	1	6	2	17	42	74	15	43	6	431
	軒瓦総計	4	6	17	2	1	7	5	48	5	9	1	2	94	33	8	1	1		10	2	6	2	19	52	76	15	47	6	479



表 4 緑釉軒丸瓦法量表

番号	種 類	直 径	内 区					外 区		周 縁		出 土 点 数
			弁 数	中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	幅	文 様	幅	高	
1a	緑釉軒丸瓦	15.2	T10	3	1+5	11.1	1.5	0.9	珠16	1.1	0.4	14
2	緑釉軒丸瓦	19.3	T8	3.6	1+4	13.2	3.1	1.9	(珠16)	1.7	0.4	1
3	緑釉軒丸瓦	16.4	T9	3	1+6	10.5	1.6	1.5	(珠11)	1.7	0.4	1
4a	緑釉軒丸瓦	(16.4)	F4	3.7	4	(10.8)	4.2	1.2	(珠12)	1.8	0.5	7

表 5 緑釉軒平瓦法量表

番号	種 類	上弦 幅	下弦 幅	弦深	厚	内区		外区			周縁		脇区			出 土 点 数
						厚	文様	上外 区厚	下外 区厚	文様	上周 縁厚	下周 縁厚	内縁 幅	周縁 幅	文様	
5a	緑釉軒平瓦				(7.0)	3.5	唐草	1	0.8	(珠11)	1.2	1.5	1.1	1.4	珠2	11
6	緑釉軒平瓦				9.3	3.1	唐草	0.9	1.2	珠11	2.9	3.2			(珠1)	2
7	緑釉軒平瓦	27.4	(27.5)	3.5	6.3	2.5	唐草	0.6	0.7	珠10	2	1.9	1	1.1	珠1、圈	1
8	緑釉軒平瓦				(6.5)	2.7	唐草		0.6	(珠?)		1.3	0.6	1.8	珠1	1
9	緑釉軒平瓦				(5.8)	3	唐草	0.8	0.8	(珠?)		(1.9)			(珠?)	1
10	緑釉軒平瓦						唐草	1		(珠?)	(2.0)				(珠?)	1
11	緑釉軒平瓦				6.5	2.6	唐草	0.9	0.9	(珠7)	1.6	2.1	1	0.8	珠1	2

表 6 無釉軒丸瓦法量表

番号	種 類	直 径	内 区					外 区		周 縁		出 土 点 数
			弁 数	中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	幅	文 様	幅	高	
22	無釉軒丸瓦	14.6	T8	3.7	1+8	9.7	2.5	1.4	珠16	1.1	0.2	20
23	無釉軒丸瓦	15.6	(T12)	4.8	1+4	11	1.3	0.5		1.7	0.8	11
24	無釉軒丸瓦		(F12)	4.8	1+4	(10.8)	1.6	0.3		1.6	0.9	14
25	無釉軒丸瓦		(T16)	3.8	1+8	(10.0)	1.5			1.2	0.6	1
26	無釉軒丸瓦	16.2	T13	3.3	1+5	10.8	1.9	1.3	珠13	1.6	0.5	9
27	無釉軒丸瓦	16	F8	3.9	1+6	10.7	2.7	1.2	(珠20)	1.3	0.3	7
28	無釉軒丸瓦		(F?)				2.2	1.4	(珠?)	2	1.2	1
29	無釉軒丸瓦		(F?)				1.7	1.3	(珠?)	1	0.1	1
30	無釉軒丸瓦		(F8)		(1+6)			1.7	(珠16)	1.6	0.1	2
31	無釉軒丸瓦	17.5	F8	2.6	1+4	10.5	2.5	1.7	(珠)	1.8	0.1	4
32	無釉軒丸瓦		(F?)		(1+5)			2.1	(珠?)		0.1	2
33	無釉軒丸瓦		(F?)					1.3	(珠?)	1.2	0.2	1
34	無釉軒丸瓦	13.2	T12		1+4	10.3	2	1.6	(珠)			1
35	無釉軒丸瓦		T8		「下」			1.8				1
36	無釉軒丸瓦		T8	3.5		7	1.9	2.4	(珠?)			4

(つづく)

番号	種類	直径	内 区				外 区		周 縁		出土 点数	
			弁 数	中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	幅	文 様	幅		高
37	無釉軒丸瓦		(T8)				1.8	1.0	(珠?)	2.5		7
38	無釉軒丸瓦	14.6	T8			11.6	3.3	1.2	珠16		0.1	2
39	無釉軒丸瓦		F6				1.9	1.3		0.4	0.1	1
40	無釉軒丸瓦	12.8	T8	4.2	1+4+8	8.8	1.8	0.9	(珠?)	2.5		1
41	無釉軒丸瓦	13.5	T8	4.5	1+5	8.8	1.8	0.4		1.7	0.8	9
42	無釉軒丸瓦	13.1	F6	3.3	1+4	6.7	1.3	1.2	珠11	2.0	1.1	1
43	無釉軒丸瓦	11.5	(T8?)			8.6	1.7	0.5		0.5	0.2	1
44	無釉軒丸瓦	12.0	(T8?)	2.3		7.3	1.2	0.6		1.9	0.4	1
45	無釉軒丸瓦	11.9	T6	2.8		7.7	2.5	0.7		1.3	0.2	2
46	無釉軒丸瓦	11.4	T18	2.8		7.7	1.0	0.7		1.3	0.1	3
47	無釉軒丸瓦		(F8?)				2.0	0.6		1.5	0.5	1
48	無釉軒丸瓦	12.4	T10			7.8	1.9	0.8	(珠8?)	1.8	0.3	3
49	無釉軒丸瓦					(9.9)				1.4		2
50	無釉軒丸瓦	11.6				8.7				1.3	0.8	2
51	無釉軒丸瓦	12.3				7.4		0.6		1.8	0.3	1
52	無釉軒丸瓦							1.2	(珠?)	2.0	1.0	1
53	無釉軒丸瓦							1.0	(珠?)	1.4	0.4	4
54	無釉軒丸瓦							1.3	(珠?)			2
55	無釉軒丸瓦	14.8				6.2		1.4	(珠?)	2.5	0.8	1
56	無釉軒丸瓦	(16.0)	T8	3.8	文字?	11.2	2.8	1.2	(珠12?)	0.8	0.2	3
57	無釉軒丸瓦	15.5	F8	4.4	1+4	9.2	2.8	1.6	珠16	1.0	0.8	11
58	無釉軒丸瓦		(T8?)		(?)			1.2	(珠?)	1.3	0.3	2
59	無釉軒丸瓦		(T8?)				3.2	1.2	(珠?)			1
60	無釉軒丸瓦		F8	2.8	「卍」	5.7	2.0	0.9	(珠12?)	1.8	0.8	2
61	無釉軒丸瓦	12.4	F6	4.6	1+4	9.5	2.4	0.2		1.3	0.6	1
62	無釉軒丸瓦	11.8	T8	3.9	1+4	8.7	1.5	0.4		1.1	0.5	1
63	無釉軒丸瓦	11.8				8.7		0.8		0.8	0.8	6
64	無釉軒丸瓦					9.4		1.2	(珠28?)	1.3		1
65	無釉軒丸瓦	11.8				7.9		0.7	(珠28?)	1.4	1.1	1
66	無釉軒丸瓦		F8		1+8		3.4	0.8		1.7	1.2	1
67	無釉軒丸瓦		(T12?)				2.5	1.5	(珠?)	0.7	0.4	1
68	無釉軒丸瓦		(T?)				2.2	0.7		2.3	1.9	1
69	無釉軒丸瓦	14.4	(T?)			7.5		1.8	(珠24?)	1.2	0.8	3
70	無釉軒丸瓦	13.3	T6	3.0	1	10.1	2.5	1.3	珠8	0.5	0.1	2
71	無釉軒丸瓦					8.8		1.4	珠20	1.6	1.2	1

(つづく)

番号	種 類	直 径	内 区				外 区		周 縁		出 土 数	
			弁 数	中 房 径	蓮 子 数	弁 区 径	弁 幅	幅	文 様	幅		高
72	無釉軒丸瓦	14.6				9.7		1.5	(珠30?)	1.1	0.6	2
73b	無釉軒丸瓦							0.2		1.2	1.1	7
74	無釉軒丸瓦		(F?)					1.7	(珠?)	1.1	1.1	1
75	無釉軒丸瓦	11.5				8.2				1.6	0.5	1
76	無釉軒丸瓦	14.8				6.5		1.8	珠13	2.2	0.9	4
77	無釉軒丸瓦	15.0				11.2				1.9	0.5	7
78	無釉軒丸瓦	14.0				10.1				1.7	0.6	1

表7 無釉軒平瓦法量表

番号	種 類	上弦幅	下弦幅	弦深	厚	内 区		外 区			周 縁		脇 区			出 土 数
						厚	文様	上外区厚	下外区厚	文 様	上周縁厚	下周縁厚	内縁幅	周縁幅	文様	
79a	無釉軒平瓦	26.1	28.2		8.1	2.1	唐草	0.8	0.7	珠11	2.9	3.1	0.8	1.6	珠1	40
79b	無釉軒平瓦	27.9	28	3.7	6.1	2.1	唐草	0.8	0.9	珠11	2.1	1.9	0.7	1.4	珠1	3
80	無釉軒平瓦				5	2.5	唐草	1	0.6	(珠?)、圈	1.5	0.9				7
81	無釉軒平瓦				5.3	2.2	唐草			(珠?)	2	1.1			珠2	2
82	無釉軒平瓦				5.2	2.3	唐草	0.8	0.9	(珠?)	1.5	1.4	1.1	0.5	珠2、圈	3
83	無釉軒平瓦				(7.3)	3.2	唐草	1.1	1.1	(珠?)	1.8	2.2	0.8	0.7	珠1	2
84	無釉軒平瓦						唐草		0.9	(珠?)		1.8				2
85	無釉軒平瓦				(5.2)	2.6	唐草	1	1	(珠?)	1.6	(1.1)	1	0.5	珠1	1
86	無釉軒平瓦				(7.2)	3.3	唐草	1	0.8	(珠?)	1.8	2.1			(珠?)	2
87	無釉軒平瓦				6.5	2.7	唐草	1.2	1.3	(珠?)	2.1	1.7				3
88	無釉軒平瓦	27.5		4	7	2.6	唐草	1.1	1.3	珠6	2.4	2	0.9	1	珠1	10
89	無釉軒平瓦				(6.2)	3.6	唐草	0.4	0.5	(珠?)	1.3	(1.3)	0.4	0.8	(珠1)	1
90b	無釉軒平瓦				6.5	2.3	唐草	0.8	0.7	(珠11?)	0.6	1.9	0.7	0.9	珠1	15
91	無釉軒平瓦				(5.3)	2.9	唐草	1.2	1.2	(珠?)	1.2	(1.2)	0.4			3
92	無釉軒平瓦				5.7	2.4	唐草	1.4	1.1	(珠9)	1.8	1.5	1.5	0.6	珠1	7
93	無釉軒平瓦	27.5	27.7	2.3	6.5	2.6	唐草	1.3	1.3	珠9	2.1	1.8	1.4	0.9	珠1	2
94	無釉軒平瓦				5.1	3.5	唐草	0.7	0.7	(珠?)	0.7	0.7	1		(珠?)	1
95	無釉軒平瓦				5	5	唐草									1
96	無釉軒平瓦				4.4	4.4	唐草									1
97	無釉軒平瓦				4.5	4.5	唐草									1
98	無釉軒平瓦				4.1	3.3	唐草	0.4	0.5		0.4	0.5				1
99	無釉軒平瓦				5	1.6	唐草	0.9	0.7	(珠?)	1.7	1.7			珠2	5
100b	無釉軒平瓦				5.5	4.6	唐草					0.8				10
101b	無釉軒平瓦				5.7	4.7	唐草	0.7	0.3		0.7			1.8		5
102	無釉軒平瓦				3.3	2.3	唐草				0.3	0.5				1

(つづく)

番号	種類	上弦幅	下弦幅	弦深	厚	内区		外区			周縁		脇区			出土点数
						厚	文様	上外区厚	下外区厚	文様	上周縁厚	下周縁厚	内縁幅	周縁幅	文様	
103	無釉軒平瓦				3.8	3.0	唐草				0.4	0.4				1
104	無釉軒平瓦				3.6	2.0	唐草				0.8	0.8				1
105	無釉軒平瓦				4.1	2.7	唐草				0.9	0.5				1
106	無釉軒平瓦				3.2	2.2	唐草	0.3	0.7	(珠?)	0.3	0.7				2
107	無釉軒平瓦				(3.9)	2.5	唐草				0.7	(0.6)				1
108	無釉軒平瓦				4.6	3.0	格子				1.0	0.6				1
109	無釉軒平瓦				4.1	3.4	格子	0.2	0.6		0.2	0.6				2
110	無釉軒平瓦				(4.0)	2.5	格子	0.3	0.3		0.8	0.7	0.2	0.8		1
111	無釉軒平瓦				2.9	2.2	剣頭		0.7			0.7	0.9			2
112	無釉軒平瓦				3.8	2.2	花文				0.5	1.1				1
113	無釉軒平瓦				(3.4)	(2.5)	巴文				0.5	(0.4)		0.8		1
114	無釉軒平瓦				(4.0)	(2.5)	巴文				0.8	(0.8)				1
115	無釉軒平瓦				6.1	2.3	唐草	1.2	0.9	(珠11)	1.8	2.0	1.1	2.5	珠1	4
116	無釉軒平瓦	(16.8)	(17.8)	1.8	3.6	3.1	唐草				0.2	0.3				9
117	無釉軒平瓦				3.7	2.8	唐草	0.4	0.5		0.4	0.5				1
118	無釉軒平瓦				3.7	2.6	唐草	0.2	0.6		0.5	0.6				1
119	無釉軒平瓦				(4.7)	2.8	唐草			(珠?)	1.0	0.9	0.8	0.8	珠1	1
120	無釉軒平瓦				6.9	2.6	唐草	1.2	1.2	(珠?)	1.8	2.3				1
121a	無釉軒平瓦				6.3	3.1	半花	0.8	0.8	(珠?)	1.2	1.8			(珠?)	4
122	無釉軒平瓦				5.9	2.6	剣頭	0.7	0.6	(珠?)	1.6	1.7	1.0	2.0	(珠?)	2
123	無釉軒平瓦				5.6	3.3	唐草	0.6	0.5		1.3	1.0	0.7	0.3		1
124	無釉軒平瓦	20.7	21.1	1.7	5.3	3.5	唐草				1.0	0.8				1
125	無釉軒平瓦				4.6	3.3	唐草				0.6	0.7				1
126	無釉軒平瓦				4.5	3.2	唐草				0.6	0.6				1
127b	無釉軒平瓦				4.6	1.5	唐草				1.1	1.2	0.9	1.5		2
128b	無釉軒平瓦				5.7	2.8	種字	0.3	0.3		1.4	1.3	0.3	1.1		6
129b	無釉軒平瓦				3.3	1.4	唐草				0.6	1.2				3
130b	無釉軒平瓦				4.3	2.3	唐草				1.3	0.7				3
131a	無釉軒平瓦				3.6	1.9	唐草				0.8	1.0				2
132	無釉軒平瓦				5.1	3.5	唐草	0.2	0.3		0.6	0.9				1
133	無釉軒平瓦				5.2	2.2	唐草	1.7	1.6	(珠?), 圈					圈	1
134	無釉軒平瓦						唐草									1
135	無釉軒平瓦				4.4	3.1	半花				0.7	0.6				1

表8 緑釉軒丸瓦観察表

番号	接合方法	成形・調整	施釉	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯	出土構	図 版
1a	一本造	瓦当部裏面を丁寧削る、裏面の凹みには布痕が残る	緑色釉	灰褐色、粘質、硬質		修理職 (「左」瓦屋)	SD30	9・38 挿図 27
1b	一本造	1aと同様	緑色釉	灰褐色、粘質、軟質		修理職 (「左」瓦屋)	北トレンチ 包含層	9・38
2	一本造	瓦当部裏面の布目は荒い	緑色釉	褐灰色、粘質、軟質		木工寮 栗栖野瓦屋?	北トレンチ F10 区包含層	9・38
3	一本造	瓦当部側面篋削り、細部の成形・調整不明	明緑色釉	灰褐色、砂質、軟質	一乗寺向畑町遺跡 図7		北トレンチ F10 区包含層	9・38
4a		瓦当部側面ヘラケズリ	緑色釉	灰褐色、粘質、軟質	東寺 b 図 23-NM23	修理職 池田瓦屋	SK25	9・38
4b		周縁に2箇所、重ね焼きの目痕がある	暗緑色釉、釉が厚い	灰色、粘質、硬質		修理職 池田瓦屋	北トレンチ 包含層	9・38

表9 緑釉軒平瓦観察表

番号	顎の形態	接合方法	成形・調整	施釉	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯	出土構	図 版
5a	段顎		凹面前端面、側面、顎ヘラケズリ	明緑色釉	灰色、粘質、軟質		修理職 (「左」瓦屋)	SK25	9・39
5b	段顎		凹面前端面、側面、顎ヘラケズリ	緑色釉	灰色、粘質、軟質		修理職 (「左」瓦屋)	SD30	9・39
6	段顎		凹面前端面、側面、顎ヘラケズリ	明緑色釉、施釉範囲が広く凹・凸面10cm以上	灰褐色、砂質、軟質		木工寮 栗栖野瓦屋	SD39	10・39
7	段顎		凹面前端面、側面、顎、凸面ヘラケズリ	施釉範囲が凹面3cm、凸面6cm	灰褐色、砂質、軟質		修理職 池田瓦屋	SK25	10・39
8	段顎		凹面前端面、側面、顎、凸面ヘラケズリ	緑色釉	灰褐色、粘質、軟質			SK25	10・39
9	段顎		顎ヘラケズリ、他不明	暗緑色釉	灰褐色、砂質、軟質	内裏内郭回廊 388～390	木工寮 小野瓦屋	SK25	10・39
10	段顎		軟質で細部の成形・調整不明	明緑色釉	灰褐色、砂質、軟質			SD30	10
11	段顎		凹面前端面、側面、顎、凸面ヘラケズリ	暗茶緑色釉	灰茶色、粘質、硬質		修理職 河上瓦屋	SK25	10・39

表10 緑釉鬼瓦・道具瓦・丸瓦観察表

番号	法 量	成形・調整	施釉	色 調・胎 土・焼 成	出 土 構	図 版
12	長辺 11.0cm、短辺 6.5cm	篋で凹線を掘り、毛を表現する	緑色釉	灰褐色、粘質、硬質	SK47	11・40
13	全長 (15.4)cm、幅 12.9cm、厚さ 1.9cm	斜格子タタキ、半截痕あり	緑色釉	灰褐色、粘質、軟質	SK25	11・40
14	全長 (16.2)cm、幅 12.6cm、厚さ 2.2cm	斜格子タタキ、硬質、半截痕あり	緑色釉	灰茶色、粘質、硬質	SK25	11
15	全長 (10.0)cm、幅 12.5cm、厚さ 2.1cm	縄タタキ	緑色釉	灰褐色、砂質、硬質	SK25	11
16	全長 (17.6)cm、幅 14.3cm、厚さ 1.5cm	縄タタキ、軟質、半截痕あり	緑色釉	灰色、砂質、軟質	SK25	11・40
17	天地 12.4cm、左右 15.0cm	上部は左右とも割り、対称形にする	緑色釉、凹面に施釉する	灰褐色、粘質、軟質	SD30	11・40
18	天地 7.7cm、左右 6.2cm	凸面ヘラケズリ、段の下部ヘラケズリ	暗緑色釉、凸面に施釉する	灰茶色、粘質、硬質	東トレンチ 近世整地層	挿図 29

(つづく)

番号	法 量	成 形・調 整	施 釉	色 調・胎 土・焼 成	出 土 遺 構	図 版
19	全長不明、幅 18.2 cm、玉縁長 6.6cm	凸面はヘラケズリ、丁寧な調整	緑色釉、銀化している	灰茶色、粘質、硬質	SD30	12・40
20	全長 35.9cm、幅 15.9cm	凹面は斜格子のタタキ、前端部は荒いハケメ	緑色釉	灰青色、粘質、硬質	SK25	12・40
21	全長 36.1cm、幅 15.8cm	凹面は斜格子のタタキ、前端部は荒いハケメ	緑色釉	灰褐色、粘質、硬質	SK25	12 挿図 28

表 11 無釉軒丸瓦観察表

番号	接合方法	成 形・調 整	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯・生産国	出 土 遺 構	図 版
22		瓦当部裏面ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質	内裏 130		北トレンチ近世整地層	13・41
23		瓦当部裏面・側面ナデ	灰黒色、粘質、硬質	円宗寺 図版 9-5		SG05B	13・41
24		瓦当部裏面ヘラケズリ	灰色、粘質、硬質			SK25	13・41
25		瓦当部裏面ヘラケズリ、瓦当部薄い	黒灰色、粘質、軟質			北トレンチ近世整地層	13
26	一本造	瓦当部裏面布目、側面・丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質	内裏 90・91	木工寮 栗栖野瓦屋	北トレンチ包含層	13・41
27	一本造	丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、砂質、軟質	平安京康楽堂 図版 40-T 6	木工寮 栗栖野瓦屋	SD30	13・41
28		瓦当部裏面ヘラケズリ	灰黒色、砂質、硬質		木工寮 栗栖野瓦屋	南トレンチ近世整地層	13
29		細片、成形・調整不明	灰黒色、粘質、硬質	内裏内郭回廊 92	木工寮 栗栖野瓦屋	北トレンチ包含層	13・41
30	一本造	瓦当部裏面布目、丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質	朝堂院 81	木工寮 栗栖野瓦屋	北トレンチ包含層	13
31	一本造	瓦当部裏面布目、丸瓦部ヘラケズリ	灰色、粘質、硬質	右近衛府 80	木工寮 栗栖野瓦屋	SD30	14・41
32	一本造	瓦当部側面ヘラケズリ	灰黒色、粘質、硬質	内裏 118	木工寮 小野瓦屋	北トレンチ包含層	14
33		細片、成形・調整不明	灰黒色、砂質、硬質	東寺 b 図版 23-NM26	木工寮 栗栖野瓦屋	SD31 西肩	14
34		瓦当部裏面ナデ、側面・丸瓦部ヘラケズリ	青灰色、砂質、硬質		修理職 森ヶ東瓦屋	SK48	14・42
35		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	灰黒色、粘質、軟質	内裏 98	修理職 森ヶ東瓦屋	SD30	14・42
36		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	青灰色、砂質、硬質	高陽院 図版 7-14	修理職 森ヶ東瓦屋	北トレンチ近世整地層	14・42
37		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質	東寺 b 図版 23-NM34	修理職 森ヶ東瓦屋	SD03A	14・42
38		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部未調整	黒灰色、粘質、軟質	高陽院 図版 7-17	修理職 森ヶ東瓦屋	遺構確認トレンチ	14・42
39		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	灰黒色、粘質、軟質	東洞院大路 160	修理職 森ヶ東瓦屋	不明	14・42
40		瓦当部裏面・側面ナデ	灰青色、粘質、硬質	高陽院 図版 7-15	大宮北山ノ前瓦屋	北トレンチ近世整地層	14・42
41		瓦当部裏面・側面ナデ	灰黒色、粘質、軟質	内裏蘭林坊 201	栗栖野瓦屋	北トレンチ包含層	15・43
42		瓦当部裏面ナデ、側面ヘラケズリ	淡灰褐色、粘質、軟質		栗栖野瓦屋	表採	15・43
43		瓦当部裏面ナデ、側面・丸瓦部ヘラケズリ	灰褐色、粘質、軟質		栗栖野瓦屋	北トレンチ包含層	15

(つづく)

番号	接合方法	成形・調整	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯・生産国	出土遺構	図 版
44		瓦当部裏面撫で、側面ヘラケズリ	灰褐色、粘質、軟質		栗栖野瓦屋	北トレンチ 攪乱層	15・43
45		瓦当部裏面撫で、側面ヘラケズリ	灰褐色、粘質、軟質	平安宮真言院 図 22-15	栗栖野瓦屋	北トレンチ 近世整地層	15・43
46		瓦当部裏面撫で、側面ヘラケズリ	灰褐色、粘質、軟質	下鴨神社 図 18-224	栗栖野瓦屋	遺構確認トレンチ	15・43
47		瓦当部裏面ナデ、細部は小片で不明	灰色、粘質、軟質		栗栖野瓦屋	SD19	15・43
48		瓦当部裏面ナデ、側面ヘラケズリ	灰黒色、粘質、硬質	鳥羽離宮田中殿 図 6-2	栗栖野瓦屋	北トレンチ 包含層	15・43
49		瓦当部裏面ナデ	青灰色、砂質、硬質		栗栖野瓦屋	SD04	15
50		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	灰茶色、粘質、硬質		栗栖野瓦屋	SD03A	15・43
51		瓦当部裏面・側面ナデ、離れ砂	灰黒色、砂質、軟質		栗栖野瓦屋	遺構確認トレンチ	16
52		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	青灰色、砂質、硬質		栗栖野瓦屋	北トレンチ 近世整地層	16・44
53		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	灰茶色、粘質、硬質		栗栖野瓦屋	南トレンチ 近世整地層	16
54		瓦当部裏面ナデ	灰青色、粘質、硬質		栗栖野瓦屋	東トレンチ 攪乱層	16・44
55		瓦当部裏面ナデ	黒灰色、粘質、軟質		栗栖野瓦屋	SK09	16
56		瓦当部裏面ナデ、側面ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質		「近京窯」	SK47	16・44
57		瓦当部裏面ナデ、側面ヘラケズリ、丸瓦部ヘラケズリ	灰青色、粘質、硬質	朝堂院 145	「近京窯」	東トレンチ 包含層	16・44
58		焼成甘く、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘質、軟質		「近京窯」	東トレンチ 包含層	16・44
59		瓦当部裏面ナデ、焼成甘く、細部の成形・調整不明	灰色、粘質、硬質		「近京窯」	SD19	16
60		瓦当部裏面・丸瓦部ナデ	灰黒色、粘質、軟質	三条西殿 231	「近京窯」	不明	16・44
61		瓦当部裏面ナデ、細部は不明	灰黒色、粘質、軟質	法金剛院東辺 図 3-6	「近京窯」	東トレンチ 近世整地層	17・44
62		瓦当部裏面・側面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、粘質、軟質	鳥羽離宮南殿 図 32-B2・B1	「近京窯」	北トレンチ 近世整地層	17・44
63		瓦当部裏面・側面ナデ、瓦当部裏面は亀甲状、離れ砂	灰黒色、粘質、軟質	鳥羽離宮第 112 次 図版 39-3	「近京窯」	東トレンチ 近世整地層	17・45
64		瓦当部裏面・側面ナデ、瓦当部裏面は亀甲状、側面ナデ	灰黒色、粘質、軟質		「近京窯」	SK25	17・45
65		瓦当部裏面ナデ	灰黒色、粘質、硬質		「近京窯」	SD04	17・45
66		瓦当部裏面・側面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰黒色、粘質、硬質		播磨国	北トレンチ 攪乱層	17・45
67		瓦当部裏面ナデ、側面篋削り	灰色、粘質、軟質		播磨国	SX16	17・45
68		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ、側面に釉が付着する	灰黒色、粘質、硬質	土御門丸丸内裏 図 20-3?	播磨国	北トレンチ 攪乱層	17・45
69		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰青色、砂質、軟質		大和国系	北トレンチ 近世整地層	17・45
70		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰色、粘質、硬質		讃岐国	SX16	17・45

(つづく)

番号	接合方法	成形・調整	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯・生産国	出土構	図 版
71		瓦当部裏面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	灰青色、粘質、硬質		尾張国	SG05	18・46
72		瓦当部裏面・側面ヘラケズリか、瓦当部の厚さ均一	灰黒色、粘質、軟質			不明	18・46
73a		瓦当部裏面・側面ケズリ、丸瓦部ヘラケズリ、瓦当面円盤状	青灰色、粘質、硬質		播磨国系	SD02	18・46 挿図 32
73b		瓦当部裏面・側面ケズリ、丸瓦部ナデ	青灰色、粘質、硬質		播磨国系	北トレンチ 近世整地層	18・46 挿図 32
74		瓦当部裏面・側面ナデ	青灰色、粘質、硬質	東寺 a 図版 14-6	播磨国系	東トレンチ 近世整地層	18
75		瓦当部裏面・側面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	青灰色、粘質、硬質			北トレンチ 近世整地層	18・46
76		瓦当部裏面・側面ナデ	灰黒色、粘質、軟質			北トレンチ 攪乱層	18・46
77		瓦当部裏面・側面ナデ	灰色、粘質、軟質			SD04	18・46
78		瓦当部裏面・側面ナデ、丸瓦部ヘラケズリ	黒灰色、粘質、硬質			SX14	18

表 12 無軸軒平瓦、灰軸軒平瓦、無軸鬼瓦観察表

番号	類の形態	接合方法	成形・調整	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯・生産国	出土構	図 版
79a	段類		上・下周縁に粘土を足し、1cmほど周縁を広げる。凹目の布目は普通	青灰色、粘質、硬質	内裏蘭林坊 418・419		SD30	19・47
79b	段類		周縁は通常の幅、凹面前端面・側面・類・凸面を全面ヘラケズリ、凹面の布目は荒い、79aも同様の調整	青灰色、粘質、硬質			SD30	47 挿図 30
80	段類		凸面ナデ調整、焼成軟質、細部の成形・調整は不明	灰黒色、粘質、軟質			SK25	19・47
81	段類		側面・類・ヘラケズリ、その他の部分は焼成が軟質で成形・調整は不明	灰黒色、粘質、軟質			SK25	19・47
82	段類		凹面前端面・側面・類をヘラケズリする、凹面の布目は普通	灰黒色、粘質、軟質			SX16	19
83	段類		凹面前端面・側面・類・凸面を全面ヘラケズリする	灰黒色、砂質、軟質		木工寮 栗栖野瓦屋	北トレンチ 包含層	19
84	段類		少片で細部の成形・調整不明	灰黒色、砂質、軟質	豊楽院 370・371	修理職 池田瓦屋	SD30	19・47
85	段類		凹面の布目は普通、二次的な熱を受けピンク色をする	灰黒色、粘質、軟質	大極殿 367・368	木工寮 栗栖野瓦屋	SD30	19
86	段類		焼成軟質、細部の調整は不明	灰黒色、粘質、軟質			北トレンチ 包含層	19・47
87	段類		側面・類・凸面ヘラケズリ、凹面の布目は荒い	灰色、砂質、軟質		木工寮 小野瓦屋	SK25	19・47
88	段類		凹面前端面・側面・凸面を全面ヘラケズリ、布目は荒い、ほぼ完形	灰青色、砂質、硬質		修理職 河上瓦屋	SK24	20・48
89	段類		凸面ヘラケズリ、凹面の布目は普通	青灰色、砂質、硬質	朝堂院 411	修理職 河上瓦屋	SD30	20・48
90a	段類		凹面前端面をヘラケズリする、凹面の布目は普通	灰青色、砂質、軟質			北トレンチ 包含層	20
90b	段類		凹面前端面・側面・類・凸面を全面ヘラケズリする、瓦当面に指紋が目立つ、凹面の布目は普通	青灰色、砂質、硬質			SX16	20・48
91	段類		凹面ヘラケズリ、凸面には指で開けた約1cmの穴がある	青灰色、粘質、硬質	広隆寺 図版 10-7	修理職 森ヶ東瓦屋	SK25	20・48

(つづく)



番号	顎の 形態	接合 方法	成 形・調 整	色調・胎 土・焼成	同 範 例	生産窯・ 生産 国	出土 遺構	図 版
92	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、布目は普通、離れ砂	青灰色、粘 質、硬質		修理職 森ヶ東瓦屋	SK25	20・48
93	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面ナデ、焼成軟質、調整不明	灰褐色、粘 質、軟質		修理職 森ヶ東瓦屋	SD30	20・48
94	段顎		凹面前端面・側面・顎・凸面を全面 ヘラケズリ、布目は普通、離れ砂	青灰色、粘 質、硬質	朝堂院 450	修理職 森ヶ東瓦屋	SX16	21・49
95	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、布目は普通、離れ砂	青灰色、粘 質、硬質		修理職 森ヶ東瓦屋	北トレンチ 近世整地層	21・49
96	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、凹面の布目は普通	青灰色、粘 質、硬質		修理職 森ヶ東瓦屋	北トレンチ 包含層	21・48
97	段顎	半折	焼成軟質、細部の調整不明	黒灰色、粘 質、軟質	高陽院 図版 12-41	修理職 森ヶ東瓦屋	東トレンチ 包含層	21・49
98	曲線		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、凹面の布目は荒い	灰青色、粘 質、硬質			南トレンチ 攪乱層	21・49
99	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、布目は普通、離れ砂	灰黒色、粘 質、硬質	豊楽院 472		SD31 西肩	21・49
100a	段顎	半折	顎ヘラケズリ、凸面はナデ、凹面の 布目は荒い、二次的な熱で灰褐色	灰褐色、粘 質、硬質		栗栖野瓦屋?	北トレンチ 包含層	21
100b	段顎	半折	凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、凹面の布目は荒い	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋?	遺構確認ト レンチ	21・49
101a	段顎		側面・顎はヘラケズリ、凸面はナデ	灰黒色、粘 質、軟質	土御門烏丸内裏 図 22-6	栗栖野瓦屋?	SK25	21
101b	段顎		側面・顎はヘラケズリ、凸面はナデ、 布目普通、刻文が凹面にある	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋?	SK25	21・49 挿図 31
102	段顎	半折	顎はヘラケズリ、凸面はナデ	灰黒色、粘 質、軟質	鳥羽離宮第 115 次 図 18-6	栗栖野瓦屋?	北トレンチ 近世整地層	21・49
103	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	SD04	21・49
104	段顎	半折	顎はヘラケズリ、凸面はナデ	灰褐色、粘 質、軟質	烏丸線 図版 31- No. 34-70	栗栖野瓦屋	北トレンチ 近世整地層	21・50
105	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰茶色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	北トレンチ 攪乱層	21・50
106	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	SD04	22・50
107	段顎	半折	側面はヘラケズリ、凸面はナデ	灰黒色、砂 質、軟質	栢杜遺跡 34 ページ-H	栗栖野瓦屋	北トレンチ 近世整地層	22・50
108	段顎	半折	凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、凹面の布目は普通	灰黒色、粘 質、軟質	冷泉院 図 10-119	栗栖野瓦屋	SD31 西肩	22・50
109	段顎		顎はヘラケズリ、凸面は撫で、凹面 の布目は普通	青灰色、粘 質、硬質	内裏 555	栗栖野瓦屋	SK25	22・50
110	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘 質、硬質		栗栖野瓦屋	北トレンチ 包含層	22・50
111	段顎	半折	顎はヘラケズリ、凸面はナデ	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	SX16	22・50
112	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	北トレンチ 近世整地層	22
113	段顎	半折	凹面はナデ、他は軟質で不明、凸面 に篋の刻文がある	灰黒色、粘 質、軟質		栗栖野瓦屋	SK25	22 挿図 31
114	段顎	半折	焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、粘 質、軟質	烏丸線 図版 31- No. 34-70	栗栖野瓦屋	北トレンチ 包含層	22
115	段顎		凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、 凸面はナデ、凹面の布目は普通	青灰色、粘 質、硬質		「近京窯」	北トレンチ 包含層	22・50

(つづく)

番号	顎の形態	接合方法	成形・調整	色調・胎土・焼成	同 範 例	生産窯・生産国	出土遺構	図 版
116	段顎	半折	側面・顎はヘラケズリ、凸面はナデ、布目は普通、左側面に刻文がある	灰青色、粘質、硬質	法金剛院 図 56-25	「近京窯」	東トレンチ 近世整地層	22・50 挿図 31
117	段顎	半折	凹面前端面・側面・顎はヘラケズリ、凸面はナデ、凹面の布目は荒い	青灰色、粘質、硬質		「近京窯」	南トレンチ 近世整地層	22・50
118	段顎	半折	焼成が軟質で細部の成形・調整不明、凹面の布目は普通	灰色、粘質、軟質		「近京窯」	東トレンチ 近世整地層	22・50
119	段顎	半折	顎はヘラケズリ、凸面はナデ、細部の成形・調整不明	灰褐色、粘質、軟質	左京八条二坊 図 30-50	「近京窯」	遺構確認ト レンチ	22・51
120	段顎	半折	瓦当面をミガキ、平滑にする、胎土の色調は灰褐色で緑釉軒瓦と同様	灰褐色、粘質、軟質		「近京窯」	SD19	22・51
121a	段顎		焼成軟質、細部の器形・調整不明	灰黒色、粘質、軟質		「近京窯」	遺構確認ト レンチ	23
121b	段顎		凹面前端面・側面・顎・凸面をヘラケズリする、凹面の布目は普通	灰黒色、粘質、軟質		「近京窯」	北トレンチ 近世整地層	23・51
122	段顎		側面・顎はヘラケズリ、凸面はナデ、凹面の布目は荒い	灰青色、粘質、硬質	内膳司 559	「近京窯」	不明	23・51
123	段顎		顎・凸面は横方向の叩き、凹面の布目は普通	灰青色、粘質、硬質		丹波国系	表採	23・51
124	段顎		側面・顎はヘラケズリ、凸面は平行タタキ	灰青色、粘質、硬質	鳥羽離宮第 111 次 図版 38-6?	播磨国 魚橋瓦窯	SK25	23・51
125	段顎	包込	凹面前端面・側面・顎・凸面をナデる、凹面の布目は普通	青灰色、粘質、硬質		播磨国 釜ノ口 1 号	SD04	23・51
126	段顎	包込	凹面前端面・側面・顎・凸面をナデる、凹面の布目は荒い	青灰色、粘質、硬質		播磨国	SD04	23・51
127a	段顎	包込	凹面前端面・側面・顎・凸面をナデる、凹面の布目は普通	青灰色、砂質、硬質		播磨国	SD04	23
127b	段顎	包込	(127a・b) は瓦当面に 0.8cm ほどの粘土を継ぎ足し、文様面を深くする	青灰色、粘質、硬質		播磨国	SD04	23・51
128a	段顎	包込	凹面前端面・側面・顎・凸面をナデる、顎はナデの後ヘラケズリする	青灰色、粘質、硬質		播磨国 与呂木窯	SD03	23 挿図 32
128b	段顎	包込	128a と同様の成形・調整	青灰色、粘質、硬質		播磨国 与呂木窯	SD02	23・51 挿図 32
129a	曲線		凹面前端面はヘラケズリ、顎・凸面はナデる、凹面の布目は普通、離れ砂	灰黒色、砂質、硬質	法金剛院 図 56-26	大和国系	北トレンチ 包舎層	24
129b	曲線		凹面前端面・側面はヘラケズリ、凸面はナデる、凹面の布目は普通	灰黒色、砂質、硬質		大和国系	東トレンチ 近世整地層	24・52
130a	曲線		凹面の布目は普通、離れ砂	青灰色、砂質、硬質		大和国系	東トレンチ 近世整地層	24・52
130b	曲線		焼成軟質、細部の成形・調整不明	灰黒色、砂質、硬質		大和国系	東トレンチ 近世整地層	24・52
131a	曲線		凹面前端面はケズリ、側面・凸面はナデ、凹面の布目は荒い、離れ砂	青灰色、粘質、硬質		大和国系	東トレンチ 近世整地層	24・52
131b	曲線		凹面前端面はケズリ、側面・凸面はナデ、凹面の布目は荒い、離れ砂	灰青色、粘質、硬質		大和国系	東トレンチ 近世整地層	24・52
132	曲線		上周縁を瓦当面と同じ高さにケズリ落とす、凹面前端面は削り、顎・凸面はナデ、布目は普通	灰黒色、粘質、硬質		大和国系	北トレンチ 近世整地層	24・52
133	曲線		凸面右上から左下方向にタタキ	灰黒色、粘質、硬質		讃岐国系	北トレンチ 近世整地層	24・52
134			現物不明			讃岐国		24
135	段顎		顎・側面ヘラケズリ、凹面ナデ、瓦当面に灰釉を施軸する	灰色、粘質、硬質		尾張国系	SK25	24・52

(つづく)

番号	法 量	成 形・調 整	色調・胎土・焼成	備 考	出 土 遺 構	図版
136	縦 25cm 横 30cm	表面はナデ、裏面はヘラケズリ、目・眉など凸部には細砂を混入する	灰青色、粘質、硬質		SK25	24・52

表 13 銭貨の法量表

番号	銭 種	種 類	直 径	内 径	厚 さ	重 量	出 土 遺 構
18	寛永通寶	銅銭	2.41	0.54	0.12	2.27	北トレンチ F9 区近世遺物包含層
19	寛永通寶	銅銭	2.41	0.59	0.11	2.17	東トレンチ G6 区近世遺物包含層
20	寛永通寶	鉄銭	2.41	0.5	0.18	2.83	北トレンチ H9 区近世遺物包含層
21	文久永寶	銅銭	(2.38)	0.6	0.11	1.97	北トレンチ D11 区攪乱層

表 9～12 の同范例の文献

- 平安宮大極殿・朝堂院・内裏・内裏内郭回廊・内裏蘭林坊・豊楽殿・内膳司  
『平安宮古瓦図録』平安博物館編 雄山閣出版株式会社 1977 年
- 平安宮康楽堂 『平安京跡発掘調査概報』京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978- II 1978 年
- 平安宮真言院 『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 京都市文化観光局文化財保護課 1976 年
- 平安京右近衛府・羅城門・東洞院大路  
『平安宮古瓦図録』平安博物館編 雄山閣出版株式会社 1977 年
- 高陽院 『平安京跡発掘調査概報』昭和 56 年度 京都市文化観光局 1982 年
- 平安京土御門鳥丸内裏  
『平安京土御門鳥丸内裏跡—左京一條三坊九町—』平安京跡研究調査報告第 10 輯 財団法人 古代学協会 1983 年
- 右京八条二坊 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 61 年度 京都市文化観光局 1987 年
- 東寺 a 『財団法人真言宗京都学園洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』東寺境内発掘調査団洛南高校班 1981 年
- 東寺 b 『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』別刷 近畿大学理工学部建築学科杉山研究室 1983 年
- 平安京(鳥丸線) 『京都市高速鉄道鳥丸線内遺跡調査年報』I 1974、75 年度 京都市高速鉄道鳥丸線内遺跡調査会 1980 年
- 円宗寺 『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和 55 年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981 年
- 法金剛院 『埋蔵文化財発掘調査概報』1970 京都府教育委員会 1970 年
- 法金剛院東辺 『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和 59 年度 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1987 年
- 広隆寺 『京都府史蹟勝地調査会報告』1 「広隆寺礎石及び古瓦」京都府 1919 年
- 鳥羽離宮南殿 『埋蔵文化財発掘調査概報』1968 「鳥羽離宮跡出土瓦の整理」京都府教育委員会 1968 年
- 鳥羽離宮田中殿 『京都市埋蔵文化財年次報告』1974- IV 京都市文化観光局文化財保護課 1975 年
- 鳥羽離宮第 111・112・115 次  
『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 60 年度 京都市文化観光局 1986 年
- 栢社遺跡 『栢社遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1975 年
- 下鴨神社・冷泉院  
『坂東善平収蔵品目録』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1980 年
- 一乗寺向畑町遺跡 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和 61 年度 京都市文化観光局 1987 年